

# ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

VIII-3

1981

滋賀県教育委員会  
滋賀県文化財保護協会

# ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

VIII-3

1981

滋賀県教育委員会  
財団法人 滋賀県文化財保護協会

001.2  
86.27

## はじめに

県下のほ場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査も、はや八年を迎え、ますます工事側と調査側の調整が困難をきわめること再々となっている。

本書はこの困難さのなかでも、特に人材と時間の不足に反して、激増する調査資料を公開すべくまとめたもので、古代近江を考えるうえで新たな知見が数多く明らかにされている。

本報告書の作成にあたって、調査から整理までの一貫の作業の中で、地元教育委員会、地元住民、先生諸氏、学生諸君の絶大な指導、助言、援助を得た。ここに記して謝意を表したい。

昭和56年3月

滋賀県教育委員会  
文化財保護課  
課長 沢 悠光

## 例　　言

1. 本報告書は、昭和55年度国庫補助事業対象となった、団体當ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、湖西地区（高島郡）の調査成果を収載したものである。
2. 調査にあたっては、地元マキノ町、今津町、新旭町の役場、教育委員会、今津県事務所をはじめ、マキノ町海津、西牧野、今津町梅原、弘川、新旭町針江の方々から種々の協力を得た。
3. 現地調査は、本県教育委員会文化財保護課技師兼康保明を担当者とし、財団法人滋賀県文化財保護協会嘱託山口順子、同神谷友和を主任調査員に得て実施した。また、針江遺跡については、新旭町教育委員会社会教育課主事岡司高志氏にお願いした。
4. 調査に協力を得た諸氏については、各遺跡ごとに記した。厚く感謝の意を表する次第である。
5. 本報告書は、兼康保明が編集し、図版作成、レイアウト、校正、遺物写真等で、山口順子、神谷友和、宮崎幹也（滋賀県文化財保護協会）、堀内宏司、寿福滋、米田実の諸氏の多大なる協力を得た。

また、各章の文責は、目次に明記した。

# 目 次

第1章 高島郡マキノ町海津遺跡	兼康保明、米田実	
1.はじめに	1	
2.調査の経過	1	
3.調査の結果	2	
4.遺物	2	
第2章 高島郡マキノ町西牧野遺跡	兼康保明	
1.はじめに	6	
2.調査の経過	6	
3.調査の結果	6	
第3章 高島郡今津町梅ヶ原遺跡	兼康保明	
1.はじめに	7	
2.調査の経過	7	
第4章 高島郡今津町弘川遺跡	山口順子、兼康保明	
1.はじめに	9	
2.位置と環境	10	
3.調査の経緯	10	
4.遺跡の概観	11	
(1)第1区の遺構	(2)第2区の遺構	(3)第3区の遺構
(4)第4区の遺構	(5)第5区の遺構	(6)第6区の遺構
5.遺物	30	
(1)縄文時代	(2)弥生時代	(3)飛鳥時代～平安時代
(4)平安時代後期	(5)鎌倉時代以降	(6)石器・石製品
(7)土製品		
弘川遺跡出土土器観察表	36	
6.まとめ	67	
第5章 高島郡新旭町針江遺跡	國司高志	
1.はじめに	69	
2.調査の経過	69	
3.調査の結果	69	
4.まとめ	72	

## 図版目次

### 高島郡マキノ町海津遺跡

図版1 遺跡全景・遺跡より海津をのぞむ・トレンチの状況

### 高島郡マキノ町西牧野遺跡

図版2 調査地より西牧野をのぞむ・調査状況・ピット検出トレンチ

### 高島郡今津町弘川遺跡

図版3 第Ⅰ次調査、調査地全景（北より）・調査地全景（東より）

図版4 壊穴住居1～3（西より）

図版5 壊穴住居4（北西より）・土坑2（南西より）

図版6 壊穴住居5（南西より）・壊穴住居6（南西より）

図版7 第6トレンチ全景（西より）・壊穴住居7（西より）

図版8 掘立柱建物1、2（東より）・掘立柱建物1（北より）

図版9 掘立柱建物3（北北東より）・第49トレンチ足跡検出状況（東より）

図版10 第16トレンチ全景（東より）及び甕棺出土状況

図版11 第Ⅱ次調査、遺跡全景（南より）・遺跡全景（北より）

図版12 壊穴住居9（南西より）・同上、磨製石剣出土状況（東より）

図版13 第28、29トレンチ（北東より）・壊穴住居8及び土坑9（南西より）

図版14 壊穴住居11（南より）・同上、ベット状遺構下土器出土状況

図版15 壊穴住居12（北より）・壊穴住居13（東より）

図版16 壊穴住居14及び溝2（西より）・掘立柱建物4（東より）

図版17 第19トレンチ全景（北東より）

図版18 方形周溝墓土器出土状況

図版19 木棺墓（南南西より）・溝3（東より）

図版20 第13、14トレンチ全景（東より）

図版21 第Ⅲ次調査、遺跡全景（北より）・遺跡全景（東より）

図版22 壊穴住居15（北東より）・壊穴住居16（西より）

図版23 壊穴住居18（南東より）・壊穴住居19（北西より）

図版24 掘立柱建物5（北東より）・掘立柱建物6（北東より）

図版25 溝4検出状況（東より）・溝4検出状況（南西より）

図版26 遺物 壊穴住居1、2、土坑3

図版27 遺物 壊穴住居1、2

図版28 遺物 壊穴住居2、4

図版29 遺物 壊穴住居4、5

図版30 遺物 壊穴住居5、7、土坑3、表採

図版31 遺物 第16トレンチ（甕棺）・壊穴住居1

図版32 遺物 壊穴住居1・壊穴住居2

図版33 遺物 壊穴住居2・壊穴住居5

図版34 遺物 壊穴住居6、7・土坑2

図版35 遺物 土坑1、3・壊穴住居6、第25トレンチ、第25、27拡張トレンチ

図版36 遺物 第5トレンチ

図版37 遺物 壊穴住居9、10、11

図版38 遺物 壊穴住居11、12、方形周溝墓

図版39 遺物 壊穴住居13、土坑6、10、溝1、土坑12

図版40 遺物 土坑12

図版41 遺物 土坑12

図版42 遺物 壊穴住居8・壊穴住居9

- 図版43 遺物 壊穴住居11・壊穴住居12
- 図版44 遺物 壊穴住居10、13、14・土坑7
- 図版45 遺物 方形周溝墓
- 図版46 遺物 土坑6、第10トレンチ落ち込み・土坑4、5、ピット1、土坑9、11
- 図版47 遺物 土坑12
- 図版48 遺物 土坑12
- 図版49 遺物 土坑12
- 図版50 遺物 土坑12
- 図版51 遺物 溝1
- 図版52 遺物 溝1
- 図版53 遺物 壊穴住居16（紡錘車）、壊穴住居18、19、溝4-A、4-B
- 図版54 遺物 溝4、4-B、6、壊穴住居16、土坑13
- 図版55 遺物 壊穴住居17、18、土坑14、15・壊穴住居19
- 図版56 遺物 壊穴住居19・溝4
- 図版57 遺物 溝4・溝4-B
- 図版58 遺物 溝4-B
- 図版59 遺物 溝4-B
- 図版60 遺物 溝4-B・溝4-A、溝5
- 図版61 遺物 第I、II次調査・石製品
- 図版62 遺物 第I、II、III次調査・石製品
- 高島郡今津町針江遺跡
- 図版63 第2トレンチ第4ブロック（西より）・第2トレンチSD2（南より）
- 図版64 第3トレンチ第5ブロック（南より）・第3トレンチ礫群
- 高島郡今津町弘川遺跡（実測図版）
- 図版65 壊穴住居1～3、土坑2
- 図版66 壊穴住居4、5
- 図版67 壊穴住居6、7
- 図版68 壊穴住居9、土坑12・壊穴住居8、土坑9
- 図版69 壊穴住居10、壊穴住居11、壊穴住居11ベット状造構下層
- 図版70 壊穴住居12、13
- 図版71 壊穴住居14、掘立柱建物4
- 図版72 方形周溝墓
- 図版73 壊穴住居15、16
- 図版74 壊穴住居18、19
- 図版75 掘立柱建物5、6、壊穴住居17
- 図版76 遺物 壊穴住居1
- 図版77 遺物 壊穴住居1、2
- 図版78 遺物 壊穴住居2、4
- 図版79 遺物 壊穴住居4、5
- 図版80 遺物 壊穴住居5、6、7
- 図版81 遺物 土坑1、2、3、第25、27拡張トレンチ、表採
- 図版82 遺物 第5トレンチ
- 図版83 遺物 壊穴住居8、9、10
- 図版84 遺物 壊穴住居11、12
- 図版85 遺物 壊穴住居13、14、土坑4、5、6、7、ピット1
- 図版86 方形周溝墓
- 図版87 遺物 第10トレンチ落ち込み、溝1、土坑9、10、11、12
- 図版88 遺物 土坑12
- 図版89 遺物 土坑12
- 図版90 遺物 壊穴住居16、17、18、土坑13、14、15
- 図版91 遺物 壊穴住居19
- 図版92 遺物 溝4、4-A
- 図版93 遺物 溝4-B
- 図版94 遺物 溝4-B、溝5、6
- 図版95 遺物 第I、II次調査・石製品
- 図版96 遺物 第II、III次調査・石製品

## 挿 図 目 次

### 高島郡マキノ町海津遺跡

第1図 遺跡位置図	1
第2図 竹 斧	2
第3図 トレンチ配置図	3
第4図 はかり	4
第5図 出土七器	4

### 高島郡マキノ町西牧野遺跡

第1図 遺跡位置図	5
-----------	---

### 高島郡今津町梅ヶ原遺跡

第1図 遺跡位置図	7
第2図 トレンチ配置図	8

### 高島郡今津町弘川遺跡

第1図 遺跡位置図	9
第2図 弘川遺跡地区割図	12
第3図 弘川遺跡第Ⅰ次調査（第1～3区）トレンチ配置図	13
第4図 挖立柱建物3実測図	15
第5図 要棺墓実測図	16
第6図 第71トレンチ実測図	17
第7図 弘川遺跡第Ⅱ次調査（第4・5区）トレンチ配置図	18
第8図 第19トレンチ造構実測図	20
第9図 木棺墓実測図	21
第10図 第12～17トレンチ造構実測図	22
第11図 溝1土層図	23
第12図 土坑10、落ち込み平面図	23
第13図 第28・29トレンチ造構実測図	25
第14図 第26トレンチ実測図	26
第15図 弘川遺跡第Ⅲ次調査（第6区）トレンチ配置図	27
第16図 弘川遺跡第Ⅲ次調査（第6区）造構実測図	28
第17図 溝4土層図	30
第18図 紡錘車実測図	35
第19図 土製品実測図	35

### 高島郡新旭町針江遺跡

第1図 遺跡位置図	70
第2図 トレンチ配置図	71

## 第1章 高島郡マキノ町海津遺跡

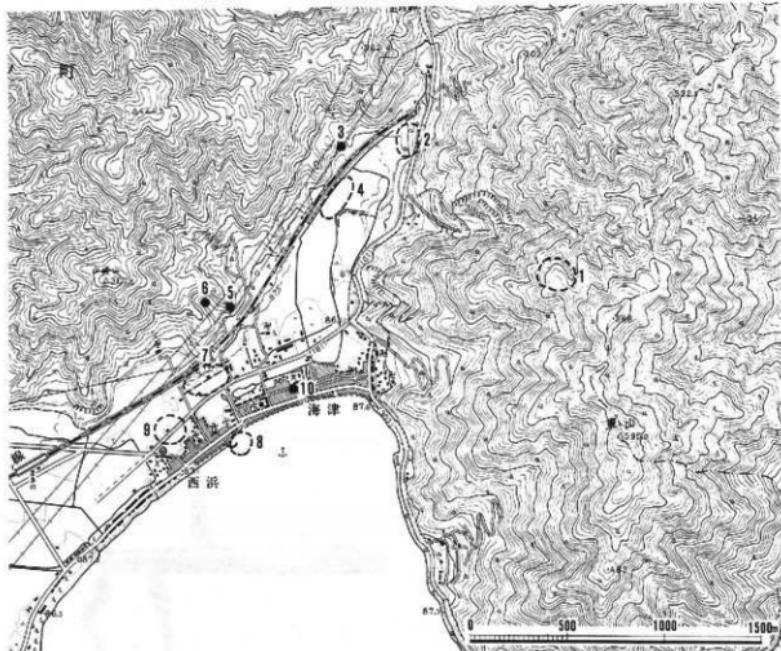
## 1 はじめに

本調査報告は、昭和55年度には場整備の対象となり、発掘調査を実施した海岸遺跡の発掘調査記録である。

海岸遺跡は、昭和54年4月にもは場整備に先だって発掘調査が行われ、遺構は検出できなかったが、現水田下に埋没した旧の沼地内から田下駄など中世の木製品が出土している。さて、本年度のは場整備予定地域は、前年度と異り山麓部にあたることから、集落の立地が考えられることや、加賀藩の蔭屋敷の伝承があることなどから事前に調査を実施した。

## 2 調査の経過

発掘調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼旗保明を担当者として、昭和55年5月24日より6月6日まで、まずは場整備の夏期施行区域内で実施した。その結果、遺構および遺物包含層は全く確認できなかったことから、前年度の調査結果と合わせて判断して、秋の刈取り後に工事を実施する地域については、遺跡の存在が認められないとの考え方から調査を中止した。



第1図 遺跡位置図

なお調査期間中、地元マキノ町役場、マキノ町教育委員会、滋賀県文化財保護協会の協力を得た。記してお礼申しあげたい。

### 3 調査の結果

**調査の方法** は場整備によって削平をうける水田に、 $3\text{ m} \times 3\text{ m}$  の試掘坑を47カ所穿って遺物包含層、遺構の有無について調査した。なお、調査には排土板付のバッカホウを使用し、調査後は埋戻しを行い旧状に復した。

**調査の結果** 山麓部の地盤の固い水田では、耕土（約20cm）を除去するとすぐに灰色あるいは黄色粘質土混りの角礫層（山の崩れか？）となる。この層を約30cmほど掘下げたが、以外に深いよう下部では大きな石塊もあり、地山まで掘ることは断念した。ただ、この角礫層の上部は、概ね灰色がかった色調をしており、遺物はこの層から検出された。昨年度の工区に近い東側は溝田で、部分的に草原も残っており、非常に柔い。この場所では、耕土（約20cm）を除去すると、多少粘質の砂利層（約25~30cm）があり、次にスクモ混りの粘土層となる。この層は、昭和54年の調査でも確認されており、自然木および植物遺体を含む。おそらく旧の沼地にあたるものであろう。旧の沼地を各トレンチの土層から復原すると第3図のようになるが、これは現在の地形ともよく合致する。

以上の調査結果から、上層で若干の遺物が検出されたが、年代的にも近世以降の流入の可能性が強く、当初予測された遺構および遺物包含層は全く発見されなかった。

### 4 遺 物

**はかり** はかりは、①、天秤、②、桙秤（竿秤・棹秤）、③、台秤等に分類されるが、当遺物は、木製の竿部分を欠失した竿秤（軸下では、一般にチギと呼ばれている）で、残存長10.5cmを測る。両面に略刻された二メート四メによって、二貫目・四貫目用のものである事がわかる。

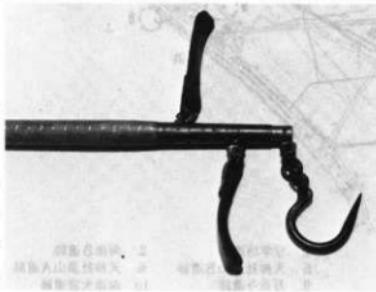
先端の計量物をのせる皿、或は引掛ける鍵を下げる重心刃部分は、鍔が固着し原形を留めないが、取締を結びつける支点刃には、鉄製環が二貫目・四貫目用各2個が残っている。

竿はこの金具によって上下から挟まれ、釘3本で固定されていた様である。当金属部分は、重心刃を支える部分が別材で作られ接合されており、その部分に計量器の検定検査の際に計量法規に適合することを証して打ち込まれる検定証印が刻されている。

今、当遺物が生産され、直ちに検定に付されたものと  
するならば、度量衡取締条例の発せられた明治8年（1875）

より一般的には明治24年（1891）の度量衡法以前に測るものではないであろう。第15トレンチ床土出土。

**土器** 第3、第10トレンチの第2層上面あるいは直上  
— おそらく床土で、陶磁器の小破片が3片出土している。  
第3トレンチからは、室町時代に入ると思われる青磁の口縁部と年代不詳の白磁の口縁部、第10トレンチからは、内面に乳白色の釉がかかった近世かそれ以降のも



第2図 竿 秤

第2図 トレンチ配置図



のと思われる陶器の小破片が出土した。また、表面採集で、近世以降のスリ鉢の口縁部破片が採集されている。

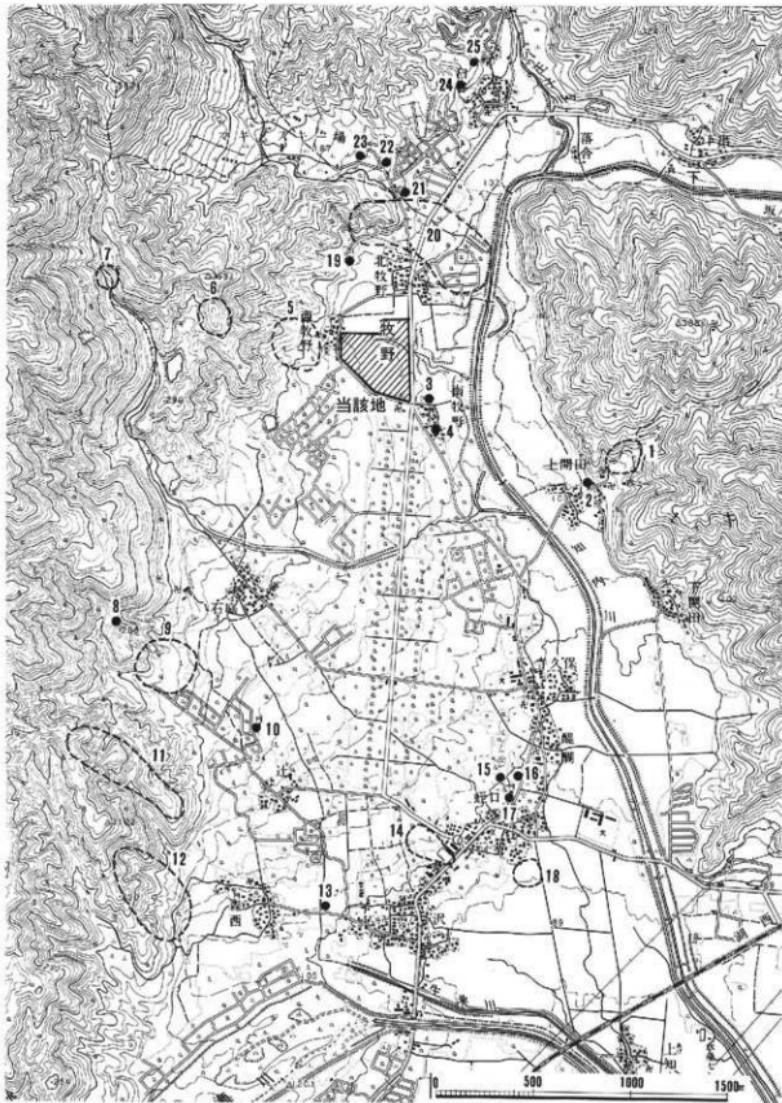


第4図 はかり



第5図 出土土器

## 第2章 高島郡マキノ町西牧野遺跡



- |            |            |            |            |            |
|------------|------------|------------|------------|------------|
| 1. 称念寺遺跡   | 2. 上開田遺跡   | 3. 南牧野遺跡   | 4. 里塚遺跡    | 5. 西牧野遺跡   |
| 6. 齊桓城遺跡   | 7. 大谷川遺跡   | 8. 堂の谷遺跡   | 9. 伏ノ木遺跡   | 10. 辻遺跡    |
| 11. 田屋城遺跡  | 12. 背地山遺跡  | 13. 森西遺跡   | 14. 蝶口遺跡   | 15. 鈴取遺跡   |
| 16. 小塙遺跡   | 17. 宮遺跡    | 18. 弘性寺遺跡  | 19. 北牧野D遺跡 | 20. 北牧野遺跡  |
| 21. 北牧野A遺跡 | 22. 北牧野E遺跡 | 23. 北牧野C遺跡 | 24. 両方谷遺跡  | 25. 茶ワツ山遺跡 |

第1図 遺跡位置図

## 1 はじめに

本報告は、高島郡マキノ町西牧野において、昭和55年度は実施したは場整備事業に伴う発掘調査の結果をまとめたものである。当該事業地は、県道287号線（小荒路、牧野、蛭口線）の西側で、県道東側は前年度に調査を実施した。

## 2 調査の経過

調査地周辺の歴史的環境等は、前年度報告書にゆずりここでは調査の経過について述べることにする。本地域の調査の目的は、南牧野遺跡の西限と、西牧野古墳群の前面にあたる当該地域における遺跡の有無の確認であった。

調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼藤保明を担当者として、春秋二回にわたりは場整備の実施に先行して行った。なお調査中、山口順子（滋賀県埋蔵文化財センター）、神谷友和（滋賀県文化財保護協会）両氏の援助を得た。記して、お礼申しあげたい。

## 3 調査の結果

前年度の調査と同様、全てクロボクとよばれる黒褐色粘質土と礫層からなり、遺物、遺構は全く検出されなかった。ただ、春の調査の際に、ピット状に土の変色のあるトレンチがあり精査したところ、穴の中で枝分れし人工的なものと認めがたく、樹木の根、あるいは風倒木とよばれるものと判断した。

調査の結果から、当該地域内には遺跡は認められず、また前年度の調査結果から考えると、北牧野、西牧野の兩古墳群前面の緩傾斜地は、古墳時代は原野であった可能性が強く、当古墳群の被葬者を単純に現在の集落に古代集落を複合させて考えることは問題がある。製鉄遺跡は別として、当地域に集落が定着するのは、やはり中世を待たねばならないのであろう。

### 第3章 高島郡今津町梅ヶ原遺跡

## 1 はじめに

高島郡今津町梅原のは場整備に伴う発掘調査も、本年度で2年目にあたる。当該地は寺院伝承地であるが、山麓の緩斜面と石田川を見渡すその地形は、それ以外の遺跡の所在をも彷彿とさせる絶好の地である。昭和54年度の調査は、集落よりやや東に離れすぎた網もあり、残念ながら当初意図した遺構、遺物包含層は確認できなかつた。本年度は、は場整備が梅原の集落の北から東一帯にわたるため、春、秋二回にわたり調査を実施した。

## 2 調査の経過

調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼康保明を担当者とし、山本吉光氏の協力を得た。

昭和55年6月13日から6月18日までの調査では、集落の北東部で等高線を横断するような形で、幅15mのトレンチを11~28mと長く19本掘って、遺構および遺物包含層を調査したが、クロボク、赤土となり遺構等は何も検出されなかつたため調査を打切った。

昭和55年9月24日から9月27日の調査では、集落の北側と東側に隣接する水田に12カ所のトレンチを穿って調査したが、春と同様な土層で、遺物は近世の陶磁器の小破片すら出土しなかつた。



第1図 遺跡位置図



## 第4章 高島郡今津町弘川遺跡

# 1 はじめに

高島郡今津町弘川を中心と所在する弘川遺跡は、近江より若狭、越前に至る分起点ともいべき交通の要地に位置するが、本遺跡の存在が注目されるようになったのは、ごく近年になってからのことである。

弘川遺跡の発見があつて後、昭和51、52年の二カ年にわたって、国道161号線バイパス建設に伴つて発掘調査が実施された<sup>①</sup>。その結果、遺跡の広がりは、豐庭野丘陵の北東端から北に向つて小さく舌状に張出した台地上に、北は今津川を北限にして南北約200m、東西は宅地化等で十分確認できなかつたが、西は円山塚古墳までの約200mにわたる範囲におよぶものと推定された。またこの調査では、互いに関連し合う掘立柱建物30棟、門、溝、橋、大型土壙、ピット等が検出され、遺構に伴つて8世紀後半から10世紀に至る間の、須恵器、土師器、綠釉陶器、灰釉陶器、黒色土器等が出土している。こうした遺構の検討と、旧若狭街道に沿つた遺跡の立地等から、遺跡の性格は郷倉ではないかと考えられている。ただ、歴史時代——奈良、平安時代の遺物に混つて少量ではあるが、純文式土器（早期、後期）、石器、弥生式土器（前期）、古墳時代の須恵器等が出土しており、弘川遺跡周辺に郷倉成立以前の遺構の存在を暗示していた。

その後、昭和54年度より、国道161号線バイパスの調査地点より北の、石田川に沿つて東西に広がる水田地帯では場整備事業が実施されることになった。そこで、国道161号線バイパスに伴つて問題提起された形になつていた郷倉成立以前の遺構、ことに弥生時代の遺構を確認すべく国庫補助事業として弘川遺跡周辺部の調査を実施することになった。その結果、遺跡は当初の予測をはるかに上回る大規模なもので、西は弘川と下弘川の境界付近から、東は弘川の集落付近に至る東西約800m、北限は今津川をさらに越えて石田川まで延び、結論的に



1. コクリュウ寺遺跡
2. 心妙寺遺跡
3. 岸詠遺跡
4. 首塚遺跡
5. 高田館跡遺跡
6. 弘川B遺跡
7. 杉沢遺跡
8. 将軍塚遺跡
9. ミコシ塚遺跡
10. 豊積塚遺跡
11. 弘川A遺跡
12. 円山塚遺跡
13. 女郎塚遺跡
14. 大床遺跡
15. 大供遺跡
16. 上弘都遺跡

第1図 遺跡位置図

は2～3カ所の遺跡から構成された遺跡群として把握すべきものであった。

## 2 位置と環境

**地理的環境** 昭和54、55年の二カ年にわたっては場整備事業に伴って発掘調査を行った「弘川遺跡」は、南北は国道303号線以北石田川まで、東西は下弘都字杉沢以東国道161号線、弘川の集落の西側までの範囲である。調査対象地域は、国道161号線バイパス建設に伴って開削した弘川遺跡——郷倉の立地する舌状台地より一段低い水田地帯で、遺跡は石田川の右岸段丘上に形成されていた。この地域の旧地形は、過去の水田開発によってかなり改変されているが、段丘の東側にはいくつかの浅い谷があり、そこへ凸から流れる水路が通って沖積地へと移行している。また、現在地表からは確認できない埋没した浅谷や自然流路が発掘調査によって明らかにされており、ある程度の旧地形が復原できる。一方、水の問題については、現在埋立てがなされ宅地として造成されているが、杉沢付近に近年まで沿地があり、その周辺は湿地であった。さらに旧沿地の北には湧水地があり、現在もその水が水源として利用されており、初期水稻耕作を考えるうえで興味深い景観を呈している。調査地域の地形で付加えておかねばならないことは、これまで遺跡の発見がなかったことを石出川の氾濫原であるため生活に適さなかったとする俗説があった。しかし、石田川の氾濫原や旧流路は、右岸では予想されていたより範囲が狭く、石田川沿いに見られる谷状の旧流路に概ね限定される。石田川の氾濫原は、むしろ左岸で、井ノ口付近から東に認められる。こうしたことから考えると、沖積地とそう比高差、距離的な隔りのないこの段丘上の立地は、むしろ石田川の氾濫を避け、独自の水源を持つ適所であったと見るべきであろう。

## 3 調査の経緯

**調査の経過** 発掘調査は、は場整備によって削平及び掘削をうける水田を対象に、排土板付きのバックホーを用いてトレンチを穿ち、まず遺物包含層及び遺構の確認を行った。そして、遺構の確認されたトレンチについては保存のための協議を関係課を行い、削平箇所を一部設計変更するなど調整を計った。一方、変更不能な場所については、トレンチを拡張して遺構の状況と広がりを可能な限り調査した。

調査は、昭和54年10月16日から11月27日まで、は場整備工区の西半分——国道161号線バイパス以西を調査（第1次調査）し、昭和55年3月にその概要を「高島郡今津町弘川遺跡（1）」として『は場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅶ-1に報告した。<sup>②</sup> 本年度は、昭和55年6月23日から8月9日まで（第2次調査）と、同年9月26日から10月23日まで（第3次調査）の夏、秋の二回、は場整備工区の東半分——国道161号線バイパス以東を調査した。

調査報告は、二カ年の調査によって検出された遺構相互の関係を把握できるようにするため、昭和54年度を概要報告とし、今回、第1次～第3次までの調査を総集し報告書にまとめた。したがって、各遺構の名称、番号等は、これまでパンフレット、レジメ、概要等で用いたものを、今回統一しておく。また、第2次調査で検出した流路中の細文式土器については、整理途中のため概要のみを紹介し、後日詳細に報告する予定である。

調査にあたっては、昭和54、55年の両年共、滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼康保明を担当者に、第1次調査では、滋賀県文化財保護協会嘱託本田修平（現彦根市教育委員会）、同調査員藤野道成、山口順子（現滋賀

県埋蔵文化財センター嘱託)、大谷大学学生白井忠雄(現高島町教育委員会)、関西学院大学考古学研究会の諸氏、第2次調査では、山口順子(滋賀県埋蔵文化財センター嘱託)、神谷友和(滋賀県文化財保護協会嘱託)、田中政彦(奈良大学)、池田俊哉(竜谷大学)、和田光生(大谷大学)、第3次調査では、山口順子、神谷友和が調査に従事した。また、地元弘川、下弘部の方々をはじめ、多くの方々の協力を得た。記してお礼申しあげたい。

## 4 遺跡の概観

**遺跡の地区々分** 広大な調査対象地区の中で、遺構の集中する場所は、大きく三遺跡に分けられる。調査対象地区的西南部に位置する杉沢遺跡と、国道161号線バイパスの東西に広がる弘川B遺跡、バイパスの東側で今津川の北に所在する墓地に近接する弘川A遺跡である。このうち弘川B遺跡は、遺構の立地、年代、性格等から、さらに4ブロックに分けて把握することができる。そこで本報告では、便宜上第1次～第3次調査における遺構を6カ所に区分し、地区名として用いることにした。

各地区の位置関係は、第2図に示すとおりである。

第1地区……調査対象地区的西南部——弘川と下弘部の境界付近に位置し、は場整備第4号支線排水路より南にあたる。字名より杉沢遺跡と呼称。

第2地区……国道161号線バイパスの西側で、町道8号線以南第4号支線排水路以北に位置し、第1地区(杉沢遺跡)の北東にあたる。弘川B遺跡の西限。

第3地区……国道161号線バイパスの西側で、町道8号線以北石出川まで。弘川B遺跡。

第4地区……国道161号線バイパスの東側で、町道8号線以北石出川までの段丘上。弘川B遺跡の東限。

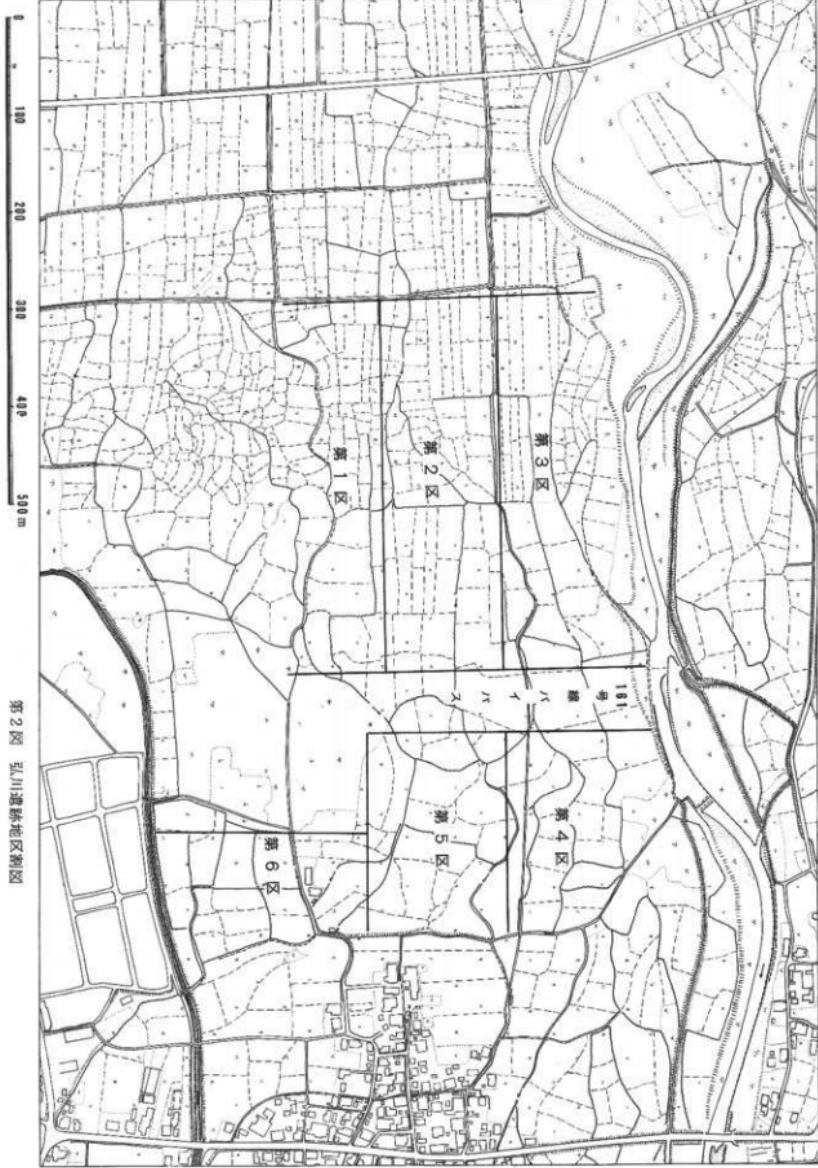
第5地区……国道161号線バイパスの東側で、町道8号線以南、弘川A遺跡(御倉)の立地する舌状台地北端までの段丘上。弘川B遺跡。

第6地区……国道161号線バイパスの東側で、今津川の北に所在する墓地に近接した東側の水田に位置する。弘川A遺跡の北東限。

### (1) 第1区の遺構

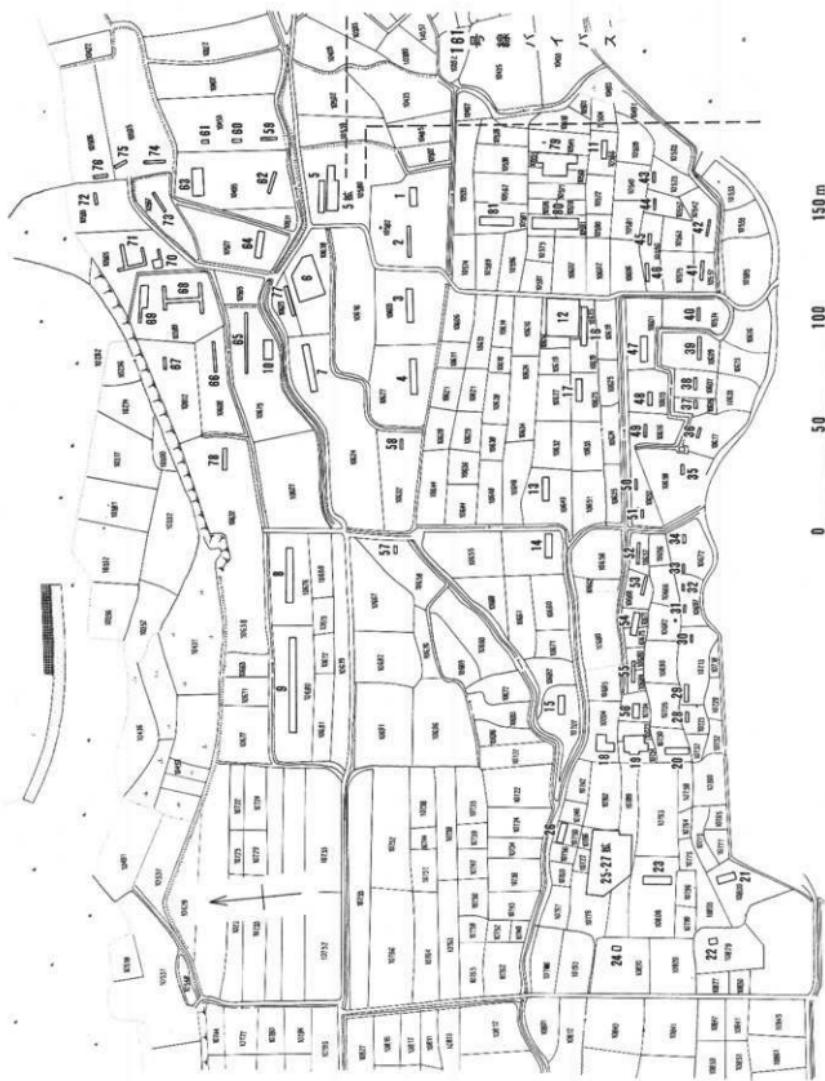
**竪穴住居1～3** 第25・27拡張トレンチで検出された。約45cmの表土及び耕土を除去すると、縄文時代晩期及び弥生時代後期の遺物包含層になり、この層をベースにして住居が形成されていた。ほぼ同じ場所で3回建てかえたと思われ、検出状況からみて、住居2が最後である。住居1・3の規模は明確ではないが、残存する深さは、住居1が約30～50cm、住居3が約25cmを測る。住居2は一边6.5mの方形プランをもち、残存する深さは約50～60cmを測る。住居内には、周溝・柱穴及び中央炉等は検出されなかったが、北東隅の壁面に1ヶ所焼土が検出され、ここが竪の位置になると思われる。また、中央付近の床面上に、10～30cm大の右が数個かたまって検出されたが、火をうけた痕跡や加熱等は認められなかった。そして、住居の北西部の中程に、幅1.2m程の2段の階段状張出部が認められるが、焼土との位置関係からみて、出入口になる可能性が高い。住居の主軸方向は、住居1が北北西、住居2が北西、住居3が北東をさす。

遺物は、住居1・2より検出された、ほとんどが床面上にのっており、住居1からは、須恵器の壺蓋、壺身、



第2図 弘川灌漑地区割図

第3図 弘川運動場第1次調査(第1~3区)トレンチ配置図



土師器の壺類、罐片、砥石が出土している。また、混入として、弥生時代の高杯、甕の底部片がある。住居2からは、須恵器の环身、壺、高环、横瓶、土師器の碗、甕、鍋が出土し、混入として、弥生時代の壺、甕の底部、高环、他に土鍬、磨製石斧がある。住居の時期は、飛鳥時代も初頭頃と考えられる。

**竪穴住居4** 第25・27拡張トレンチの住居1～3の東側約5m程離れて検出された。約30cm程の表土及び耕土を除去すると、灰白色粘質土層を掘り込んで形成された住居が検出された。一辺約8.5mの方形の住居で、残存する深さは約20cmを測る。住居内には、周溝、柱穴、中央炉、焼土等は検出されなかったが、南西部分の床面上で、中央に向って倒れた状態の炭化した柱の一部が検出された。この住居は火災を受け廃居になったと思われる。住居の主軸方向は、ほぼ北をさす。

遺物は、ほぼ住居全面から出土しており、住居内埋土の暗灰茶色粘質土層に含まれていた。弥生時代後期から古墳時代初頭の壺、甕、鉢、器台、有孔土製品、磨製石斧が出土している。

**竪穴住居5** 第19トレンチで検出された。約20cm程の表土及び耕土を除去すると、約20cmの黒褐色の遺物包含層になり、この層を除去した面で住居が検出された。5×5.9mの隅丸方形の住居で、遺存状態が悪く、残存する深さは約10cmを測る。床面では、方形に配された4木の上柱穴と中央ピットが検出された。主柱穴の大きさは、直径20～30cm、深さ16～30cm、柱間は約2.7mを測る。中央ピットは、40～50cmの楕円形で、深さは約10cmを測る。また、住居の西東辺のはば中間に深さ約10cm程の落ち込みがあり、0.5×1mの範囲で集石も認められた。中央ピット、落ち込みとも焼土ではなく、集石も焼けた痕跡は認められなかった。住居の主軸方向は、北東をさす。

遺物は、落ち込み付近と住居の北西部分で出土した。弥生時代末から古墳時代初頭にかけての時期と思われる壺、甕、高环、器台が出土している。

**土坑1** 第25・27拡張トレンチの竪穴住居1～3の北東部外側で検出された。大きさ2×1.2m、残存する深さ約25cmの楕円形の土坑である。

遺物は、土師器の脚部等が出土しているが、詳細な時期は不明である。

**土坑2** 第25・27拡張トレンチの竪穴住居1～3の西側約1.5m離れて検出された。大きさ2.5×8m、残存する深さ約25cmの長方形の土坑である。土坑の中程の両肩部にピットが2個、それに対応するピットが北側に約1.8m離れて2個検出された。ピットは直径25～40cm、深さは25～30cmを測る。

遺物は、土師皿、山皿、土鍬等が出土しており、時期は鎌倉時代と思われる。

その他の遺構 第25・27拡張トレンチでは、竪穴住居1～3の北東～南東側の周辺で、直径30cm程のピットが多数検出されているが、竪穴住居との関連や、掘立柱建物等の明確な遺構にはならない。また、竪穴住居1～3の南側では、縄文時代晩期の深鉢片と弥生時代後期と想われる長頸壺、甕等の土器片が検出されているが、遺構は検出されなかった。第49トレンチでは、約15cmの耕土・床土を除去すると、暗褐色粘質土内に、足跡と思われる4箇の跡みを検出した。長さ24～36cm、深さ9cm程を測り、北へ向う1対と南西へ向う1対とにわけられる。時期は明確ではない。第55トレンチでは、約20cm程の表土及び耕土を除去すると、竪穴住居の一部かと思われる。落ち込みが検出された。しかし、確認のみで精査していないため、遺構の時期や規模については明確でない。

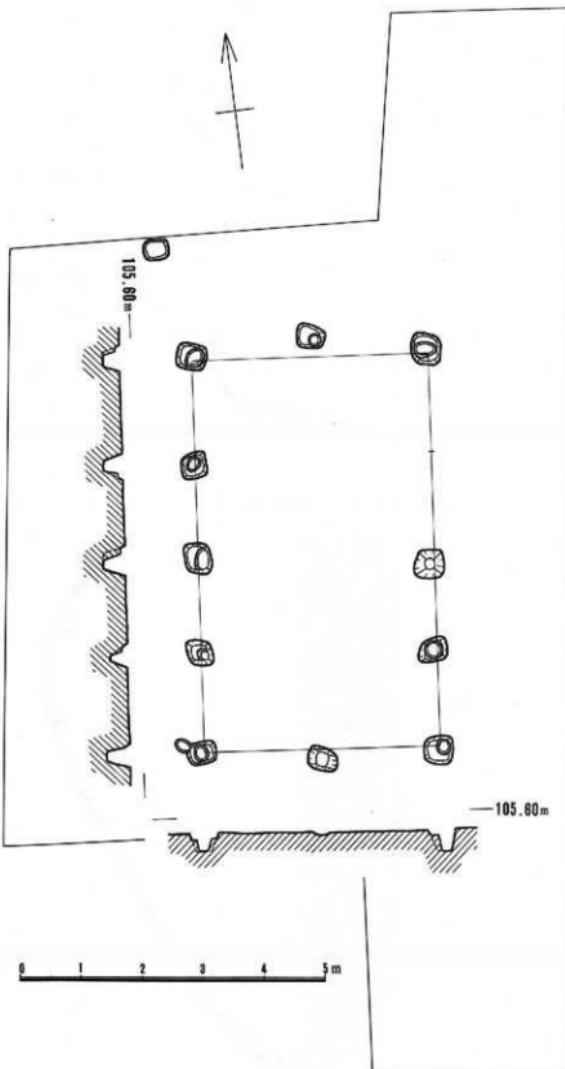
## (2) 第2区の遺構

**竪穴住居6** 第12トレンチの北東隅で、約25cmの表土及び耕土を除去すると検出された。5.6×4.5mの方形

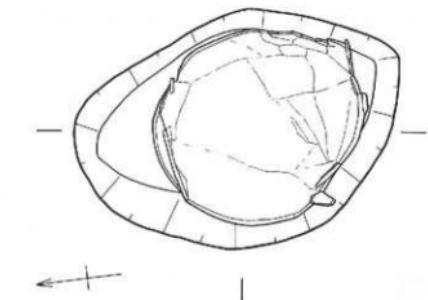
の住居で、遺存状態は悪く、残存する深さは約10cmを測る。住居内にはほぼ方形に配された4本の主柱穴が検出され、柱穴は直径20~30cm、深さ20~40cm、柱間は約1.4mを測る。住居の北東隅は後世の溝で削られているが、住居の北辺の中程に深さ10cm程の落ち込みがあり、焼土が検出された。また、この落ち込みの西端を掘り込んだ状態で、大きさ20×30cm、深さ10cmの土坑が確認された。住居の主軸方向は、北をさす。

遺物は、落ち込みの焼土内からと土坑から出土している。焼土内からは、飛鳥時代の土器の甕、壺、土坑内からは、混入した弥生時代後期の壺片が検出された。

**掘立柱建物I 第12トレンチ**の竪穴住居6の西側、約4m離れて、約25cmの表土及び耕土を除去すると検出された。規模は、桁行3間(5.2m)×梁行2間(3.84m)で、柱間は、桁行1.73m、梁行1.92mを測る。東妻柱列の中央柱穴は、後世の削平をうけているため不明であり、西妻柱列の中央柱穴も、後世の溝によつて破壊されている。掘形は一辺約50cmの不整形で、深さは掘り下げていないため確認していない。建物の主軸方向は、N-17°Eをさす。



第4図 掘立柱建物3実測図



掘立柱建物2 第12トレンチの竪穴住居6

の南西側、約1.5m離れて検出された。規模は、桁行4間(6.72m)×梁行3間(5.04m)で、柱間は、桁行・梁行とも1.68mを測る。南西側柱列の東から第1・第2柱穴は、部分的に後世の溝によって破壊されている。掘方は一辺約50cmの不整方形で、深さは掘り下げていないため確認していない。建物の主軸方向は、N-17°Eをさす。

掘立柱建物3 161号線バイパスの西側約

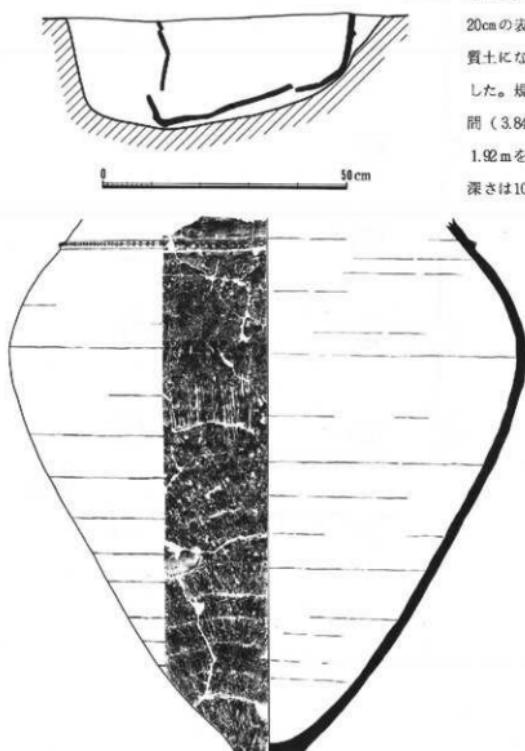
15m離れた、第79トレンチで検出された。約20cmの表土及び耕土を除去すると、黄白色粘質土になり、この層を掘り込んだ柱穴を確認した。規模は、桁行4間(6.4m)×梁行2間(3.84m)で、柱間は、桁行1.6m、梁行1.92mを測る。掘方は一辺40~50cmの方形で、深さは10~50cmを測る。直径40~50cmの柱痕

が認められるものもある。東側柱列の北から第2柱穴は、後世の削平をうけており、確認されなかつた。建物の主軸方向は、N-5°Eをさす。

斂棺墓 第16トレンチで約25cm

の表土及び耕土を除去すると、斂の上半部が斜めに削平をうけた状態で、1基だけ検出された。墓壙は、約1.3×0.95mの楕円形で、底面は北へ向って傾斜しており、最も深いところで約45cmを測る。

斂棺は単棺で、底面に沿って口を南上方に向け、約50°角度で埋置されていた。出土状況から蓋は認められず、また、斂棺内及び墓壙内からは、骨や副葬品等も検出されなかった。ただ、棺の内面に炭化物、外面上に漆が付着していること



第5図 斂棺墓実測図

から、煮炊きに使用した甕を埋葬用の棺に転用したものと考えられる。

小さな平底の底部に、大きく内湾して聞く休部をもち、口縁部と体部との区別がなくなる。休部の最も張り出すところから内湾ぎみに内傾させて口縁部にいたり、胴部最大径は現存高の $\frac{3}{4}$ 位のところに位置する。粘土の円板を作って底部をつくり、その上に幅約2cm位の粘土紐を順次積み重ねていく。底部外面は、強めにナデ上げる。休部外面には縱方向の割りを行い、内面は下半が横方向の割り、上半がナデで、特に口縁部付近は、内外面共に丁寧な横方向のナデを施している。口縁部に断面三角形の貼付突帯をめぐらし、笠状具によって左から右への菱形の刻み目を施す。底径5.3cm、休部最大径42.2cm。色調は暗褐色を呈し、黒雲母片等を含む砂っぽい粘土で、焼成はやや硬い。

底部の形態、突帯の刻み目の施用方法及び調整等からして、滋賀里IV～Vの編文時代晚期の土器と考えられる。

### (3) 第3区の遺構

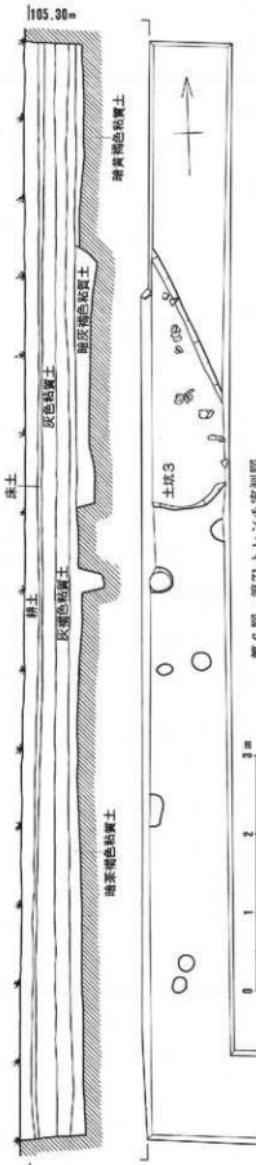
**竪穴住居7** 第6トレンチで検出された。約30cm程の表土及び耕土を除去すると、トレンチの中央には南北に広がる、自然流路と思われる礫層が認められた。その東側、トレンチの東南隅で、灰色粘質土を握り込んだ住居が検出された。全体の $\frac{1}{3}$ 程しか認めてないが、規模は直径約8mのやや歪な円形住居になると思われる。残存する床面までの深さは30cmを測り、住居の壁面に沿って、幅30cm、深さ2～10cmの溝が固っている。住居内に柱穴等は確認されなかったが、住居の中央付近に、15～40cm大の石の詰まった、直径40cm、深さ25cm、直径60cm、深さ30cmのピット2個が検出された。石は火を受けた痕跡はなく、加工痕も認められず、ピット内にも焼土等は検出されなかった。

遺物は、ピット内より出土している。弥生時代後期の壺・甕・器台・手捏ね土器が出土している。

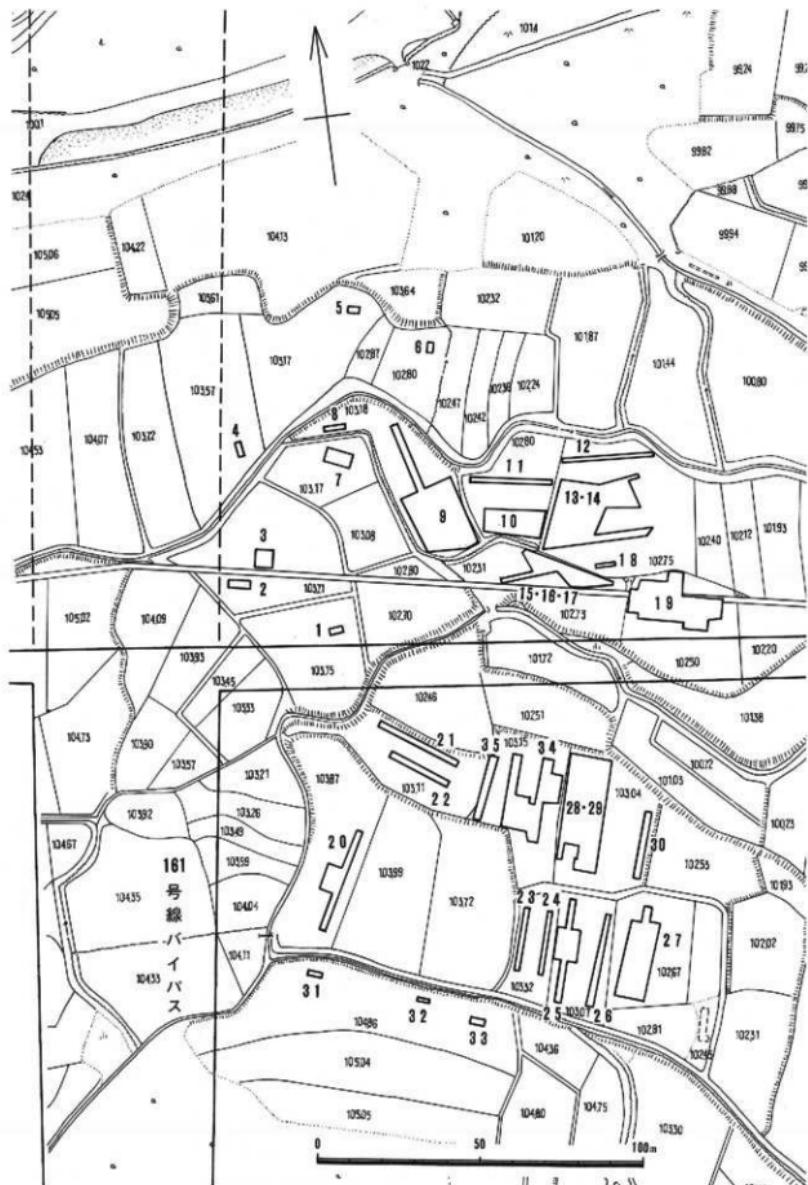
**土坑3** 第71トレンチで検出された。耕土、灰色粘質土層等、約70cm程地表から掘り下げたところ、数個のピットと、遺物を含む土坑が検出された。トレンチを拡張・精査していないため、土坑の形状や大きさは確認していないが、残存する深さは10～25cmを測る。

遺物は、土坑の床面上で検出され、飛鳥時代前半の須恵器の壺身・土師器の壺・鍋・瓶等が出土している。

**土塙墓** 第6トレンチの中央部で、自然流路を掘り込んだ土坑が検出された。長さ2.5m、幅1.0m、深さ約40cmを測り、軸は北東をさす。



第6図 第71トレンチ実測図



第7図 弘川遺跡第Ⅱ次調査(第4・5区) トレーニ配置図

遺物等を検出していないため、時期は不明である。墓の決めてには次ぐが、第4地区で方形周溝墓や木棺墓が検出されており、形状等から上墳墓になる可能性は強い。

その他の遺構 第5トレンチでは、約20cmの耕土・床土、約10cmの暗灰色土を除去すると、黒褐色粘質土になり、その土層内に弥生時代前期・後期の土器が検出された。遺構確認のため南側に第5拡張トレンチをあけて精査した結果、深さ10cm程の自然の落ち込み内に、土器が埋った状態であることが判明した。

#### (4) 第4区の遺構

**豊穴住居12** 第19トレンチの東端で、約30cm程の表土及び耕土を除去して検出された。5.6×5.2mの隅丸方形に近い住居で、床面までの残存する深さは約20cmを測る。住居内には、周溝が断続的に認められ、方形に配された4本の主柱穴と中央ピットが検出された。周溝は、幅約15cm、深さ約5cmで、溝の底のレベルは住居の北東部がやや低くなる。主柱穴は、直径約50cm、深さ約55cm、柱間は2.5mを測る。中央ピットは、大きさ70×80cm、深さ約40cmを測り、内部に焼土等は認められなかった。他に、住居北東部の主柱穴と周溝との間に、直径約20cm、深さ約4cmのピットが認められ、住居の南西部の主柱穴と住居の壁との間では、幅70cm、深さ3cmぐらいの窪みが認められた。

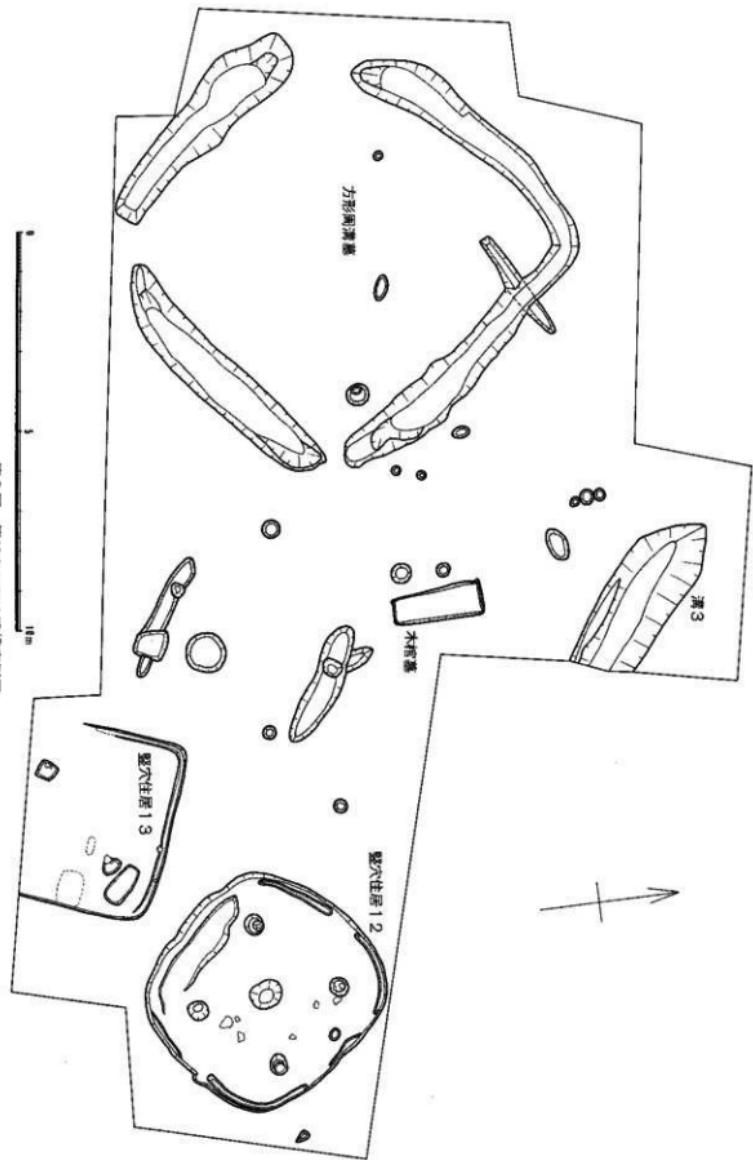
住居は暗黄白色粘質土を掘り込んでおり、埋土は、黒褐色粘質土、暗褐色粘質土、暗灰黄色粘質土、地山混りの暗褐色粘質土の4層が認められる。遺物は、住居の南東部の床面上で高杯・壺・扁平片刃石斧、東側主柱穴の間の床面上で砥石と思われる石製品を検出した他は、埋土内より出土した。時期は弥生時代中期後半で、住居の主軸方向は北東をさす。

**豊穴住居13** 第19トレンチの豊穴住居12の南西約1mほど離れて、検出された。遺存状態は悪く、住居の南半分はほとんど削平をうけている。残存する北東辺は約4.5mを測り、幅15cm、深さ4cmの溝が周る。床面上では、住居の南東辺の中程に焼土、それよりやや中央より灰が認められた。住居の北東部分には、主柱穴になると思われる直径約40cm、深さ8cm程の不整形なピットと、長さ1.1m、幅50cm、深さ10cm程の窪みが検出されている。南西部分でも、主柱穴になると思われる一边約40cm、深さ9cm程の方形のピットが検出された。このことから推定すると、溝が入り、4柱穴を方形に配し、竈をもつ、方形の豊穴住居になると考えられる。

住居内埋土は、暗茶灰色粘質土（やや砂っぽい）が6cm程認められる。遺物は、北東辺の周溝内より須恵器の壺、上師器の甕、焼土の北東寄りの床面上に土師器の甕、住居の北西部分の床面上に土師器片が出土している。時期は古墳時代後期で、住居の主軸方向は、北北東をさす。

**豊穴住居14** 第13・14トレンチの東端で、約30cmの表土及び耕土を除去して検出された。東部分を溝2によって削平されているが、北西辺約3m、南西辺約4.3mを測る、長方形の住居になる。住居内には、周溝が北西部に検出されており、南東辺では溝幅約30cm、深さ5cm、北西から北辺にかけては溝幅約40cm、深さ7cmを測る。ピットは計8個検出されたが、このうち主柱穴と思われるものは、北西辺中程の外周に接する直径約40cm、深さ20cm程のピットである。反対側は溝2で削平されているため不明であるが、おそらく2本柱の豊穴住居になると想われる。他に、焼土が中央付近と南東隅で検出された。

住居内埋土は茶褐色粘質土、周溝内に淡茶褐色粘質土が認められ、遺物は焼土内と埋土内より検出された。縄文式土器の深鉢片と弥生時代中期になると想われる甕類が出土している。住居の主軸方向は、北西をさす。



第8図 第19トレンチ遺構実測図

**方形周溝墓** 第19トレンチの西半分で、約20cmの表土及び耕土を除去すると検出された。陸橋部を3カ所もつ、一辺8mの方形周溝墓である。南西溝は幅0.75～1.5m、最深約60cmを測り、南東溝は幅1.2m、最深約50cmを測る。北西から北東溝は連結しており、幅0.7～1.2m、最深約40cmを測るが、北隅の深さは約20cmで浅くなっている。溝の断面はすべて逆台形になる。主体部は削平をうけているため、検出されなかった。

渠橋は黄白色粘質土をベースにして形成されており、溝内堆積土は、第1層：淡黒褐色粘質土；第2層：暗褐灰色粘質土、第3層：暗黃灰色粘質土、第4層：黄白色粘質土ブロック混りの暗褐灰色粘質土、第5層：暗黃白色粘質土が認められ、第1・2層が上層、第3～5層が下層にわけられる。

遺物は、北東溝の底面に壺が1個体バラバラに壊れた状態で検出され、南東溝の北寄りでは、上層から穿孔された水差型土器が検出された。両方とも供獻土器であり、壺は溝底に置かれ、水差型土器は埴丘上に置かれたものが流れ落ちたものであろう。時期は、弥生時代中期後半になると思われる。他に、縄文式土器の深鉢片や、弥生時代中期後半になると思われる甕、壺片が、溝上層から出土している。周溝墓の軸方向は、北西をさす。

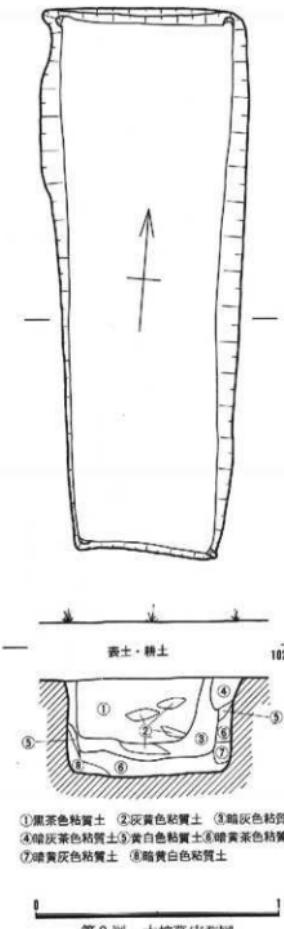
**木棺墓** 第19トレンチのほぼ中央、方形周溝墓の東側約3.5m離れて検出された。規模は、長さ約2.5m、小口幅は北側が約85cm、南側が約60cm、残存する深さは約37cmを測る。底は水平で、蓋板の四隅には、側板のはめこみ痕と思われる痛みが認められる。頭位は、北側小口幅が広いことから、北に向いていたと考えられる。棺については、堆積状況からみて、両側板の痕跡は確認できるが、底板については不明である。また、当初は蓋があったと思われるが、削平をうけているため認められなかった。

墓横内からは遺物は検出されなかったため、時期は不明であるが、隣接する方形周溝に伴なう可能性も考えられる。

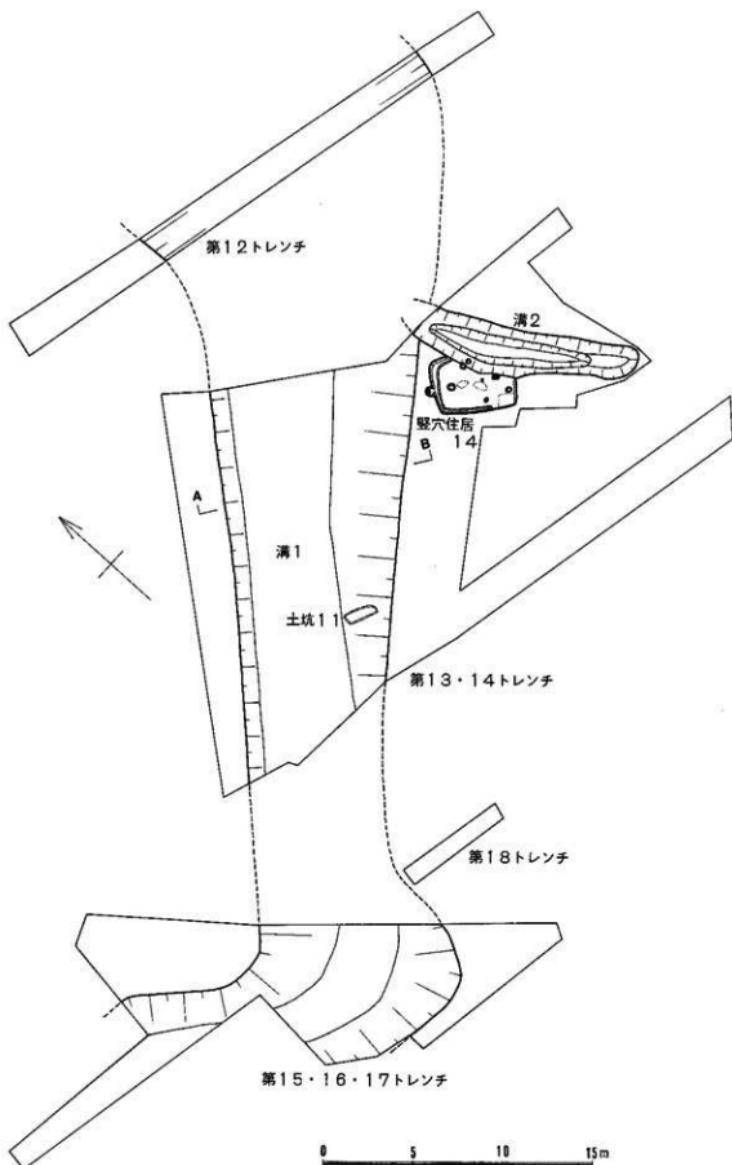
**溝1** 第12～17トレンチで、約20～30cmの表土及び耕土を除去して検出された。規模は、長さ55m以上、幅8～18.5m、深さは南西側が約30cm、北東側が約70cmを測り、南西から北東へ流れる自然流路と考えられる。

溝内堆積土は大きく上層・下層にわけられ、遺物は、第13・14トレンチの溝の西側の下層及び底面から、縄文時代中期の土器、石斧等が集中して検出された。遺物はほとんど磨滅しておらず、近くに集落の存在が推定される。

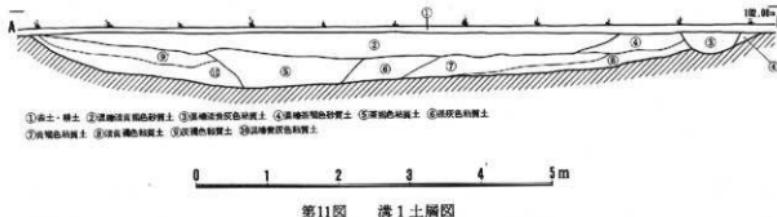
**溝2** 第13・14トレンチの堅穴住居14の北東部と、溝1の南東部を掘り込んだ状態で検出された。幅2～3m、深さ0.5～1.1mを測り、北西から南東方向にのびる溝である。



第9図 木棺墓実測図



第10図 第12～17トレンチ遺構実測図



溝内堆積土は、上層が黒褐色粘質土、淡褐色粘質土、下層が淡茶灰色粘質土にわけられ、遺物は、磨製石器と弥生式土器が底近くから出土しているが、弥生時代中期と思われる。

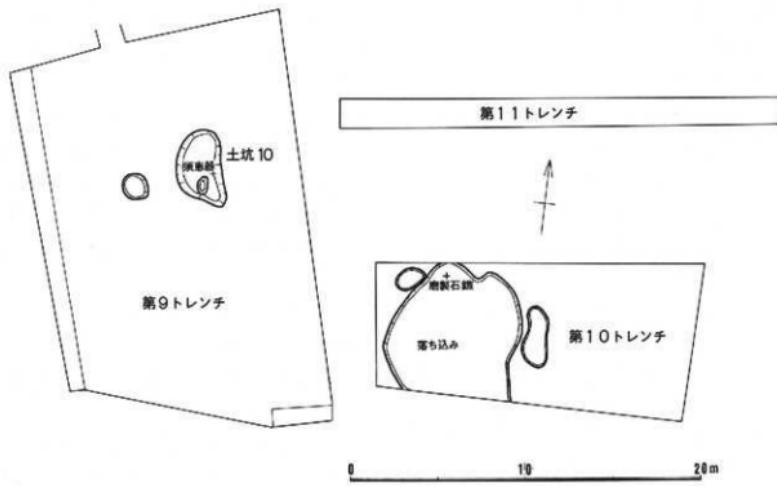
**土坑10** 第9トレンチで検出された。約20cmの表土及び耕土を除去すると黄灰色粘質土層になり、この層を掘り込んだ土坑で、大きさ約 $4.5 \times 2.5$ mの楕円形を呈し、深さ約33cmを測る。

土坑内堆積土は4層認められ、遺物は、土坑の東壁底面より、奈良時代の須恵器が出土している。

**土坑11** 第13・14トレンチの溝1の南東辺で、地表から約30cm掘り下げたところで検出された。大きさ約 $1.8 \times 0.7$ mの長方形を呈し、深さ約20cmを測る。検出状況からみて、溝1よりも後世に掘り込まれた土坑である。遺物は、土坑上層より古墳時代の土師器が出土している。

**落ち込み** 第10トレンチで、約20cmの表土及び耕土を除去すると、黄灰色粘質土をベースにした大きさ $7 \times 8$ m以上、深さ約30~60cmの落ち込みが検出された。精査したが、明確な遺構にはならなかった。

遺物は、埋土中より磨製石器、弥生式土器、土師器が出土している。



**その他の遺構** 第19トレンチでは、堅穴住居、方形周溝墓、木棺墓の他に、10数個のピットや溝が検出されたが、どれも明確な遺構にはならない。ただ、溝3が、規模と周辺の遺構からみて、方形周溝墓の一部になる可能性も考えられる。遺物が溝3から出土しているが、小破片のため時期不明である。

### (5) 第5区の遺構

**堅穴住居8** 第25トレンチで、約30cmの表土及び耕土を除去したところ、黄緑灰色粘質土を掘り込んで形成された、円形住居が検出された。直徑約4.2m、残存する深さは約18cmを測り、住居の壁面に沿って、幅約30cm、深さ2~9cmの溝が開く。溝は完固せず、住居の北東部で一部切れているが、ここが出入口になる可能性も考えられる。床面には、深さ約30cm、直徑15~25cmの方形に配された4本の主柱穴と、深さ約5cm、直徑16~35cmの支柱穴が検出された。詳しく述べると、住居西側の2個の主柱穴のうち、北側の主柱穴に対しては北西方向に約50cm離れて支柱穴が位置し、南側の主柱穴に対しては南西方向に約30cm離れて支柱穴が位置する。住居東側の2個の主柱穴に対しては、それぞれ東方向に約70cm離れて支柱穴が位置しており、その間に約45cm間隔で周溝に沿うように、3個のピットが配されている。中央ピットは住居中央よりやや南寄りにあり、約60×40cmの楕円形で、深さは26cmを測る。ピット内には焼土等は認められなかった。他に床面上には、炭化した建材が3カ所に検出されており、この住居は火災を受け廃棄になったと思われる。住居の主軸方向は、南北をさす。

住居内埋土は暗灰褐色粘質土の単層で、遺物は埋土内より検出されている。弥生時代中期後半の壺、甕、高杯、鉢が出土している。

**堅穴住居9** 堅穴住居8から南東へ約25m離れた、第27トレンチで検出された。約30cmの表土及び耕土を除去すると、後述するように中世の土器を含む土坑12が検出され、さらに掘り下げるに、堅穴住居9が検出された。一部トレンチの壁によって未確認だが、直徑約7m、残存する深さ約35cmを測る円形住居になる。ただ、住居の西側では約80cmの幅で、上面から約5cm低く段差がつくのが認められた。住居内に溝は周らされておらず、20数個の柱穴と中火ピット等を検出した。このうち主柱穴と思われるものは、直徑20~30cm、深さ10~27cm、柱間隔が約2~2.4mで円形に配された、7個のピットである。また、ほぼ中央に、大きさ約40×50cm、深さ約12cmの楕円形のピットが検出されたが、焼土等が認められず、中央主柱穴になると思われる。そして、円形に配された主柱穴はちょうど住居の東部分では検出されていないため、この部分が出入口になる可能性も考えられる。他に住居の南東部分の床面上では、直徑30cm、厚さ約10cmの石と炭化した建材が認められた。石は丸味をもつ河原石で、使用痕等は明確に認められなかった。

堆積上状況は、中世の土坑12の埋土（黒褐色粘質土、淡黒褐色粘質土）が上層にあり、下層に住居9の埋土（暗褐灰色土、暗黄褐色粘質土）が認められる。遺物は、弥生時代中期の壺、甕、鉢、脚台等が最下層から出土しており、北西部の住居壁際の床面上では、磨製石斧が検出された。他に、磨製石斧、丸石、石皿状石製品等が出土している。

**堅穴住居10** 第34トレンチで、約25cmの表土及び耕土を除去したところ、暗黄灰色粘質土を掘り込んだ、大きさ5×3.2m、残存する深さ約10cmの不整長方形の窓みが検出された。10m程西側に堅穴住居11が位置していることや、遺物等からみて、遺存状態は悪いが住居跡になると思われる。

住居内埋土は暗褐灰色粘質土の単層で、遺物は、床面中央付近で検出された。弥生時代中期末~後期初頭頃の

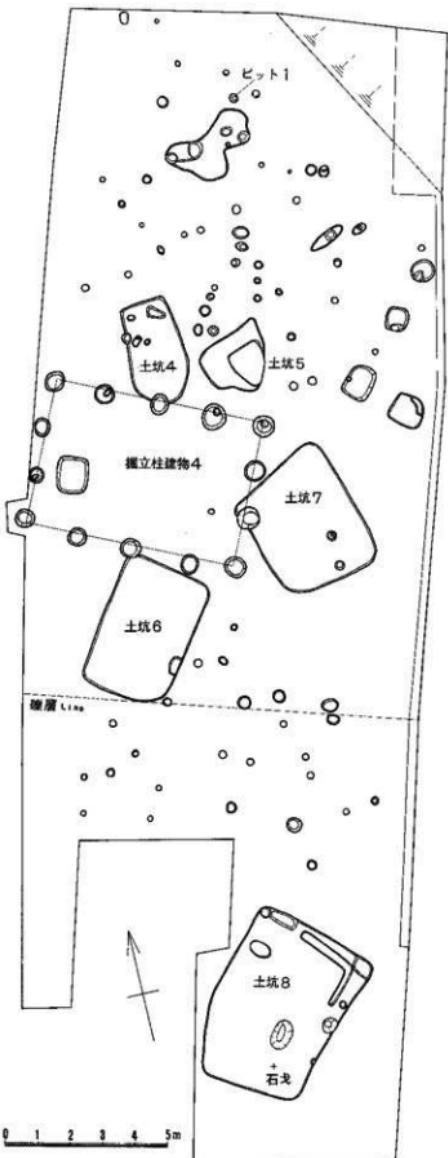
甕、高坏等が出土している。

**整穴住居11 第34トレンチの堅穴住居10の西側で検出された。4.6×5.4mの方形の住居で、残存する深さ約35cmを測る。住居内には、周溝、土柱穴等は認められなかったが、中央に直径約50cm、深さ約5cmの抜いビットが検出され、その周囲に10~30cm大の集石が認められた。ビット内に焼土等は認められず、石も焼成及び加工痕は認められない。また、住居南辺の中程から西側寄りに、2.8×1.1m、高さ約20cmの段状の高まりが形成されていた。盛土は褐灰色粘質土と暗褐灰色粘質土の2層で、固く結まっており、北西寄りの斜面端部に、35×25cm、厚さ約10cmの石をほぼ水平に埋めこんでいた。この石の表面は平だが加工された痕跡はなく、焼成等もうけていない。他に、東辺部には炭化した建材と高坏が認められた。次に、盛土を除去し精査すると、住居床面上で、炭化した建材と高坏、鉢等が検出され、この段状の高まりは後から作り付けたものであることが判明した。**

住居内埋土は、黒褐色粘質土、暗灰褐色粘質土の2層が認められ、遺物はほとんどが埋土中より出土している。ただ、ミニチュア土器が住居西辺の堅際の床面(162、163)と、段状の高まりの北西コーナーの床面(161)で検出された。時期は弥生時代後期である。

**掘立柱建物4 第28・29トレンチで、土坑4、6、7を切り込んだ状態で検出された。規模は、桁行4間(6.6m)×梁行3間(4.5m)で、柱間は、桁行1.65m、梁行1.5mを測る。掘形は直径50~70cmの円形で、深さ20~33cmを測る。また、直径20cm程の柱底の認められるビットもある。建物の主軸方向は、N-24°-Eをさす。**

**土坑4 第28・29トレンチで、約20cmの表**



第13図 第28・29トレンチ遺構実測図

土を除去すると黄灰色砂質土層になり、この層に掘り込まれた土坑が検出された。大きさは $3.6 \times 1.8$ m、深さ約6cmの不整形な土坑で、埋土は暗灰褐色砂質土層が認められた。遺物は埋土中より検出され、弥生式土器が出土している。

**土坑5** 第28・29トレンチの土坑4の東側に隣接して検出された。大きさ約 $2 \times 2$ m、深さ約9cmの不整形で、内側に大きさ $1 \times 1.5$ m、深さ約90cmの土坑がある。埋土は浅い方に茶褐色粘質土、深い方に黒褐色粘質土が認められる。

遺物は、茶褐色粘質土中より弥生式土器が検出された。

**土坑6** 第28・29トレンチの孤立柱建物4の南西側に、隣接して検出された。大きさ約 $4.3 \times 2.8$ m、深さ約10cmの長方形の土坑である。埋土は、茶褐色粘質土層が認められた。遺物は床面直上で検出され、弥生式土器の甕、鉢、高杯、壺が出土している。検出状況等からみて、竪穴住居になる可能性も考えられる。

**土坑7** 第28・29トレンチの孤立柱建物4の東側に、隣接して検出された。大きさ約 $3 \times 4$ m、深さ約6cmの不整形方の土坑である。埋土は茶褐色粘質土が認められた。

遺物は床面直上で検出され、弥生時代中期の甕、壺、鉢が出土している。検出状況等からみて、竪穴住居になる可能性も考えられる。

**土坑8** 第28・29トレンチの南東端で検出された。約20cmの表土を除去すると礫層になり、この層を掘り込んだ土坑である。大きさ約 $5.5 \times 4$ m、深さ約10cmの不整形方で、埋土は黒茶色砂質土が認められた。

遺物は床面直上で検出され、土器の小破片と磨製石戈の未製品が出土している。時期は、おそらく弥生時代になると思われ、検出状況からみて、竪穴住居になる可能性が考えられる。

**土坑9** 第25トレンチの竪穴住居の北側に、隣接して検出された。大きさ直径約2.2m、深さ約15cmの不整形な土坑である。土坑内には十数個のビットが検出されたが、詳細は不明である。埋土は暗灰褐色粘質土が認められた。

遺物は埋土中より検出され、弥生式土器、土師器、灰釉陶器が出土している。

**土坑12** 第27トレンチの竪穴住居9の上層で、重複して検出された。

遺物は、平安時代末期の土師器、黒色土器、灰釉陶器、山茶碗、須恵器、磁器が約100例体近く出土している。

**その他の遺構** 第20トレンチでは、約10cmの表土を除去すると、直径約40cm、深さ約13cmのビットと、大きさ $2 \times 0.8$ m、深さ約10cmの不整形な落ち込みが検出された。落ち込み内からは縄文時代晩期の上器片等が出土しているが、明確な遺構にはならなかった。第26トレンチでは、約35cmの表土を除去すると、直径35~40cm、深さ6~9cmの10数個のビットと、長さ1.8m、幅20cm、深さ4~8cmの溝が検出された。しかし、遺物は検出されず、明確な遺構にはならなかった。第27トレンチでは、竪穴住居9の北側で、直径20~70cm、深さ7~30cmの10数個のビットが検出された。このうち4個のビットが、3.4m間隔で、北北東方向に1列に並ぶ。しかし、横の並びは検出されず、杭列になると思われるが、

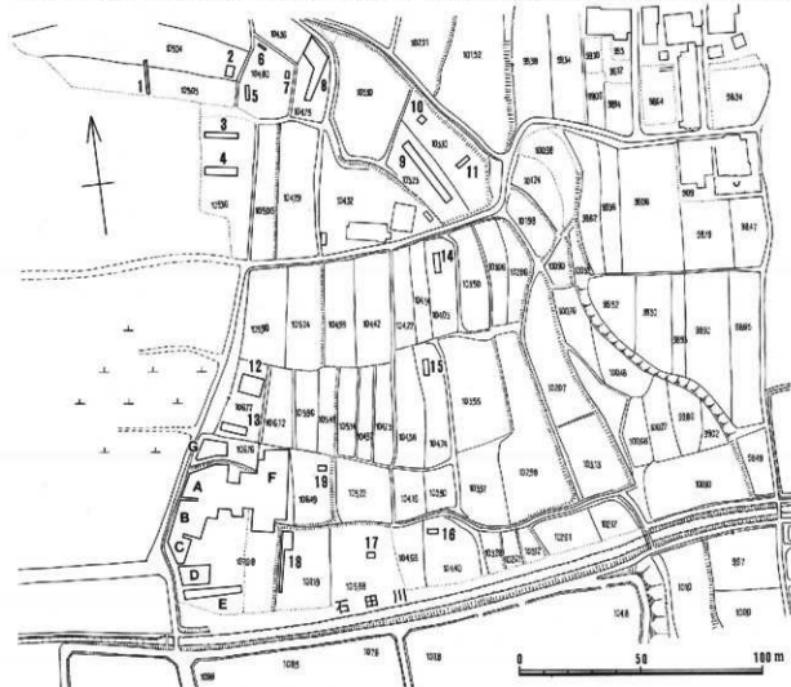


第14図  
第26トレンチ実測図

時期は不明である。第28・29トレンチでは、直径20~40cmの多数のピットが検出されたが、明確な遺構にはならなかった。ただ、土坑5の東側に、直径0.7~1mの浅いピットが4個検出され、掘立柱建物になる可能性も考えられる。

#### (6) 第6区の遺構

**竪穴住居15** 第Aトレンチで、約13cmの表土及び耕土を除去すると検出された。遺存状態は悪く、周溝から推定すると、大きさ5.9×6.0mの方形の住居になると思われる。深さは不明。周溝の残存する幅と深さは、西溝が幅15cm、深さ2cm、南溝が幅30cm、深さ4cm、東溝が幅40cm、深さ5cm、北溝が幅25~35cm、深さ7cmを測る。溝は完周せず北西部が切れており、南東部の周溝内には焼土が検出された。住店内にピットが10数個検出されたが、このうち住居に関連するものとして、方形に配された4個の主柱穴と中央ピットが認められた。主柱穴は直径約33cm、深さ14~20cm、中央ピットは直径70cm、深さ50cmを測る。また、中央ピットからは焼土等は認められなかった。他に、西側主柱穴の間で、大きさ1.4×1.7m、深さ2~13cmの2段になった不整形の窪みが検出されたが、住居との関連は不明である。住居の時期については、遺物が検出されていないため、不明である。住



第15図 弘川遺跡第Ⅲ次調査（第6区）トレンチ配置図



第16図 弘川道路第Ⅲ次調査（第6区）遺構実測図

居の主軸は、ほぼ南北をさす。

**竪穴住居16** 竪穴住居15の南西約4m離れて検出された。この遺構も後世の搅乱をうけているため明確ではないが、周溝等から推定すると、大きさ4×3.3mの長方形の住居になると思われる。残存する床面までの深さは、約5cmを測る。周溝の幅は約20cm、深さは1~10cmで、西側が深い。主柱穴は、東辺の外周中央に直徑約35cm、深さ約24cmのピットと、西辺の外周中央に直徑約40cm、深さ約30cmのピットが認められる。また、住居の南東隅では、埴土が検出された。住居の構造は、時期は異なるが、第4区の竪穴住居14と類似する。

遺物は、焼土周辺から飛鳥時代の土師器の甕、鍋、埋土内より須恵器の壺坏、土坑13の埋土内より弥生式土器が出上している。また、住居内埋土より、滑石製紡錘車が検出されている。

**竪穴住居17** 第Fトレンチで、約20cmの表土及び耕土を除去すると検出された。遺存状態は悪く、西側は掘立柱建物6に搅乱され、東側は半分以上削平をうけている。主柱穴等は検出されず、かろうじて焼土が認められただけであった。推定すると、一辺4mの方形の住居になると思われる。

**竪穴住居18** 竪穴住居17の北北東約6m離れて検出された。住居は、西隅で土坑15を掘り込んでおり、南東部では土坑14に搅乱されている。規模は、一辺5mの方形で、深さは最もよく残っているところで約16cm、残りの悪いところで約1cmであった。周溝は、北西辺から北東辺にかけてと、南西辺の一部に検出された。幅は10~20cm、残存する深さは3~7cmを測る。住居内の北西部には、直徑約50cm、深さ約30~50cmのピット2個が検出されたが、主柱穴になるかどうかは明確でない。東隅付近では、直徑約1mの範囲に、焼土が検出された。住居の七軸方向は、北西をさす。

遺物は、焼土内より繩文式土器の破片、飛鳥時代の土師器の甕、須恵器の壺身等が出土した。

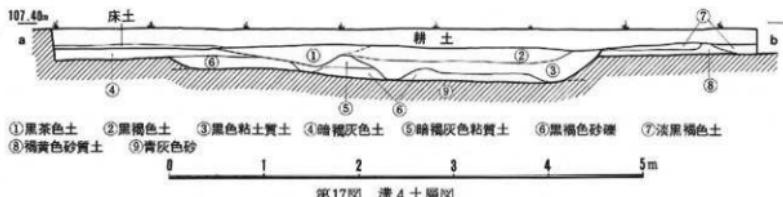
**竪穴住居19** 竪穴住居18の北東、約1.5m離れたところで、約40cmの表土及び耕土を除去して検出された。住居の北東隅はトレンチの壁で検出されなかつたが、大きさ3.6×4.4m、残存する深さ約24cmの、やや長方形の住居である。住居内には、周溝、主柱穴等は検出されなかつたが、南東隅に窓になるかと思われる土塊が検出された。直徑約1.2m、高さ約30cmで、周辺に幅50cmほど焼土が検出された。住居の主軸方向は、北北東をさす。

遺物は、焼土内より奈良時代の土師器の甕（376~378、383）、他は埋土中より検出された。

**掘立柱建物5** 第Aトレンチと第Fトレンチの間の拡張部分で、約10cmの表土及び耕土を除去すると、礎石を掘り込んだ柱穴が検出された。規模は桁行2間（3.2m）、梁行2間（2.8m）の掘立柱建物で、柱間は桁行が南から1.4m、1.8mと北側の間隔が広く、梁行は1.4mを測る。掘形は直徑30~45cmの円形で、残存する深さは17~27cmを測る。建物の主軸方向は、N-23°-Eをさす。

**掘立柱建物6** 第Fトレンチで、竪穴住居17の西辺を切り込んだ状態で検出された。規模は桁行2間（3.9m）、梁行2間（3.2m）の掘立柱建物で、柱間は桁行1.95m、梁行1.6mを測る。但し、東側柱列の中央柱穴は、位置がずれている。掘形は直徑45~80cmの円形で、残存する深さは約20cmを測る。建物の主軸方向は、N-17°-Eをさす。

**溝4** 第G、A、B、Cの4トレンチにかけて検出された。第Gトレンチでは、約20cmの表土及び耕土を除去すると、北に広がった溝が検出された。溝幅は南側が2.5m、北側が8m以上、溝の残存する深さは南側が約7cm、北側が約11cmを測る。第Aトレンチでは、約30~40cmの表土及び耕土を除去すると、トレンチの西側に溝が検出された。溝幅は南側が約4m、北側が10m、溝の残存する深さは南側が約30cm、北側が約40cmを測る。溝の続きを確認するために第B、Cトレンチを設定したところ、地表下約20~30cmで、東西2つに分かれ、やや西へ



第17図 溝4土層図

カーブした溝が検出された。東溝(溝4-B)は、溝幅が2.5m、残存する深さは南側で約15cm、北側が約25cmを測る。西溝(溝4-A)は、溝幅1.5m、残存する深さ約15cmを測る。

溝の底のレベルを比べてみると、第Cトレンチから第Gトレンチに向かって順次低くなっている。比高差は約50cmを測る。地形的にみて、約30m南には今津川が流れていることから、溝4が北へ流れる支流であった可能性も考えられる。

遺物は、古墳時代後期から奈良時代前期と思われる。須恵器の环身、环蓋、壺、甕、高坏、横瓶等、土師器の坏、鉢、甕等が出土している。

**その他の遺構** 第Aトレンチの竪穴住居16を擾乱する土坑や、第B、Dトレンチに溝状の落ち込みが検出されたが、ほとんど遺物が出土しておらず、整地時の擾乱とも考えられる。第Fトレンチでは、直径30~70cmのビットが30数個、北西側では不整形な落ち込みが検出されたが、明確な遺構にはならなかった。

## 5 遺 物

### (1) 繩文時代

第4区の溝1より多量に出土した。縄文式土器は、沈線と縄文、沈線のみによって文様が形成されており、隆起帶を伴う土器は認められない。また、(518、519)の様に、他にあまり類例をみない把手を付けた上器もある。

形態的には三種類に分けることができる。I類はコップ状になるもの(522、523)、II類は頸部があまり屈曲せずに胸部に続くもの(518、519、521、529)、III類は口縁部と胸部との境に明確な屈曲部がつくもの(524~526、528、531~537)であり、III類のものでも平縁のもの(524~526、528、533~535)と波状口縁のもの(531、532、536、537)に細分することができる。底部は体部と別々に作り接合するもので、その接合痕が底部に残る。(543)は底部外面に縄文を残す。施文パターンは沈線によって区画された内側に羽状文を施すもの(519、522~526)、渦巻文を施すもの(519、520、530、531)、同心円文を施すもの(527、532)等がみられ、半截竹管による施文と思われる。県内における類例としては、東浅井郡下草野村醍醐遺跡、坂田郡山東町番の面遺跡等があり、その他県外では三重県鈴鹿市東庄内B遺跡<sup>④</sup>、富山县大沢野町布尻遺跡<sup>⑤</sup>、岐阜県美濃加茂市牧野小山遺跡等に類例が認められ、恐らく縄文時代中期中頃から中期後半頃に比定できると思われる。

第1区の第25・27拡張トレンチ遺構面より(108)が検出された。口縁端部に刻み目、口縁端部下に刻み目突唇をめぐらす。縄文時代晩期の滋賀県N式になると思われる。また、第4区の竪穴住居14から検出された(192)も、同時期のものと思われる。

### (2) 弥生時代

**前期** 前期の土器は、第2区の第5トレンチ落ち込み内から土に出土し、他に表探で1点（107）が出土している。壺は、頭部から強く屈曲して斜外方に大きくひらく口縁部をもち、体部には5条前後の描沈線が施されている。甕は、口縁部が外反し、胴部は張らず、胴部最大径は口徑より小さい。口縁端部に刻み目をもつものもみられる（107、D、E）。体部には二～五条ほどの描沈線が施され、沈線間に刻み目が施されているものも認められる（E）。形態及び施文からみて、第1様式新段階に相当するとと思われる。

**中期** 中期の土器は、第4区の堅穴住居12、14、方形周溝蓋、第5区の堅穴住居8、9、土坑6、7から土に出土している。器形は、壺、甕、鉢、高杯、水差がみられる。壺は、頭部よりゆるやかに外反する口縁部をもち、端部をつまみあげ、内面に櫛描文、瘤状突起をもつもの（126）、頭部から屈曲して立ち上がる口縁部で、頸部に突帯をもつもの（144、211、230）、直口する口縁部をもつもの（172）が認められる。その他、胸部に櫛描平行線文と波状文を交互に施すものがある（135）。甕は、くの字状の口縁部で、口縁端部外面に刻みが入るもの（142、174、196）、くの字状の口縁部で、端部をわずかにつまみあげるもの（202、215）、くの字状の口縁部で、端部が下に拡張するもので、口縁部外面に凹線などを施すもの（140、188）がある。鉢は、完形品がないため器形を明確にしがたいが、肩が張らず比較的長脣になるものがみられる。鉢は、完形品がないため器形を明確にしがたいが、内窓する口縁部外面に一条の貼付突帯をめぐらし、その上に棒状浮文を施すものがある（143）。高杯は、口縁部外面に一条の凹線文が施された、ほぼ直口する口縁部をもつもの（176）と、水平にのびる口縁部の内面に一条の突帯をめぐらし、口縁端がわずかに垂下する痕跡のあるもの（175、201）とがある。水差は、外面に四条の凹線文が施された直口する口縁部をもち、算盤玉状の体部外面には、櫛描文が施されている。そして、体部下方から脚部にかけて荒い刷毛調整されている。

この時期の遺物の本遺跡における特色として、くの字状の口縁部で端部に刻みを施す甕が比較的多くみられること、また、凹線文は鏡内の第IV様式のものほど多用されてないことがあげられよう。

**後期** 後期の土器は、第1区の堅穴住居4、5、第3区の堅穴住居7、第5区の堅穴住居10、11で、まとまって出土している。器形は、壺、甕、高杯、鉢、器台が認められる。壺は、外反した口縁部の端部に面をなし、丸みをもった胴部をもち、ほとんど装飾を施さないもの（45～47、58）、外反した口縁部の端部を拡張し、外面に円形浮文を貼り付けたもの（57）、受け口状口縁をもち、口縁部及び肩部に櫛描平行線、刺突列点文を施し、胴部が丸みをもつもの（56）、外反した口縁部の端部が丸くおわるもの（155）がある。甕は、受け口状口縁のものが主流を占める（51～53、61～64、76）。その中で、（51）は、口縁部の形態、及び胴部外面を右上りのタタキの後荒い刷毛で消し、内面は底部から頸部にかけてカキアゲ、という特異なもので、近江の受け口状口縁の甕とは異なるものであろう。（52）の甕も、内面を底部から頸部にかけ削りしており、搬入品であろう。高杯は、浅い皿状の底部から屈曲して上方へ立ちあがる口縁部をもつもので、中でも直線的に立ち上がるもの（151）と、外方へ広がるもの（60）とがあり、時期差が認められる。他に、プランデーグラス状の深い杯部をもつもの（60）がある。鉢は、受け口状口縁をもち、口縁部及び肩部を装飾するもの（55、77）と、受け口状口縁であるが口縁外面に擬凹線を施し、胴部最大径が口徑より小さいもの（54）とがあり、（54）は搬入品と思われる。また、底部より外方へ広がる、逆台形のもの（164）がある。器台は、筒状の胴部で脚部が外反するもの（165）、円筒状の胴部の上下を鼓状に外反させたもの（166）、同様な形態で、大きく広がる口縁端部を垂下させたもの（81、82）、また、口縁端部をより大きく垂下させ、擬凹線を施した、搬入品かと思われるもの（80）もある。遺跡全体からみると、堅穴住居10の遺物が弥生時代後期のうちでも、もっとも古い様相をもっており、堅穴住

居11の遺物がそれに続くものと思われる。第1区で長頸壺がみられるが、各住居跡には長頸壺は伴出していない。第1区の長頸壺は退化した時期のもので、おそらく竪穴住居IIに平行するか、それに続く時期のものと考えられる。その他の住居跡の遺物は、長頸壺の時期をさかのぼるものではなく、弥生時代末期までの範疇におさまるものであろう。

### (3)飛鳥時代～平安時代

第1区の竪穴住居1、2、第3区の土坑3、第4区の竪穴住居18、第5区の土坑12、第6区の竪穴住居16、18、19、溝4等から、まとまって出土している。器形は、須恵器の环窓、环身、高环、提瓶、横瓶、蓋、甕、鉢、土師器の甕、高环、碗、鍋、鉢、甕、大皿、小皿、耳皿、椀、羽釜、黒色土器の皿、碗、灰釉陶器の皿、碗、耳皿、白磁碗等がある。竪穴住居1、2の土器は、环身の立ち上がりが短く内傾しており、陶器のTK 209型式に相当するものであろう。土師器の甕はいわゆる近江型であり、底部外面を笠削りするもの(16)もみられる。時期は、7世紀初頭から前半に相当すると思われる。土坑3の土器は、船の把手がさし込みになっており、船の外側は、底部まで刷毛のもの(101)と、底部を笠削りするもの(100)がある。环の形態からみて、竪穴住居1、2とほぼ同時期になると思われる。竪穴住居13の土器は、土師器の小型甕の底部に笠削りがみられ(182)、环の形態からみて、竪穴住居1、2とほぼ同時期になると思われる。竪穴住居16の土器は、船の把手がさし込みになっており、土坑3と同時期になると思われる。竪穴住居18の土器は、环の形態からみて7世紀代になると思われる。竪穴住居19の土器は、土師器の甕はくの字に外反し端部に面をもつ口縁部をもち、小型甕は、底部が笠削りのもの(383)と、底部まで刷毛のもの(386)とがみられる。环の形態からみて、8世紀前半になると思われる。溝4の土器は、造構の性格上時期幅があり、飛鳥時代から平安時代まで相等すると思われ、遺物は、須恵器が主体を占め土師器が少ない。中には、暗文を施す土師器の环や碗も認められる(443～447)。平安時代の遺物としては、縫釉陶器、灰釉陶器が混じる。

### (4)平安時代後期

土坑12の土器は、この時期の一括資料として、良好なものである。土師器は、まず大皿、小皿があり、器壁の厚い粗製のものとやや器壁の薄いものとにわかれる。また、粗製の皿については高台の付くものがある。小皿は、口縁端部をまきこんだもの(257～264)と、外方へ広げるものの(265～273)とがあり、後者には粗製のものも認められる(272、273)。特異な器形として、耳皿がある(276、277)。また、コースター状の小皿も認められる(274、275)。小皿の中にはクロコ成形で底部に系切り痕を残すものがあり、皿状のもの(278～286)と、椀状のもの(287～291)とに分類でき、形態的にバラエティがみられる。中でも(290、291)は、大形である。煮沸器はわずかであるが、口縁端を内側につまみこんだ鍋と、羽釜が認められる。黒色土器は、近江型黒色土器とよばれる瓦器を模したもので、内外面両面の小皿(303～313)、小碗(319)と、内面の椀(314～320、322)とがある。他に瓦器の小片が1点出土している(321)。陶器は、終末期の灰釉と初期の山茶碗があり、灰釉には輪花状のもの(327)を含んでおり、碗が大半を占める。他に耳皿(323)、折口皿(324)、皿(331)などがわずかに含まれる。山茶碗(333～338)は、碗に限られる。白磁は、口縁の小ぶりな碗(342)と口縁部が内湾ぎみに立ち上がるものの(343)と休部中程で段がつくもの(344)とがある。須恵器は、甕の胴部破片が1点認められた(345)。

土師器、黒色土器、瓦器、灰釉陶器、白磁などの各器種の編年観から、この一括遺物は、11世紀末頃の年代觀がえられよう。

#### (5)鎌倉時代以降

第1区の土坑2、第5区の土坑12から出土している。土坑2の土器は、土師器の皿、台付皿、山茶楓の皿で、土師器の皿は、口径8cm前後の小皿5点と、口径14cmの大皿1点があり、口縁部は内凹するものである。山茶楓の皿は、糸切り底で無軸のもの(89)である。時期は13世紀前半になると想われる。土坑12の土器は、白磁の皿で、削り出しで直立する高台をもち、外底面に「大」の字の墨書きがある。時期は15世紀くらいになると想われる。

#### (6)石器・石製品

第1区 磨製石斧3点、砥石1点が出土している。(7)は、堅穴住居2より出土した磨製石斧で、基端は尖りぎみであり、刃部に向って広がる。刃先は、使用によるためか両面共に鉗離している。重さ217.3gで、石材は和泉砂岩を使用している。最大長10.3cm、最大幅4.8cm、最大厚3.2cm。(8)は、堅穴住居4より出土した磨製石斧で、刃先がやや欠損している。重さ165.1gで、石材は和泉砂岩を使用しているが、(7)に比べて石材が脆く、全体的に磨滅が著しい。最大長10.4cm、最大幅4.7cm、最大厚2.1cm。(9)は、堅穴住居4より出土した磨製石斧で、刃部は欠損している。また、基部もやや破損している。重さ96.1gで、石材は流紋岩の一種を使用している。現存長7.1cm、最大幅4.45cm、最大厚2.0cm。(26)は、堅穴住居1より出土した砥石で、3面が欠損している。石材はアブライトを使用している。現存長3.2cm、現存幅3.2cm、最大厚2.2cm。

第4区 磨製石鎌2点、扁平片刃石斧の一様1点、環状石斧の未製品1点、磨製石斧1点、扁平片刃石斧1点、砥石1点、磨石2点、丸石1点、凹み石1点、用途不明石製品2点、打製石斧1点が出土している。(3)は、溝2より出土した有茎式磨製石鎌で、刃部先端を欠損している。平面形は、刃部の長い綫長で両面に鏽が通る、略菱形状を呈す。断面は、刃部では菱形であり、基部は扁平な梢円形である。重さ6.4gで、石材はアジノール板岩を使用している。現存長は6.55cm、最大幅2.1cm、最大厚0.45cm。(4)は、第11トレンチ落ち込みから出土した磨製石鎌で、平面形は二等辺三角形を呈し、基端は半楕式である。両側刃の刃縁は薄く、鋭い。鎌ではなく、断面は扁平である。重さ2.15gで、石材はアジノール板岩を使用している。最大長3.2cm、最大幅1.8cm、最大厚0.3cm。(6)は、堅穴住居12の床面より出土した扁平片刃石斧の一様で、基部上方が欠損している。刃縁は扁刃で、刃先は両面に研磨が認められるが、一面の磨きが著しく、片刃石斧であろうと思われる。基部の一面には自然石面を残し、他面は打ち欠いただけの面で、手が加えられていないものと思われる。重さ13.6gで、石材は真岩を使用している。現存長4.35cm、現存幅4.4cm、現存厚0.5cm。(10)は、溝1下層より出土した環状石斧の未製品である。両面に自然石面を残し、周囲を打ち欠いて刃部を作り出そうとしている。中心孔は、両面より穿ちかけている。重さ456.5gで、石材はアブライトを使用している。長径11.8cm、短径11.0cm、最大厚2.8cm。(12)は、第19トレンチピット2より出土した、小型の打製石斧である。刃先は、両面より打ち欠いて作り出している。重さ105.9gで、石材は変成度の高い粘板岩を使用している。最大長9.1cm、最大幅5.2cm、最大厚1.5cm。(13)は、溝1下層より出土した磨製石斧で、刃部を欠損している。基端及び両側面には特に丁寧な研磨が施され、面取りを行う。基端は尖りぎみではあるが、平たい。断面は、長方形に近い梢円形である。重さ271gで、石材は蛇紋岩を使用している。現存長9.4cm、現存幅5.4cm、最大厚2.3cm。(14)は、方形周溝葉

より出土した扁平片刃石斧と思われるもので、刃部を欠損している。基端及び両側面は特に丁寧な研磨が施され、面取りを行う。基端は、ほぼ直線的である。断面は長方形に近い梢円形であり、他の磨製石斧と異なる。重さ 111.5 g で、石材は安山岩系のものを使用している。現存長 5.2 cm、現存幅 5.9 cm、最大厚 2.4 cm。(16) は、溝 1 下層より出土した磨石で、半分に割れている。上下 2 面に使用痕を残す。重さ 472 g で、石材は微花崗岩を使用している。直径 9.8 cm、最大厚 5.5 cm。(17) は、溝 1 上層より出土した磨石であるが、片面に凹み痕を残し、凹み石としての役割も兼ね備えていたのかもしれない。重さ 444.5 g で、石材はアブライトを使用している。長径 8.4 cm、短径 7.9 cm、最大厚 4.5 cm。(18) は、溝 1 上層より出土した凹み石であるが、周りに敲き痕を残し、敲き石としての役割も兼ね備えていたのかもしれない。重さ 291 g で、石材は砂岩を使用しているが、もなく、その使用範囲が限定されていたのかもしれない。(19) は、竪穴住居 12 の 2 層より出土した丸石である。自然石か自然石に多少手を加えて丸味をもたせたものである。重さ 166.7 g で、石材は砂岩を使用している。長径 5.6 cm、短径 5.45 cm、最大厚 4.8 cm。(27) は、竪穴住居 12 の床面より出土した砥石で、その大きさより据え付けて使用したものと思われる。長辺 2 個面には、浅い溝状の使用痕が認められる。また、平面上には敲かれたと思われる凹みが無数についている。石材は硬砂岩を使用している。最大長 27.3 cm、最大幅 15.7 cm、最大厚 10.5 cm。(21) は、方形周溝裏より出土した石製品で、上下 2 面に僅かながら磨き面を残す。しかし、形が扁平で持ちにくいために、一応用途不明の石製品とした。重さ 306.5 g で、石材は硬砂岩を使用している。長径 10.8 cm、短径 8.8 cm、最大厚 2.55 cm。(25) は、竪穴住居 12 の 2 層より出土した石製品で、未製品と思われる。片面には丁寧な研磨が施されており、他面は打ち欠いただけの剝離面を残す。刃部は両面より丁寧な研磨が施されており、先端部においてやや弯曲し、その部分の刃先が特に鋭い。両端部は欠損している。重さ 65.9 g で、石材は頁岩を使用している。現存長 9.25 cm、最大幅 3.55 cm、最大厚 1.4 cm。

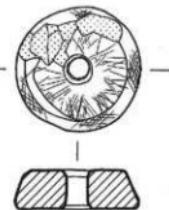
第 5 区 磨製石劍 1 点、磨製石戈の未製品 1 点、扁平片刃石斧の一種 1 点、始刃石斧 1 点、砥石 3 点、丸石 1 点、石皿状の石製品 2 点が出土している。(1) は、竪穴住居 9 の床面より出土した磨製石劍で、剣先部を欠損している。石劍基端は、丸味をもって面取りを行っている。鍔は中央部を真円に通る。研磨は、剣先部においては右下りの方向に、下方にいくに従って刃部に対して垂直になるような方向に施されている。断面は菱形である。重さ 78.6 g で、石材は珪質頁岩を使用している。現存長 22.4 cm、最大幅 3.1 cm、最大厚 0.7 cm。(2) は、土坑 8 より出土した磨製石戈の未製品と推定されるもので、一方の刃部のみを研磨しかけている。石戈基部下方は欠損しているものと思われる。重さ 104.6 g で、石材は珪質頁岩を使用している。現存長 14.4 cm、現存幅 5.2 cm、最大厚 0.9 cm。(5) は、土坑 12 より出土した扁平片刃石斧の一種で、刃部の研磨以上は打ち欠いただけの剝離面を残す。刃縁は扁刃で、刃先は鋭い。重さ 16.3 g で、石材は頁岩を使用している。最大長 7.95 cm、最大幅 2.35 cm、最大厚 0.7 cm。(15) は、竪穴住居 9 より出土した始刃石斧で、刃縁は丸刃で、刃先は鋭くない。重さ 348 g で、石材は硬質凝灰岩を使用している。最大長 10.55 cm、最大幅 5.3 cm、最大厚 4.1 cm。(20) は、竪穴住居 9 より出土した丸石である。自然石か自然石に多少手を加えて、丸味をもたせたものである。重さ 3 kg で、石材は硬砂岩を使用している。長径 14.1 cm、短径 13.0 cm、最大厚 11.45 cm。(22, 23) は、竪穴住居 9 の床面より出土した石皿状の石製品で、(22) は半分が欠損している。片面にのみ使用痕としての磨きが加えられている。石材は硬砂岩を使用している。最大長 24.9 cm、現存幅 17.5 cm、最大厚 4.0 cm。(23) は両面共に凹面状にすりへっており、石皿として使用したものと思われる。石材は砂岩を使用している。最大長 23.2 cm、最大幅 25.1 cm、最大厚 8.3 cm。(24) は、竪穴住居 9 の床面より出土した砥石で、おそらく据え付けて使用したものと思われる。

2面に使用痕が認められる。石材は硬砂岩を使用している。最大長28.6cm、最大幅22.05cm、現存厚7.9cm。(28)は、土坑12より出土した砥石で、(28)は3面が欠損している。石材は半花崗岩を使用している。現存長8.85cm、現存幅4.6cm、最大厚3.75cm。(29)は4面に使用痕が認められる。石材はアジノール板岩を使用している。最大長16.05cm、最大幅6.05cm、最大厚1.6cm。

第6区 砥錐車1点、砥石1点が出土している。紡錐車は堅穴住居16内埋土より出土した。側面に4ヶ所鋸齒文状に刻み目が施され、上面にも粗い刻み目が入る。直徑3.8cm、高さ1.2cm、孔の直徑6mm、重さ30.5g。石材は滑石を使用している。

(30)は、溝4より出土した砥石で、大型の砥石を打ち欠いて作ったものと思われる。石材は砂岩を使用している。現存長21.9cm、現存幅6.1cm、現存厚3.4cm。

他に表探遺物であるが、打製石斧が1点出土している(11)。重さ105.9gで、石材は頁岩を使用している。最大長12.1cm、最大幅5.05cm、最大厚2.0cm。

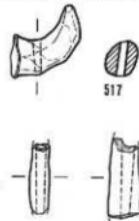


第18図 砥錐車実測図

#### (7) 土 製 品

第1区 土錐3点、有孔土製品2点が出土している。(44)は、堅穴住居2の北東部より出土した土錐である。淡赤褐色の土師質。長さ4.4cm、最大径1.2cm、孔の直徑3.5~5.5mm、重さ6.6g。

(47)は、土坑2より出土した土錐である。赤褐色の土師質。長さ2.2cm、最大径6.5mm、孔の直徑2mm、重さ0.65g。(48)は、同じく土坑2より出土した土錐である。淡赤褐色の土師質。長さ3.2cm、最大径7mm、孔の直徑2.5mm、重さ1.4g。(49)は、堅穴住居4より出土した有孔土製品である。片端が欠損しているため形状は不明であるが、おそらく長方形になると思われる。端の方に直徑3mmの孔が2ヶ所穿たれているが、反対側にも対になると思われる孔が一部残存している。淡黄褐色の土師質。残存長5.7cm、最大幅3.9cm、厚さ1.3cm。(50)は、同じく堅穴住居4より出土した有孔土製品である。一部欠損しているが円形になると思われ、端の方に直徑約3mmの孔が2ヶ所穿たれている。そして、反対側にも対になると思われる孔が一部残存している。淡黄褐色の土師質。直徑4.2cm、厚さ1.5cm。



第19図 土製品実測図

第6区 土錐2点、有孔土製品1点が出土している。(517)は、第Bトレンチの溝4-B下層から出土した。ミニチュアの瓶の把手と思われる。直徑2mm程の孔が穿たれている。長さ2.8cm、断面は1.5×1.3cmの楕円形。(518)は、第Cトレンチ溝4-Bから出土した土錐である。淡赤褐色の土師質。残存長2.8cm、直徑8mm、孔の直徑3mm、重さ1.4g。(519)は、第Cトレンチ溝4-Bから出土した土錐である。淡黄褐色の土師質。残存長3.2cm、直徑約1.5cm、孔の直徑3mm、重さ約6.2g。

# 弘川遺跡出土土器観察表

## 第Ⅰ次調査出土土器（第1区～第3区）

器 形	No	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
竪穴住居1					
須恵器 壺	1	口径 1.1 器高 3.75	口縁部はほぼ直線的にさがり、端部は丸くおさまる。口縁部と天井部との境には明確な棱を作らない。天井部はやや高く丸い。	内外面クロナダ。天井部は未調整。	色調 淡灰色 胎土 1mm位の微砂を含む 焼成 硬 残部 (1)1/2 (2)1/3 (3)完形
	2	口径 1.2.2 器高 3.2			
	3	口径 1.2.2 器高 4.2			
須恵器 壺身	4	口径 9.9.5 器高 3.5	立ち上りは短く、内傾し、端部は丸くおさまる。体部は丸味をもち、底部は平らになる。	内外面クロナダ。底部は未調整。	色調 淡青灰色 胎土 小石を含むが精良 焼成 硬 残部 ほぼ完形 ※ (1)が蓋と思われる。
	5	口径 1.0.9	口縁部はやや内凹して立ち上り、端部は丸くおさまる。頸部はあまりくびれず、胸部最大径は口径とほぼ同じである。	口縁部内外面は横ナダ。胴部内外面は刷毛。	色調 (5)淡黄褐色 (6)灰褐色 胎土 微砂を含む 焼成 (5)やや軟 (6)硬 残部 (5)1/4 (6)1/6
	6	〃 1.3.6			
土師器 壺	7				
	8	口径 2.0.5	口縁部は内凹して立ち上り、端部はやや凹む。頸部はあまりくびれず、胸部は張らない。	内外面刷毛後横ナダ。ヘラ記号をつける。 口縁部及び頸部外面は刷毛後横ナダ。胴部内外面は刷毛。	色調 淡黄褐色 胎土 微粒砂を含む 焼成 硬 色調 (8)黄白色 (9)淡黄褐色 胎土 (8)2mm位の小石含む (9)微砂を含む 焼成 (8)硬 (9)やや軟 残部 (8)1/4 1/10
	9	口径 2.2.4			
土師器 壺	10	口径 2.4.3	口縁部は内凹して立ち上り、端部は尖りぎみである。頸部はあまりくびれず、胸部最大径は口径とほぼ同じで長削である。	口縁部及び頸部外面は刷毛後横ナダ。胴部内外面は刷毛。	色調 (10)淡黄褐色 (11)淡褐色 胎土 2mm位の小石を含む 焼成 やや軟 残部 (10)1/2 (11)1/4
	11	口径 2.7.4			
	12	口径 2.6.9			
土師器 壺	13	〃 2.5.8	口縁部は内凹して立ち上り、端部は外につまみ出す。頸部はあまりくびれず、胸部最大径は口径とほぼ同じか小さく長削である。	口縁部及び頸部外面は刷毛後横ナダ。胴部内外面は刷毛。頭はヘラ記号をつける。	色調 (22)淡黄褐色 (24)黄灰色 (22)1mm位の石英片 胎土 (23)精良 (24)2mm位の小石含む 焼成 硬 残部 (22)1/12 (23)1/15 (24)1/5
	14	〃 2.1.8			
	15	口径 2.3.9	口縁部は内凹して立ち上り、	口縁部及び頸部外面は刷毛	色調 黄白色

			端部はつまみ出し、内側に条線が入る。	毛後横ナデ。底部内外面は刷毛。	胎土 3mm位の小石を含む 焼成 硬 残部 1/4
	1.6		丸底の底部。	外面は簾削り。内面は刷毛。	胎土 矽褐色 胎土 2mm位の長石片含む 焼成 硬 残部 底部完存
土器 甕	1.7		正面の底部分。	内面は刷毛。外面はナデ。端部は簾削り。	色調 淡褐黃色 胎土 雜粒砂を含む 焼成 硬 残部 1/4
弥生式 土器 高坏	1.8		脚柱部で、外より内に穿かれた二段の円孔がある四方につく。	外面は恐らく簾削き。内面には絞り痕を残す。	色調 淡黄褐色 胎土 雜粒砂を含む 焼成 硬 残部 1/4
弥生式 土器 甕	1.9	底径 2.7	平底の底部。体部は外反しながら立ち上る。	内面は刷毛。	色調 淡赤褐色 胎土 2mm位の小石を含む 焼成 硬 残部 1/2
	2.0	底径 4.4	平底の底部。体部は直線的に開く。	内面は刷毛。	色調 淡黃褐色 胎土 2mm位の小石を含む 焼成 硬 残部 1/4
土器 甕	472 7 477		口縁部の破片。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面は刷毛後横ナデ。	色調 (472, 473, 477) 淡黄褐色 (474 ~ 476) 淡黃白色 胎土 良 焼成 (476) やや硬 他は硬

### 竪穴住居 2

須恵器 甕身	2.1	口径 9.8 器高 3.65	立ち上りは短く、内傾し、端部は丸くおさまる。体部は丸味をもつ。	内外面クロナデ。底部は未調査。	色調 淡灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 ①ほぼ完形 ②完形 ③3/4 ④ほぼ完形 ⑤2/3 ⑥1/8 ⑦1/7
	2.2	口径 9.6 器高 3.5			
	2.3	口径 1.1.0 器高 3.4			
	2.4	口径 1.1.0 器高 3.7			
	2.5	口径 1.0.0 器高 3.2			
	2.6	推定口径 1.2.0			
	2.7	口径 1.1.1			
	2.8	口径 1.0.0 器高 3.5	立ち上りは内窓し、端部はほぼ丸くおさまる。受部は上向きである。	内外面クロナデ。底部は未調査。	色調 灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/3
須恵器 甕?	2.9	底径 3.0	やや丸味をもった平底の底部。体部はやや内凹ぎみに立ち上る。	内面クロナデ。底部未調査。体部外面簾削りか。	色調 白灰色 胎土 精良 焼成 軟 残部 底部完存
須恵器	3.0	口径 1.1.0	口縁部は外反し、端部は丸	内外面クロナデ。	色調 淡灰色

高 环?			くおさまる。		胎土 精良 焼成 硬 残部 1/3
須 恵 器 平底	3 1		体部上半に雷描き線刻。平底ぎみの底部。胴部はやや扁半な球体である。	体部外間にカキ目を施し、中程以下を横ナデで消す。内面はロクロナデ。	色調 淡灰色 胎土 精良(気泡が多い) 焼成 硬 残部 体部完存
須 恵 器 横版	3 2		胴部は横長で後退の梢円である。	内外面ロクロナデ。側面の成形時の穴を外側よりふさぐ。	色調 青灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/2 ※ 脇部に自然輪付着
土 師 器 椀	3 3 口径 1.2.2 3 4 " 1.4.6		口縁部は内寄り、深味がある。共に丸底の底部。	外歯口縁部を横ナデし、下半を籠削り。	色調 ⑩淡黄白色 ⑪赤褐色 胎土 微粒砂を含む 焼成 軟 残部 1/4
上 師 器 臺	3 5 口径 1.9.9 3 6 口径 1.7.5 3 7 " 2.3.6 3 8 " 1.8.2		口縁部は内寄する。胴部はあまりくびれず、胴部最大径は口径とはほぼ同じと思われる。	口縁部内外面刷毛後横ナデ。胴部内外面刷毛。	色調 淡赤褐色 胎土 微粒砂を含む 焼成 軟 残部 1/4
上 師 器 臺	3 9 口径 2.8.2 4 0 " 2.8.5		口縁部は内寄り、端部は外につまみ出す。頸部はあまりくびれず、胴部最大径は口径とはほぼ同じで長胴。	口縁部内外面は刷毛後横ナデ。胴部内外面は削毛。(37、38) ヘラ記号をつける。	色調 ⑩淡赤褐色 ⑪淡黄褐色 ⑫暗褐色 ⑬暗褐色 ⑭微粒砂を含む 胎土 ⑨. ⑩ 2mm位の長石を含む 焼成 硬 残部 ⑩ 1/9 ⑪ 1/4 ⑫ 1/3
土 師 器 鍋			口縁部はほぼ水平に外方に広がり、端部は外に面を作る。	口縁部外面は刷毛後横ナデ。他の内外面は刷毛。	色調 ⑩淡黄褐色 ⑪暗茶褐色 胎土 微粒砂を含む 焼成 硬 残部 ⑩ 1/8 ⑪ 1/16
外 生 式 土 師 器 臺	4 1 口径 1.4.2		口縁部は外反して立ち上り、端部は中窪みで外に面を作る。内面は不明。	口縁部外面は刷毛後横ナデ。内面は不明。	色調 暗茶褐色 胎土 2mm位の小石を含む 焼成 硬 残部 1/9
外 生 式 土 師 器 臺	4 2 底径 3.9		やや上げ底の底部。体部はやや外反ぎみに立ち上る。	体部内外面は刷毛。底部は未調整。	色調 淡灰褐色 胎土 2mm位の小石を含む 焼成 硬 残部 1/2
外 生 式 土 師 器 高环	4 3		脚柱部はほぼ直線的に外に開く。环部はやや外反している。	内外面磨削のため調整方法は不明。脚柱部内面に絞り痕を残す。	色調 乳白色 胎土 2mm位の長石を含む 焼成 やや硬 残部 2/5
土 師 器 臺	478		口縁部は内寄している。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面は刷毛後横ナデ。	色調 淡黄褐色 胎土 1mm位の微粒砂を含む 焼成 硬

豊穴住居4

弥生式 土器 蓋	4 5 4 6 4 7	口径 13.0 5 " 14.8 5 " 12.8	口縁部は外反して立ち上り、 肩部は上下に拡張する。	側面部は横ナデ。口縁部内 外面は刷毛後横ナデ。側面部 は刷毛後横ナデ。口縁部外面 は刷毛後横磨き。肩部内面下 方は刷毛。他の内外面は寛磨 き。側面部は刷毛。口縁部外 面は横ナデ。肩部内面は刷毛。 外面は寛磨き。内面は寛削 り。	色調 淡黄褐色 胎土 衛模赤褐色 焼成 3mm位の小石を含む 施成 やや硬 硬度 硬 形状 切や軟 残部 口縫部完存
弥生式 土器 蓋	4 8		脚柱部は下方において聞く。 外より内に三方の凹孔を穿つ。	外面は寛磨き。内面は寛削 り。	色調 淡赤褐色 胎土 微板の腐り穢を含む 焼成 やや硬 施成 腹部 脚柱部完存
弥生式 土器 蓋	5 1 5 2 5 3	口径 15.8 最大高 24.95 最小高 24.55 底径 4.3	頸部は外反し、口縁部は直 立する。肩部最大径は、總高 中程や上方にくる。平底の 底部。	口縁部外面に鍛凹線を施す。 頸部及び肩部外面上方は右上 りの叩き後、横ナデ。底部外面 は右上方の叩き。肩部中位より 下半にかけて、刷毛と工具 で粗く緩方向に整形する。肩 部内面下方は横ナデ。肩部内 面下方は下から上への箝削り。	色調 淡黄褐色 胎土 2mm位の小石を含む 焼成 硬 施成 ほぼ完形 参考 肩部外面に媒付着。
弥生式 土器 鉢	5 4 5 5	口径 17.0 最大高 24.6 最小高 22.25 底径 4.0	頸部は外反し、口縁部は上 下に拡張する。頸部は厚みを もつ。肩部最大径が中位にあり、 休部は丸味をもつ。平底の 底部。	口縁部外面に鍛凹線を施す。 頸部及び肩部外面上方は刷毛 後横ナデ。肩部外面下方は刷 毛。口縁部内面は横ナデ。肩 部内面は寛状工具により下か ら上へかきあげる。	色調 淡黄褐色 胎土 2mm位の小石を含む 焼成 硬 施成 完形 参考 肩部外面に媒付着。
弥生式 土器 鉢	5 4 5 5	口径 17.9 5 最大高 12.4 最小高 10.8	頸部は外反し、口縁部は外 傾ぎみに立ち上る。肩部最大 径は口径より小さく、丸みを おびる。	口縁部に鍛凹線を施す。頸 部外面は刷毛。肩部外面上方 は刷毛後寛状工具による器面 調整。口縁部及び頸部内面は 横ナデ。肩部内面は寛磨き。	色調 淡黄褐色 胎土 2mm位の小石を含む 焼成 やや硬 施成 完形
弥生式 土器 鉢	5 6 5 7	口径 15.4 最大高 10.2 最小高 9.9 底径 2.5 5	頸部は外反し、口縁部は内 傾ぎみに立ち上る。肩部最大 径は下方にあり、やや上げ底 の底部。	口縁部及び頸部外面は横 ナデ。肩部外面上方に六条の 横筋平行線を施し、その下に 刺突列点を施す。肩部外面下 半は刷毛。肩部内面上半は刷 毛と思われる。底部は未調整。	色調 淡黄褐色 胎土 2mm位の小石を含む 焼成 やや軟 施成 ほぼ完形

豊穴住居5

弥生式 土器 蓋	5 6 5 7	L径 14.5 口径 16.0	頸部は外反し、L!縁部はや や外傾する。肩部は球体であ る。	口縁部に棒による刺突列点、 肩部上方外面に柳枝平行線、 柳枝列点文を施す。口縁部及 び口縁部内外面は横ナデ。肩 部外面下半は刷毛。	色調 淡赤褐色 胎土 精良 焼成 やや硬 施成 1/2
			頸部は外反し、口縁部は上 下に拡張する。口縁部外面に	円形浮文に竹管を施す。内 外面共に横ナデ。	色調 淡赤褐色 胎土 精良

		円形浮文を貼り付ける。		焼成 硬 残部 1/10
5 8	口径 9.4	頭部は外反し、口縁部はやや垂下する。	内外面磨滅にて調整方法は不明。	色調 淡黄白色 胎土 精良 焼成 軟 残部 1/6
5 9	底径 3.6	平底の底部。体部は梢円状。	内面下半に笠状具のあたりが残る。	色調 黄白色 胎土 精良 焼成 軟 残部 1/5
赤生式 土 器 高坏	6 0 口径 1.0.6	プランデーグラス状の坏部に脚部がつく。脚柱部には外から内へ三方の円孔が穿かれている。	口縁部は横ナデ。环部外面は恐らく刷毛後磨き。内面は刷毛。脚柱部外面は笠磨き。内面は恐らくナデ。	色調 淡黄灰色 胎土 精良 焼成 やや硬 残部 1/3
赤生式 土 器 高坏	6 1 口径 1.5.0 最大高 1.8.8 最小高 1.8.0	頭部は大きく外反し、口縁部はやや外傾ぎみに立ち立てる。脚部はやや縱長の球体である。	口縁部及び脚部内面は横ナデ。頭部に輪搗平行線を施す。脚柱部外面は縱方向の粗い刷毛後横ナデ。脚部内面は刷毛。	色調 黄茶褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 ほぼ完形
	6 2 口径 1.4.9	頭部は外反し、口縁部は外傾ぎみに立ち上る。脚部はやや縱長の球体である。	口縁部外面の一部に刷毛が残るが、口縁部外面及び内面は横ナデ。脚部外面は粗い刷毛。口縁部外面に笠磨き。	色調 淡黄褐色 胎土 2mm位の長石を含む 焼成 硬 残部 2/5 ※ 制部外面下半に媒付着。
	6 3 口径 1.3.0	頭部は外反し、口縁部はよく立ち上る。	口縁部外面及び内面上方は横ナデ。内面脚部横方向の刷毛。口縁部外面に笠磨き。	色調 淡黄褐色 胎土 3mm位の長石片含む 焼成 軟 残部 1/3
	6 4 口径 1.2.0	頭部は外反し、口縁部は内傾ぎみに立ち上る。	口縁部より上方外面は横ナデ。脚部外面は刷毛。口縁部外面に笠磨き。	色調 赤褐色 胎土 2mm位の長石片含む 焼成 やや軟 残部 1/8
	6 5 口径 2.1.7	口縁部はくの字状。	内外面ナデ。	色調 黄白色 胎土 2mm位の長石片含む 焼成 硬 残部 1/10
	6 6 底径 2.9	平底の底部。体部は直線的に外に立ち上る。	内面刷毛。外表面は磨滅のため不明。	色調 淡黄褐色 胎土 精良 焼成 やや硬 残部 底部完存
	6 7 底径 3.2	中央が埋む底部。体部はやや外反ぎみに立ち上る。	体部外面は斜め方向の刷毛。	色調 淡赤褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 底部完存
赤生式 土 器 高坏	6 8 口径 2.0.6	坏部上半は外反。端部内面に一条の沈線を施す。	内面に指圧痕が残る。	色調 赤褐色 胎土 良 焼成 軟 残部 1/10
	6 9 口径 2.0.4	坏部上半は外反ぎみに立ち上る。	磨滅のため不明だが、部分的に笠磨きが残る。	色調 淡黄褐色 胎土 良 焼成 やや軟 残部 1/10
	7 0 底径 1.1.4	脚柱部に大きく外反する壺	脚柱部外面は笠磨き。内面	色調 淡黄褐色

		部がつく。脚柱部と縁部との境に三方の円孔を穿つ。	はナデ。縁部外面は粗い刷毛。脚柱部外面に窓のあたりが残る。	胎土 2mm位の長石を含む 焼成 硬 残部 1/2
	7.1	脚柱部に外反する縁部がつく。	外面は恐らく全面的に刷毛。	色調 淡黄褐色 胎土 長石片含む 焼成 やや軟 残部 1/2
弥生式 土器 器皿	7.2; 口径16.6	口縁部は外反し、端部はやや垂下する。	端部外面に三条の横筋平行線を施す。口縁部内外面横ナデ。	色調 淡黄褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/10

### 豊穴住居6

土器 器皿	7.3	口径12.6	口縁部は内凹し、端部は外につまみ出す。器味が非常に厚い。	L1縁部外面は横ナデ。脚部外面刷毛で一部横ナデを行う。	色調 赤褐色 胎土 1mm位の微砂を含む 焼成 硬 残部 1/5
土器 瓶	7.4	口径12.2	L1縁部は内凹し、深味がある。丸底の底部と思われる。	体部外面は横方向の刷毛。	色調 淡黄褐色 胎土 2mm位の小石を含む 焼成 やや軟 残部 1/5
弥生式 土器 壺	7.5	口径14.6	縁部は外反し、口縁部は短く外方に立ち上る。	L1縁部外面に横状具による刺突文。口縁部外面は刷毛。L1縁部内面及び脚部内面は横ナデ。L1縁部内面は刷毛後横ナデ。	色調 赤黄色 胎土 3mm位の小石を含む 焼成 やや軟 残部 1/4
不明	479		円孔は外より内に焼成前に穿く。	内面刷毛。外面ナデ。	色調 淡茶褐色 胎土 精良 焼成 硬

### 豊穴住居7

弥生式 土器 器皿	7.6	口径18.1	縁部は外反し、口縁部は上方に立ち上る。	口縁部外面に横状具による刺突点を施す。縁部外面は刷毛。縁部に横筋平行線を施し、二ヶ所に横状具による刺突点を施す。縁部上方内面横ナデ。脚部内面は刷毛。	色調 淡黄褐色 胎土 2mm位の長石片含む 焼成 硬 残部 1/4
	7.7	口径15.7	縁部は外反し、口縁部はほぼ直立する。	口縁部外面に横状具による刺突点を施す。脚部外面上方に四条の横筋平行線、その下方に刷毛後横状具による刺突点を施す。内面は横ナデ。	色調 黄褐色 胎土 2mm位の長石片含む 焼成 硬 残部 1/20
	7.8	口径18.8	縁部は大きく外反し、端部は上方につまみ出す。	磨滅が激しく不明	色調 黄褐色 胎土 2mm位の長石片含む 焼成 軟 残部 1/4
8.3	底径 4.0		やや上げ底の底部。体部は外反して立ち上る。	内面横ね刷毛後ナデ。	色調 淡赤褐色 胎土 乳白色 焼成 軟 胎土 2mm位の長石片含む
8.4	" 3.8				
8.5	" 3.0				
8.6	" 7.0				

					焼成 四四やや軟 四硬 燒成 残部 ④四度都完存 四1/2 燒成部ほぼ完存
弥生式土器高環	7.9	脚柱部	脚柱部内面は想い刷毛。		色調 赤黄色 胎土 2mm位の長石片含む 焼成 軟 残部 4/5
弥生式土器器合	8.0	口径13.5	口縁部は直線的に斜め上方に開き、端部は幅広がりに垂下する。	口縁部外面に擬凹線を施す。内外面共に範磨きと思われる。	色調 淡赤褐色 胎土 2mm位の長石片含む 焼成 硬 残部 1/10
	8.1	口径23.2	口縁部は直線的に斜め上方に開き、端部は垂下する。	口縁部外面に擬凹線を施す。端部上方に篠込みを施す。内外面範磨きと思われる。	色調 淡茶褐色 胎土 5mm位の長石片含む 焼成 やや軟 残部 1/4 ※ 圖と同一個体と思われる。
	8.2	底詳	端部はやや外反ぎみに開く。	内外面範磨きと思われる。	色調 乳白色 胎土 2mm位の長石片含む 焼成 やや軟 残部 1/5 ※ 外面に擬付着。
ミニチュア	8.7	底径 2.0	平底の手捏ねの底部。体部は直線的に立ち上る。	手捏ね。	色調 淡黄褐色 胎土 2mm位の長石片含む 焼成 硬 残部 底部完存

### 第25トレンチ土坑1

土師器 脚部	8.8	底径 1.1	脚部は外反し、端部は外面肥厚する。	脚部内面は刷毛後横ナデ。端部は横ナデ。	色調 淡赤褐色 胎土 1mm位の微砂を含む 焼成 やや軟 残部 1/5
-----------	-----	--------	-------------------	---------------------	--

### 第25トレンチ土坑2

山茶瓶	8.9	口径 7.0 器高 1.15	口縁部は外反し、端部をつまみ上げる。	底部糸切り。内外面は横ナデ。	色調 暗灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/4
土師器 小皿	9.0	口径 8.5 器高 1.8	口縁部は内折し、端部は丸くおさまる。やや丸味をおびた底部。	口縁部内外面は横ナデ。底部内面は仕上げナデ。口縁部下方及び底部外面は未範整。	色調 608088淡黄褐色 胎土 赤褐色 焼成 暗灰色
	9.1	口径 8.6 器高 1.8			胎土 精良 焼成 やや硬 90~94硬
	9.2	口径 6.15 器高 1.7			残部 901/4 901/2
	9.3	口径 8.3 器高 1.65			902/3
	9.4	口径 8.4			901/3

					961/4
上 諸 器 大皿	9.5	口径 14.0	口縁部は内寄し、端部はやつまみ上げる。	内面及び口縁部外面は横ナデ。体部外面は未調査。	色調 淡黄灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/4
上 諸 器 合付皿	9.6	口径 13.4 器高 3.7 底径 7.2	外方に開く頭と、外に張り出す脚部。	内外面横ナデ。貼付高台。	色調 淡黄白色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/6

### 第71 トレンチ土坑3

須 惠 器 环身	9.9	口径 1.0.2 最大高 4.3 最小高 4.0.5	立ち上りは短く、内傾し、端部は丸くおさまる。体部は外方に開く。	内外面ロクロナデ。底部未調査。	色調 淡灰色 胎土 精良 焼成 やや硬 残部 完形
上 諸 器 碗	100	口径 9.5 器高 5.2	口縁部は内寄し、深みがある。丸底の底部。	(100) 口縁部外面横方向の刷毛。底部外面は箒割り。	色調 (100) 淡黄白色 (101) 淡乳黄色
	101	口径 1.2.3		(101) 底部外面斜め方向の刷毛。	胎土 1mm位の微砂を含む 焼成 (100) 軟 (101) 硬 残部 (100) 完形 (101) 1/4
土 諸 器 甕	102	口径 1.8.4	口縁部はくの字状で、端部は上方がやや窪む。胴部はあまり張らず、最大径が口径とほぼ同じ位と思われる。	口縁部内面横方向の刷毛。 口縁部外面は刷毛後横ナデ。 胴部外面は縱方向の刷毛。	色調 淡赤黄色 胎土 1mm位の腐り跡等含む 焼成 軟 残部 1/9
上 諸 器 把手付鍋	103	口径 2.7.1	口縁部はくの字状で、端部は上方がやや窪む。胴部はあまり張らず、中程にやや上向きの把手がつく。	把手は内面まで差し込む。 口縁部外面は刷毛後横ナデ。 把手部分及び胴部内面下方はナデ。内外面は研毛。	色調 淡黄褐色 胎土 1mm位の腐り跡等含む 焼成 硬 残部 1/4

### 第25、27 トレンチ遺構面

弥 生 式 土 器 長頸甕	104	口径 1.1.3	口縁部ははは直線的に立ち上る。	(104) 内外面横方向の刷毛。 (105) 外面縱方向の刷毛。 内面一部に横方向の刷毛が残る。	色調 (104) 淡黄褐色 (105) 淡褐灰色 胎土 (104) 微粒砂を含む。 (105) 2mm位の長石含む 焼成 (104) やや軟 (105) 軟 残部 1/4
弥 生 式 土 器 甕	105	“ 1.2.4			
弥 生 式 土 器 甕	106	底径 5.0	中央がやや窪む底部。胴部は外反しながら開く。	内外面不明。	色調 赤橙色 胎土 3mm位の小石を含む 焼成 軟 残部 底部完存
縄 文 式 土 器 深鉢	108	口径 2.6.5	口縁部は外反しながら立ち上り、端部直下に突帯をめぐらす。端部は波状になる。	貼付突帯及び端部に、押しひきによる刻み目を施す。	色調 暗黄褐色 胎土 3mm位の小石を含む 焼成 軟 残部 1/5

第5 トレンチ包含層

弥生式 土器 甕	109 口径 1.7.6	口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさまる。	内外面荒磨きと見われる。	色調 (109) 黄褐色 (110) 乳黄色 胎土 2mm位の長石片等含 焼成 硬 残部 (109) L/8 (110) L/6
	110 " 1.6.2			
	120 口径 2.0.2	口縁部は外反し、端部は下方に拡張する。端部外面に円形浮文を貼り付ける。	口縁部外面に撫回線を施し、その上には等間隔で浮文を施す。口縁部外面は刷毛。内面は不明。	色調 赤褐色 胎土 麦稈糸を含む 焼成 やや硬 残部 L/4
	124 底径 5.4	平底の底部。体部は内寄りである。	底部未調査。内外面は不明。	色調 淡黄褐色 胎土 1mm位の麦稈糸を含む 焼成 やや硬 残部 底部存
A I C		体部(A)と口縁部(B、C)の破片。	外面に篦括沈線を施す。内外面は隻磨き。	色調 (A) 淡赤褐色 (B) 明黄褐色 (C) 淡褐色 胎土 2mm位の小石を含む 焼成 (A、C) 硬 (B) 敷
	111 底径 2.0.5	口縁部は強く外反し、端部は丸くおさまる。肩部は張らず最大径は口径より小さい。	(111) 口縁部及び胴部外面に粗い刷毛があり、その後胴部外面上方に二条の篦括沈線を施す。 (112) 口縁部外面は横ナデ。胴部外面は刷毛。内面は不明。口縁部に指圧痕が認められる。	色調 (111) 暗赤褐色 (112) 黄白色 胎土 (111) 2mm位的小石含 (112) 3mm位的小石含 焼成 (111) やや硬 (112) やや軟 残部 (111) L/6 (112) L/9
	112 " 3.3.5			
	113 底径 6.8	平底の底部。体部は概ね外反する。	体部内外面刷毛。底部は未調査。	色調 (113) 黄褐色 (114) 灰白色 (115) 黄褐色 (116、117、118) 赤褐色 胎土 (113) 1mm位の長石片 (114、117) 2mm位の小石を含む (115、116、118) 2mm位長石片等を含む 焼成 (113、118) やや軟 (114~117) 硬 残部 (113) L/2 (114) L/2 (115) L/8 (116) L/5 (117) L/2
甕?	118 " 7.2			

			(118) 1/4
弥生式 土器 瓶	119 底径 5.4	平底の底部。体部は外反する。底部に1孔を穿つ。	体部外周刷毛。底部未調査。色調 淡黄褐色 円孔は焼成後穿つ。 胎土 2mm位の小石を含む 焼成 硬 残部 1/5
弥生式 土器 甕	121 口径 1.6	口縁部は受け口状で、端部は丸くおさまる。	口縁部外周に横状具による刺突列点を施す。 色調 淡赤褐色 胎土 微粒砂を含む 焼成 硬 残部 1/6
	123 底径 4.1	やや上げ底の底部。体部は外反して立ち上る。	体部内外面刷毛。底部未調査。 色調 喰赤褐色 胎土 2mm位の長石片含む 焼成 硬 残部 1/3
D L F		(D) 口縁部は大きく外反し、端部に刻み目が入る。 (E) 口縁部は外反し、端部は丸くおさまる。(E) 脚部の破片。	(D) 洞部外面に二条の箇 描沈線を施し、刻み目は篦状具による。 (E) 上下二条の 箇描沈線間に篦状具による刻 み目を施す。(F) 三条の箇 描沈線を施す。内外面刷毛。 色調 (D) 淡黄褐色 (E) 淡赤褐色 (F) 淡赤褐色 胎土 2mm位の小石を含む 焼成 (D, E) 硬 (F) 敷
弥生式 土器 鉢	122 口径 14.4	口縁部は外反し、端部はやや上方につまみ出す。脚部はくびれ、脚部最大径が中程にくる。	洞部外面に篦状具による刺 突列点を施す。脚部外面下方は刷毛。 色調 赤褐色 胎土 1mm位の長石片含む 焼成 敷 残部 1/7
弥生式 土器 高杯	125	脚柱部にやや外反する根部がつく。	脚柱部内外面はナデ。根部 内外面は刷毛。 色調 淡赤褐色 胎土 2mm位の小石を含む 焼成 やや硬 残部 脚柱部穴存

### 表 探

弥生式 土器 甕	107	口径 3.2.2	口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさまる。脚部はあまり強らず、脚部最大径は口縁より小さい。	端部には篦状具による刻み 目。脚部外面は刷毛。上方に 五条の箇描沈線を施す。	色調 基褐色 胎土 1mm位の微砂を含む 焼成 やや硬 残部 1/48
----------------	-----	----------	---	--	--

### 第Ⅱ次調査出土土器(第4、5区)

器種器形	No	法 量(cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
<b>整穴住居8</b>					
弥生式 土器 甕	126	口径 1.2.6	口縁部は大きく外反し、口縁部はつまみ上げる。	口縁部外面に二条の回線を 施す。内面に瘤状突起をもち、 横状具による刺突列点を二段 に施す。	色調 淡赤褐色 胎土 微粒砂を含む 焼成 硬 残部 1/6
	127	〃 1.5.0	脚部よろしくの字状に外反する口縁部。	内外面横ナデ。	色調 淡黄褐色 胎土 1mm位の微砂を含む 焼成 硬 残部 1/10
	130		口縁部は大きく外反し、端部を上に拡張する。	内外面共に横ナデ。	色調 淡赤褐色 胎土 微粒砂を含む 焼成 敷
	135		体部の破片。	外面は刷毛の上から七条の	色調 赤褐色

			横括平行線、波状文を施す。	胎土 精良 焼成 硬
	136 底径 6.0	平底の底部。体部は外上方に立ち上る。	内外面磨滅が著しいが、外面は刷毛と思われる。	色調 淡黄褐色 胎土 微粗砂を含む 焼成 やや硬 残部 1/5
弥生式土器類	128 口径 15.0	口縁部は外反ぎみに立ち上り、端部に面を作る。	外面面刷毛。外面のみ横ナデを施す。	色調 淡茶褐色 胎土 微粗砂を含む 焼成 やや硬 残部 1/5
	129	くの字状に外反する口縁部。口縁端部は刻み目によって細かい波状になる。	外面面刷毛。	色調 淡黄褐色 胎土 1mm位の微砂を含む 焼成 硬
	131	口縁部は外反ぎみに立ち上り、端部をつまみ上げる。	磨滅が著しい。	色調 淡黄褐色 胎土 微粗砂を含む 焼成 やや軟
	137 底径 3.8	平底の底部。体部は外上方に立ち上る。	外面刷毛。内面はナデ上げ。(139)は底部にも刷毛を施す。	色調 (137) 淡黄褐色 (138) 淡黄灰色 (139) 淡黄褐色 胎土 1mm位の微砂を含む 焼成 硬 残部 (137・138) 1/5 (139) 1/3
弥生式土器高坏?	132 口径 17.0	直立する口縁部。端部は水平。	端部外向に一条の浅い凹線が入る。	色調 淡黄褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 (132) 1/10
	133			
弥生式土器鉢	134	内傾する口縁部。	磨滅が著しい。	色調 淡黄褐色 胎土 精良 焼成 軟

#### 竪穴住居9

弥生式土器類	140 口径 17.5	口縁部はくの字状に外反し、端部は上下に拡張する。口縁部外面に凹線を施し、その上から山形の刻み目を施す。	体部外面刷毛。内面ナデ上げ。範状具による刻み目を施す。	色調 淡赤褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/6
	141 " 10.4	口縁部はくの字状に外反し、端部をつまみ上げる。	体部外面刷毛。内面ナデ上げ。	色調 淡赤褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/4
	142 " 17.6	口縁部はくの字状に外反する。端部は刻み目によって細かい波状になる。制部最大径は口径よりも小さく、胴部はあまり張らない。	口縁部内面横方向の刷毛。体部内外面は縱方向の刷毛。範状具による刻み目を施す。	色調 淡茶褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/5
	146 底径 5.3	平底の底部。体部は外上方に立ち上る。	(146・147) 体部外面縦方向の刷毛。内面は強いナデ上げ。(148) 磨滅が著しい。	色調 (146・147) 淡茶褐色 (148) 淡茶褐色
	147 " 5.6			胎土 精良 焼成 (146・147) 硬 (148) 軟
	148 " 5.6			残部 (146) 1/4

				(147) 1/3 (148) 1/6	
弥生式 土器 鉢	143	口径 2.7.6	体部及び口縁部は内窪し、 端部は肥大し、面をとる。体 部外頂上部に三条の突起をめ ぐらし、三本一組の棒状浮文 を貼り付ける。	体部内外面は刷毛。尖帯と 棒状浮文に貼り目を施す。内 面端部肥大部に粘土紙の継な ぎ目が残る。	色調 淡赤褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 L/10
弥生式 土器 壺	144		頸部付近の破片。頸部に突 起を施す。	頸部に貼付尖帯をつけ、刻 み目を施す。磨滅が著しい。	色調 淡黄褐色 胎土 精良 焼成 軟
	149	底径 7.3	平底の底部。体部は外上方 に立ち上る。	内外面磨滅が著しい。	色調 赤褐色 胎土 精良 焼成 軟 残部 L/2
弥生式 土器 脚台	145	" 7.3	八の字型に開く脚台部。端 部は面取りを行う。	内外面横ナデ。体部内面に 刷毛が残る。	色調 淡赤褐色 胎土 2mm位の長石を含む 焼成 硬 残部 脚部完存

#### 竪穴住居10

弥生式 土器 壺	150	口径 1.4.3	口縁部は外反し、上方で立 ち上る受口状口縁。	口縁部外面縦方向の刷毛。 内面は横方向の粗い刷毛。全 体に器表の剥離が激しい。	色調 淡茶褐色 胎土 1mm位の石英片等含 燒成 硬 残部 L/6	
	152	底径 4.8			色調 (152, 154)	
	153	" 3.2			黃褐色 (153) 暗茶褐色	
	154	" 4.5			胎土 1mm位の微砂を含む 燒成 軟 残部 (152) 2/3 (153) 1/4 (154) L/3	
弥生式 土器 高壺	151	口径 2.0.1 器高 1.0.1 底径 1.3.3	体部は外に開き、口縁部は 直立する。脚部は筒型で、緩 やかに開く。脚端部はわずかに 上方にのびる。脚部下方に 4孔の円孔を穿つ。	平底の底部。体部は外上方 に立ち上る。	内外面磨滅が著しい。外側は縦 方向の刷毛と思われる。	色調 淡黄褐色 胎土 微粒の腐泥等含む 燒成 やや硬 残部 ほぼ完形 素 壺部と脚部は同一個体 と思われるが接点がな く図上復元した。

#### 竪穴住居11

弥生式 土器 壺	155	口径 1.1.9	頸部はややしまり、ゆるや かに外反する口縁部。	体部外面縦方向の刷毛。内 面は刷毛後ナデ。	色調 淡茶褐色 胎土 1mm位の微砂を含む 燒成 硬 残部 L/6
	158		やか?。直立する頸部。口 縁部をつまみ上げる。口縁部 外面に刺突列点を施す。	体部外面刷毛。	色調 淡黄褐色 胎土 2mm位の小石を含む 燒成 やや硬
弥生式 土器 壺	156	口径 1.6.0	口縁部はくの字状に外反し、 口縁端部は上に拡張する。 体部は肩があり委らず、脚	体部外面刷毛。内面はナデ 上げ。端部外面に凹線を施す。	色調 赤褐色 胎土 2mm位の小石を含む 燒成 硬

			部最大径が中位にくると思われる。		残部 1/12
	157	口径 1.2.9	口縁部はくの字状に外反し、体部は張らない。	口縁部内面横方向の刷毛。脚部内外面刷毛。	色調 暗茶褐色 胎土 微細砂を含む 焼成 やや軟 残部 1/6
弥生式 土器 高环	159	口径 2.3.0	环部は外に開き、口縁部は外反ぎみに立ち上る。	磨滅が著しい。环底部内外面刷毛。	色調 淡黄褐色 胎土 2mm位の小石を含む 焼成 やや硬 残部 1/9
弥生式 土器 ミニチャット	160	口径 2.6 器高 2.1 底径 2.6	平底の底部。口縁部をわずかにつまみ出す。	手捏ね。	色調 淡黄褐色 胎土 2mm位の小石を含む 焼成 硬 残部 完形
	161	口径 3.4	把手付水差。平底の底部。口縁部はやや斜め上方に開く。 頭部に把手がついていた痕跡がある。	手捏ねであるが、体部内面に刷毛。	色調 淡黄灰色 胎土 微細砂を含む 焼成 硬 残部 ほぼ完形
	162	口径 3.0 器高 4.4 底径 2.3	無鉢蓋。平底の底部。球形ぎみの体部。頭部に2孔一組の内孔を二ヶ所に穿つ。	手捏ね。	色調 淡赤褐色 胎土 2mm位の小石を含む 焼成 やや軟 残部 完形
	163	口径 6.7	平底の底部。体部は斜め上方に立ち上る。	手捏ね。	色調 淡赤褐色 胎土 微細砂を含む 焼成 やや硬 残部 完形
弥生式 土器 鉢	164	口径 1.4.3 器高 6.4 底径 3.9	平底の底部。体部は斜め上方に立ち上り、口縁部は丸くおさまる。	内外面刷毛後、丁寧な磨き。底部も丁寧に磨いている。	色調 淡黄褐色 胎土 微細砂を含む 焼成 やや硬 残部 2/3
弥生式 土器 器合	165	底径 1.5.4	脚部は外反し、端部をつまみ出す。脚柱部は直立するものと思われる。	内外面は刷毛後横ナデ。	色調 淡黄褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/9
	166	底径 1.9.2	脚部は外反し、端部は上下にやや拡張する。脚柱部中程で鼓状にしまり、凹凸を施す。底部中程に6孔の穿孔を施す。	脚部外面刷毛後窓磨き。受部内面窓磨き。脚部内面ナデ上げ。	色調 淡褐色 胎土 1mm位の微砂を含む 焼成 硬 残部 1/2
弥生式 土器 高环	167		(167) 内孔を横に2孔一組で穿つ。(169) 内孔を横に2孔一組で穿つ。	磨滅が著しい。(169) 外面環部との境界にわずかに刷毛がみとめられる。	色調 (167) 淡黄白色 (168) 淡乳黄色 (169) 淡赤褐色 胎土 2mm位の小石を含む 焼成 やや軟 残部 (167) 1/4 (168) 光存 (169) 1/2
	169				
豎穴住居12					
弥生式 土器 壺	170	口径 1.8.6	くの字状の口縁部で、端部を内方に拡張する。口縁部外側に刻み目を施す。	口縁端部外側に竪状具による浅い刻み目を施す。	色調 淡赤橙色 胎土 2mm位の小石を含む 焼成 軟 残部 1/10

弥生式 土器 甕	172	口径 1.0.0 器高 5.2 底径 6.2	内寄きみに立ち上る口縁部。口縁端部外面に凹線を施すものもある。(173)。口縁端部上方はやや粗む。体部最大径が中位にくる。安定した平底の底部。	口縁部内外横ナデ。口縁部内面及び体部外表面は刷毛。体部内面上方は刷毛。下方は裏削り。肩部内面に指圧痕が残る。(173) 口縁部外表面刷毛。	色調 淡黄褐色 胎土 1mm位の微砂を含む 焼成 硬 残部 (172) 1/4
	173				
	171	口径 1.5.0	口縁部はゆるやかに外反し、端部をつまみ上げる。腹部に横描平行線を施す。	口縁部外表面粗い刷毛。	色調 茶褐色 胎土 2mm位の小石を含む 焼成 軟 残部 1/6
	174	" 1.8.6	くの字状の口縁部で、端部をややつまみ上げる。端部外表面に刻み目を施す。	籠状具による刻み目。口縁部内面横方向の刷毛。体部外縫方向の刷毛。	色調 淡乳褐色 胎土 2mm位の小石を含む 焼成 軟 残部 1/5
	177	底径 5.3	安定した平底の底部。体部は外上方に立ち上る。	(177) 外面刷毛。内面ナテ仕上げ。(178) 磨滅が著しい。	色調 (177) 淡赤茶色 (178) 淡赤褐色 胎土 2mm位の小石を含む 焼成 (177) やや軟 (178) 軟 残部 (177) 1/4 (178) 1/6
	178	" 4.3			
	179	" 4.0	底径の小さい底部。	磨滅が著しい。	色調 茶褐色 胎土 2mm位の小石を含む 焼成 やや軟 残部 1/4
	175		水平に広がる口縁部。端部をわずかに車下させる。口縁部内側はわずかに突出する。	磨滅が著しい。	色調 淡黄褐色 胎土 1mm位の腐り繭等含む 焼成 軟
	176	口径 2.8.6 底径 1.5.0	口縁端部はやや内面に凹出し、口縁部外表面は直取りを行い、直下に一条の凹線をめぐらす。坏部は丸味をもつ。脚部は外反しながら開き、端部は立ち上り、凹線を施す。	坏部・脚部内外面磨滅が著しいが、口縁部外表面下方に一条の凹線を施す。脚部内面上方は強いナデ上げ。	色調 淡黄褐色 胎土 1mm位の腐り繭等含む 焼成 やや硬 残部 坏部 1/4、脚部光存
绳文式 土器 深鉢	180	底径 6.8	半底の底部。体部は外上方に立ち上る。	磨滅が著しい。	色調 (180) 赤茶褐色 (181) 淡赤褐色 胎土 2mm位の小石を含む 焼成 やや軟 残部 (180) 1/7 (181) 1/5
	181	" 6.2			

### 豊穴住居13

土器 甕	182	口径 1.8 器高 1.0	口縁部は、頭部より外上方に立ち上る。体部は球体で丸底。	口縁部内外面横ナデ。体部外面上方縦方向の刷毛。下方及び底部裏削り。体部内面は刷毛後、板状具による器面調整。	色調 淡黄褐色 胎土 1mm位の微砂を含む 焼成 硬 残部 1/3
	183	口径 1.7.2	長甕と思われる。口縁部は内寄きみに立ち上る。	口縁部内外面横ナデ。胴部外曲線、内面斜め方向の刷毛。(185) 口縁部内面に置記号をつける。	色調 (183) 淡黄灰色 (185) 淡赤褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 (183) 1/6
	185				

	184	口径 1.3.0	口縁部は内寄ぎみに立ち上る。胸部最大径は、口徑よりやや小さい。	口縁部内外面横ナデ。胸部外面縦方向、内面横方向の刷毛。	色調 淡黄灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/4
	186	" 1.2.6	口縁部は直立する。	口縁部外面横ナデ。口縁部内面横方向の刷毛。胸部外面縦方向の刷毛。	色調 暗灰褐色 胎土 1mm位の微砂を含む 焼成 やや硬 残部 1/4 ※ 二次的に火を受けた跡がある。
須恵器 壺蓋	187	口径 1.2.2 器高 4.1	口縁部はやや外反ぎみにさがり、端部は丸くおさまる。口縁部と天井部との境には、明確な縁を作らない。	内外面クロロナデ。天井部上半 1/2 を笠削り。	色調 茶灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/3

#### 豎穴住居14

弥生式 土器 甕	188	口径 1.3.9	口縁部はくの字状に外反し、口縁端部はやや拡張する。口縁端外面に凹線を施し、その上に深い刻み目を施す。	体部内外面に刷毛。笠状具による刻み目。	色調 淡赤橙色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/7
	189	" 1.3.9	口縁部はくの字状に外反する。口縁端部は刻み目によって細かい波状になる。	口縁部外面から胸部にかけては縦方向の粗い刷毛。口縁部内面は横方向の粗い刷毛。笠状具による刻み口。	色調 (188) 淡赤橙色 (190) 淡茶褐色 胎土 精良 焼成 (189) やや硬 (190) 硬 残部 (189) 1/8
	190				
	191	底径 4.4	安定した平底の底部。体部は外反ぎみに立ち上る。	外面縦方向の刷毛。底部不定方向の刷毛目を施す。	色調 淡褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/3 ※ 二次的に火を受けた跡がある。
圓文式 土器 深鉢	192		口縁部はやや内傾する。端部底面に低い突唇をめぐらせ、刻み目を施す。	磨滅が著しい。	色調 茶褐色 胎土 良 焼成 軟

#### 方形周溝墓

弥生式 土器 甕	215	口径 1.7.0 底径 5.6	口縁部はくの字状に外反し、端部は面取りを行い上方につまみ出す。体部は肩が張らず、最大径が器体中位からやや上方にあるものと思われる。平底の底部。	口縁部外面は横ナデ。体部外面は縦方向の刷毛。体部内面下方はナデ仕上げ。体部外面上半に四段の箇塗波状文を施す。	色調 淡赤橙色 胎土 精良 焼成 やや軟 残部 1/4 ※ 一側体部分の破片があるが、上半部と下半部は接合出来なかった。
	216	口径 1.7.1	口縁部は外反し、上方で立ち上る受口状口縁。	磨滅が著しいが、内面に刷毛が残る。	色調 黄白色 胎土 精良 焼成 軟 残部 1/10
	217	" 2.2.4	口縁部はくの字状に外反する。口縁端部は刻み目によつて細かい波状になる。	外面に縦方向の刷毛。内面に横方向の刷毛が残る。笠状具による刻み口。	色調 赤褐色 胎土 精良 焼成 やや軟

				残部 L/10
	220	肩部の破片。	外面はやや左上りの平行叩きの後刷毛。内面は刷毛。	色調 淡黄褐色 胎土 精良 焼成 やや硬
弥生式 土器 壺	218	(218) 口縁部は内窩ぎみに立ち上り、端部外間に回線を施す。(219) 体部の破片。	(218) L字縁部内外面斜め方向の刷毛。(219) 体部内面刷毛。体部外間に櫛描波状文を施す。	色調 淡黄褐色 胎土 精良 焼成 やや硬
弥生式 土器 上器 底部	221 底径 6.0 222 " 7.0 223 " 6.0 224 " 7.0	平底の底部。体部は外上方に立ち上る。	磨滅が著しいが、外面は縱方向の刷毛と思われる。	色調 (221) 淡黄白色 (222) 淡黄褐色 (223) 淡黒灰色 (224) 淡茶灰色 胎土 精良 焼成 やや硬 残部 (221 . 222 . 224) 1/4 (223) L/5
弥生式 土器 水差	227 直径 8.5 器高 25.0 底径 9.7	算盤玉状に張った体部。口縁部は内窩ぎみに立ち上る。肩部に横位の半環状把手を付ける。脚部は外反し、端部は面取りを行う。体部下方に穿孔。口縁部外間に四条の回線を施す。	脚部から胴部までの器体外面に、刺突列点、櫛描波状文を施す。胴部の最も張った部分には、刺突列点を羽状にめぐらせる。下部は縱方向の刷毛。円板充填を行い、指比版が残る。	色調 淡黄褐色 胎土 1mm位の砂を含む 焼成 やや硬 残部 1/2
绳文式 土器 深鉢	225 底径 6.3 226 " 6.8	平底の底部。体部は外反して立ち上る。底部は厚い。	磨滅が著しい。	色調 (225) 淡赤褐色 (226) 淡赤褐色 胎土 (225) 2mm位の小石含 (226) 精良 焼成 (225) 1/5 (226) 1/8

第28、29トレンチ土坑4

弥生式 土器 壺	193		口縁部はくの字状に外反する。口縁端部は刻み目によって細かい波状になる。	外面縱方向の刷毛。内面横方向の刷毛。籠状具による刻み目。	色調 淡黄褐色 胎土 1mm位の腐り穂等含 焼成 軟
----------------	-----	--	-------------------------------------	------------------------------	----------------------------------

第28、29トレンチ土坑5

弥生式 土器 壺	194		口縁部は、頸部より直立きみに外方に開く。口縁端部はほぼ水平に外方に開き、先端をつまみ上げる。	磨滅が著しい。	色調 淡黄褐色 胎土 糜粒の腐り穂等含 焼成 松 残部 1/5
----------------	-----	--	--	---------	--

第28、29トレンチピット1

土器 壺	195	口径 17.2	底部より内窩ぎみに立ち上る体部は、中程で弱い段を作り、再び内窩する。	口縁部外側及び内面は横ナメ。底部外側は未調整。	色調 淡黄褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/4
---------	-----	---------	------------------------------------	-------------------------	------------------------------------

第28、29トレンチ土坑6

弥生式 土器 甕	196 197 198 199	口径19.3 11径22.8	口縁部はくの字状に外反する。(198)以外は口縁端部に刻み目があり、細かい波状になる。	(196) 内外面横方向の刷毛。他は磨滅が著しい。笠状具による刻み目。	色調 淡黄褐色 胎土 精良 焼成 やや軟 残部 (196) 1/10 (198) 1/3
弥生式 土器 甕	202	口径13.8 器高21.6 底径 4.9	口縁部はくの字状に外反し、端部をわずかにつまむ。体部は肩が張らず、最大径は上位にくる。平底の底部。底部に1孔を穿つ。	口縁部外面横ナデ。口縁部内面横方向の刷毛。側部内外面縦方向の刷毛。底部内面に指圧痕が残る。底部裏面に刷毛を施し、穿孔は裏面より内面に行う。	色調 淡茶灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/3
弥生式 土器 鉢	200	口径15.0	口縁部は内齊し、端部は内側にわずかにつまみ出す。	外面縦方向の刷毛後横ナデ。内面斜め方向の刷毛。	色調 淡黄白色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/3
弥生式 土器 高杯	201		口縁部に水平面を作る。内側に一条の凸帯をめぐらせる。	磨滅が著しい。	色調 淡黄褐色 胎土 良 焼成 やや軟

第28、29トレンチ土坑7

弥生式 土器 甕	203 204 206 212 213 214	11径16.2 11径6.0 底径 6.0 〃 5.8 〃 5.3	口縁部はくの字状に外反する。口縁端部は刻み目によって細かい波状になる。  平底の底部。体部は外反ぎみに立ち上る。	外面縦方向の刷毛後横ナデ。内面横方向の刷毛。笠状具による刻み目。  磨滅が著しいが、外側は縱方向の刷毛と思われる。	色調 淡桜白色 胎土 精良 焼成 軟 残部 (203) 1/10  色調 淡黄褐色 (212) (213) (214) 淡茶灰色 胎土 精良 焼成 軟 残部 (212) 1/6 (213) 1/4 (214) 1/3
弥生式 土器 壺	211	口径18.5	外開きの頸部に、屈曲して立ち上る口縁部。端部上方は窪む。口縁部外側に凹線を施す。	口縁部内外面横ナデ。頸部外面縦方向の刷毛。頸部内面横方向の刷毛。	色調 淡桜白色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/10
弥生式 土器 壺?	207 208		口縁部は内窓ぎみに立ち上がる。口縁部外側に三条の凹線を施す。  頸部より屈曲し、立ち上る口縁部。	磨滅が著しい。  口縁部外面横ナデ。内面刷毛。	色調 淡黄褐色 胎土 精良 焼成 やや軟  色調 淡黄褐色 胎土 良 焼成 硬
不明	209		口縁部は内窓ぎみに立ち上がる。	内外面横ナデ。	色調 淡黄褐色 胎土 精良 焼成 硬
弥生式 土器 鉢	210	口径15.0	外開きの体部で、口縁部を内横させる。	口縁部内外面横ナデ。体部内面縦方向の刷毛。	色調 淡黄褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/6

弥生式 土器 甕	483		口縁部は直線的で、実帯をめぐらす。	内外面横ナデ。尖端を貼り付ける。	色調 淡黄白色 胎土 精良 焼成 硬 残部 硬
----------------	-----	--	-------------------	------------------	----------------------------------

#### 第10トレンチ落ち込み

土器甕?	228	口径 1.6.3	口縁部はくの字状に外反している。	体部外面は縱方向の刷毛。	色調 淡黄橙色 胎土 良 焼成 硬 残部 1/40
弥生式 土器 甕	229	口径 1.5.8	口縁部はくの字状に外反し、端部外面に刻み目を施す。	口縁部外面は縱方向の刷毛。 口縁部内面は横方向の刷毛。 体部内面は斜め方向の刷毛。	色調 淡黄橙色 胎土 良 焼成 やや硬 残部 1/40
	231	底径 7.2	平底の底部。体部は外反して立ち上る。	磨滅が著しい。	色調 (231) 黒灰色 (233) 淡黄橙色
	233	" 5.8			胎土 良 焼成 やや軟 残部 (231) 1/4 (233) 1/5
弥生式 土器 甕	230		頸部の破片で、頸部に実帶を施す。	磨滅が著しい。尖端は貼付で、棒状具による刻み目を施す。	色調 淡黄橙色 胎土 良 焼成 やや軟
弥生式 土器 ミニチュア? ?	232	底径 4.1	半底の底部。体部はやや内凹ぎみである。	磨滅が著しい。	色調 淡茶褐色 胎土 2mm位の小石を含む 焼成 やや軟 残部 1/4

#### 第25トレンチ土坑9

土器甕	234	口径 1.6.2	口縁部は外反し、端部を丸くおさめ、外方につまみ出す。	口縁部内外面及び体部内面横ナデ。体部外面未調整。	色調 (234) 淡赤黄色 (235) 乳白色 胎土 精良 焼成 (234) 硬 (235) 軟 残部 (234) 1/8 (235) 1/7
灰釉陶器 甕	236	口径 1.1.7	口縁端部はわずかに外反し、体部はゆるやかに内窵する。輪花がつく。	内外面ロクロナデ。輪花はナデによりつけられる。	色調 淡灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/10
弥生式 土器 甕	238	口径 1.3.7	口縁部は頸部より内窵ぎみに立ち上り、端部は上方に屈曲する。口縁部外面に刺穴列点を施す。	棒状具による刺穴列点。	色調 淡黄橙色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/10 臺 外面に媒付着。
	237		口縁部は外反し、肩曲して上方に立ち上る。	磨滅が著しい。	色調 淡黄橙色 胎土 精良 焼成 軟 臺 壺か?

#### 第25トレンチ土坑10

須 恵 器 坏身	239	口径 1.0 器高 4.0 底径 3.6	平底ぎみの底面より、内側 ぎみに立ち上る体部。	体部内外面ロクロナデ。	色調 黄灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/3
-------------	-----	----------------------------	----------------------------	-------------	-----------------------------------

### 第13、14トレンチ土坑11

土 師 器 壺	240	口径 1.3.8	口縁部はくの字状に外反し、 口縁端部は上下に拡張する。	口縁部内外面横ナデ。体部 内外面縱方向の刷毛。	色調 淡茶褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/6
------------	-----	----------	--------------------------------	----------------------------	------------------------------------

### 第15、16、18トレンチ溝1

土 師 器 壺	241	口径 1.1.6	口縁部はわずかに外方に圓 き、端部をつまむ。胎部は強 らない。	口縁部外面横ナデ。体部外 面は縱方向の刷毛。口縁部内 面は斜め方向の刷毛。内面下 方は箆割り。内面頸部に箆の あたりが残る。	色調 淡赤褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/4
土 師 器 高壺	480		胎柱部は筒状である。	磨滅が著しい。	色調 淡黄褐色 胎土 1mm位の微砂を含む 焼成 軟

### 第27トレンチ土坑12

器 形	No	法 量(cm)	残 部	形 壓 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		径 器 高				

#### 土 師 器

大 壺	242	15.1	435 完 形	底部より緩やかに内凹す る体部。口縁部は外反し、 端部を外方に突き出す。	口縁部内外面は横ナデ。 体部外面は未調整。内面 は横ナデ。内面に刷毛目 痕を残すもの(242, 249 250)もある。	色調 (242, 245, 246, 248) 淡黄灰色 (243) 明灰褐色 (244, 249) 赤黄色 (247, 250) 淡黄白 色 (481, 485, 486) 淡黄褐色 胎土 1mm位の微砂を含む 焼成 (248) やや軟、他 は硬 層位 (243, 245, 247, 248) 3層 臺 (249, 250) は高台が 付くかもしれない。
	243	15.1	3.75 ほぼ完存			
	244	15.8	3.15 1/2			
	245	14.3	1/3			
	246	13.2	30 1/5			
	247	15.6	27.5 1/2			
	248	12.4	29 1/5			
	249	15.4	3.2 1/7			
	250	15.6	1/6			
	481					
	485					
	486					

合付壺	251	15.4	83 完 形	底部より緩やかに内凹す る体部。口縁部は外反し、 端部を外方に突き出す。 高台はハの字型に広がる。 総体に胎壁は厚い。	口縁部内外面は横ナデ。 体部外面は未調整。内面 は横ナデ。内面に刷毛目 痕を残すもの(251, 252) もある。高台は貼付。	色調 淡灰褐色 胎土 (251, 252) 精良 (253, 254) 2mm 位の小石を含む 焼成 (251) やや軟、他 は硬 層位 (251, 253) 3層 臺 (252, 253) は高台が 付くかもしれない。
	252	15.3	1/2			
	253	14.8?	1/9			
	254	16.6	1/7			
	255	6.4	ほぼ完存	やや幅広かりの高台。器 壁は薄い。	高台部は横ナデ。高台 は貼付。	色調 (255, 256) 淡黄 灰色 (495) 淡灰褐色 胎土 (255, 256) 2mm
	256	7.05	完 存			
	495					

							位の小石を含む (495) 气泡を多く 含む。 焼成 硬 層位 (255, 256) 3層 章 (255) は器形が異なる かもしない。
小皿A	257	1095	195	光 形	口縁部は屈曲して外反し 端部は嘴状に内側にまきこ む。	口縁部外面は横ナデ。色調 体部外面は木調塗。内面 は横ナデ。	色調 (257 ~ 259, 263 487 ~ 494) 淡黄褐色 (260 ~ 262, 264) 淡赤褐色 胎土 (257, 259, 260 262 ~ 264, 487 ~ 494) 精良 (258) 1mm位の廻り礫を含む。 (261) 織紋の 金雲母片等を含む 焼成 (257, 259, 262) やや硬 (258) 素、 他は硬 層位 (262, 487 ~ 494) 以外は3層
	258	1055	19	1/4			
	259	105		1/4			
	260	105		1/4			
	261	105		1/5			
	262	105	145	2/3			
	263	98		1/5			
	264	110		1/5			
	487						
	494						
小皿B	265	955	19	光 形	底部より緩やかに内側す る体部。口縁部は外反し、 端部は丸くおさまる。 (271) は平底ぎみの底部、 端部外面に面取りを行う。	口縁部外面は横ナデ。 体部外面は木調塗。内面 は横ナデ。内面に刷毛目 痕を残すもの (272, 273) もある。また底部外面に 乾燥時の斑痕と思われる もの (265, 266, 271) が認められる。	色調 (266, 269) 淡黄 橙色、(270) 淡灰 色、(271, 484) 淡黄褐色、 他は淡黄 灰色 胎土 (265, 267) 大粒 の小石を含む。 (269, 272) 2mm 位の小石を含む 他は精良 焼成 硬 層位 (271, 272) 3層
	266	93	22	光 形			
	267	102	215	1/2			
	268	100	195	2/3			
	269	90	24	1/3			
	270	87	19	1/5			
	271	95	18	1/2			
	272	96	235	1/4			
	273	89	115	1/2			
	484						
小皿C	274	92	165	1/4	口縁端部を内側に折り曲 げる。	口縁部外面は横ナデ。 底部外面は木調塗。内面 は横ナデ。	色調 (274) 淡黄褐色 (275) 淡灰褐色 胎土 精良 焼成 やや硬 層位 3層
	275	100		1/4			
耳皿	276	100	295	光 形	皿Bの口縁部を二方向か ら上方に折り曲げる。		色調 (276) 淡黄褐色 (277) 淡黄灰色 胎土 精良 焼成 硬
	277	90?	28	1/2			
	482				皿Aの口縁部を二方向か ら上方に折り曲げる。		色調 淡黄白色 胎土 精良 焼成 硬
瓶	298	44		1/4	直立するやや高い高台 (298)、ハの字型に広がる 低い高台 (299) がある。	内外面横ナデ。高台は 貼付。(299) は内面寛 容。	色調 淡黄褐色 胎土 1mm位の砂を含む 焼成 硬 層位 (299) 3層
	299	61		1/5			
	300	216		1/9	口縁部はハの字状に屈曲 し、端部はやや内側につま み上げる。(301) の口縁	内外面横ナデ。(301) は口縁部内面に横方向の 刷毛。	色調 (300) 淡茶褐色 (301) 淡赤褐色 胎土 (300) 織紋の金雲
	301	246		1/10			

				部は短く、器壁がやや肥厚する。腹部最大径は口徑より小さく、上位にある。		母片等を含む。 (301) 微粒の石英、 崩り礫等含 焼成 硬 層位 3層
羽釜	302			つば部はほぼ水平。	つばを貼付後、悉らく 内外面横ナデと思われる。	色調 淡赤茶褐色 胎土 2mm位の石英片等含 焼成 やや硬 素 外面つば部より下方に 媒が付着。

ロクロ七師

小皿	278	92	145	1/4	口縁部は概ね内凹し、端部は直取りを行なう。器高の低いもの(278~280)とやや高いもの(281~282、284)とがある。  (283~285、288、289)外反する逆台形の器体。端部は丸くおさまる。口縁部に比べて底部器壁が厚い。(286~287)口縁部はやや内凹し、端部は丸くおさまる。底部はやや上げ底。口縁部に比べて底部器壁が厚い。	ロクロナデ。底部に回転糸切り。	色調 (278~285、288 289) 淡黄白色 (279~280、282 284、287) 淡黄褐色 (281) 淡赤褐色 (283~286) 淡赤黄色 胎土 (278~279、281 283~284、288) 1mm位の微砂を含む (280~282、286 287) 微粒の金雲母 片等を含む (285~289) 2mm ~5mm位の小石を含む 焼成 (278~279、283 285~286、289) 硬、(280~281、 287) やや硬、 (282~288) 軟 (284) やや軟 層位 (279~282、284 ~287) 3層
	279	92	155	1/6			
	280	96	17	1/5			
	281	94	22	2/3			
	282	88	245	1/2			
	284	97	21	1/3			
	283	92	215	1/4			
	285	50		1/5			
	286	96	225	完 形			
	287	97	26	完 形			
坪	288	103	275	1/4			
	289	1055	245	2/3			
小皿?	290	1405	445	1/2	口縁部が大きく開く逆台形の器台。端部は丸くおさまる。	色調 淡黄褐色 胎土 (290) 精良 (291) 微砂を含む 焼成 (290) やや硬 (291) やや軟	
	291	68		1/2			
小皿?	292	42		1/4	平底の底部	底部に回転糸切り。	
	293	44		1/4			
	294	54		ほぼ完存			

	295	38	完	存	突出した半底の底部。小(295)、大(296)がある。		色調 淡黄白色 胎土 2mm~5mm位の小石を含む 焼成 硬 層位 (295) 3層
	296	52	完	存			
不明	297	63		1/5	やや突出した半底の底部。器壁は底部が薄く、体部が厚い。	わずかに糸切り痕が認められる。	色調 淡黄褐色 胎土 1mm位の微砂を含む 焼成 硬 層位 3層

### 黒色土器

小皿	303	1015	185	ほぼ完形	口縁部は外反し、端部は丸くおさまる。丸みをもつ底部。口縁部と底部との境に継ぎをもつ。	内外面両黒。口縁部内外面は横方向の荒磨き。内底面はジグザグに荒磨き。口縁部内外面は横ナデ。底部外面は未調整。	色調 (303, 305~307, 311, 312) 黒灰色 胎土 (304) 濃茶色。 (308, 309) 淡灰色、(310) 深黄色 (313) 淡黄褐色 (502) 淡黄白色 (503~506) 暗灰色 胎土 (303, 305~307, 311~313, 502~506) 精良、(304) 3mm位の長石片を含む (308~310) 2mm位の小石を含む 焼成 硬 層位 (306, 308, 309, 311, 312) 3層 臺 (308) と (309) は同一個体かもしれない (502) は器表のいぶしが剝離していると思われる。
盤	314	1485	58	完形	口縁部は内窵ぎみに立ち上り、端部は丸くおさまる。	《319》内外面両黒。他は内面黒色で、口縁部外面がわずかに黒化する。	色調 (317, 496~501) 淡茶褐色、(319) 黒灰色、他は淡黄褐色 胎土 (320) 1mm位の右英片等を含む、他は精良
	315	1455	575	完形	1/6		
	316	159			端部内面に一条の沈線を施す。底部はやや外方に広がり、断面方形の高台がつく。	口縁部外面から体部内面にかけて横ナデ。体部外面は水調整。口縁部外面は横方向の荒磨き。体部外表面は底部から斜上方へ向けての荒磨きが認められる。内底面から口縁部へ向けて、花弁状に磨きを施す。内底面にジグザグの晴文を施すもの(314, 315)もある。また磨き前に、刷毛調整をするもの(316)もある。磨きの幅は、總体に細いか、(314)のようにやや太めのものも	焼成 (314, 316~319, 496~501) 硬、(315, 320) やや硬、(321, 322) やや軟 層位 (316~318) 3層 (321) 2層
小盤	321	54		1/5			
	322	55		1/4			
	496						
	l						
	501						
小盤	319	91	34	ほぼ完形			

					ある。高合は貼付。	
灰釉陶器						
耳皿	323	107		ほほ形	口縁部を二方向から上方に折り曲げ、その頂部を外り折り返し、刻み目を入れる。内面底部に浅い沈線を施す。	器体の内外面はロクロナデ。底部にかすかに余切りが残る。高合は貼付。
皿	324	106	2.5	1/3	口縁部は外反し、端部は丸くおさまる。外画は口縁部と底部との境に稜をもつ。八の字型に開く、断面方形の低い高台。	器体の内外面はロクロナデ。体部外面は軽い笠削り。内底面は平滑にする。高合は貼付。
碗	325	154?		1/15	口縁端部はわずかに外反し、体部はゆるやかに内弯する。輪花のつくもの(327)、高台は高く、外方へ開くものの(326)、直立ぎみのもの(329)がある。(330)は小瓶の可能性がある。(331)は皿の可能性がある。	ロクロナデ。底部には余切り板が認められる。高合は貼付。(328) 脱はつけかけ。
	326	135	495	1/4		色調 (325・329・330) 淡灰色、(326) 淡 黄褐色、(327) 灰 白色、(328) 灰色 (331・332・339) 淡黄色、
	327	184?		1/8		胎土 (325) 1mm~5mm 位の良石片等を含む (326・330) 気泡 が多い
	328	137		1/5		(327~329・331) 332・339) 精良 焼成 (332) やや硬、他 は硬
	329	148		1/6		層位 (325) 4層、(326 329・331・339) 3層
	330	108		1/5		臺 百代寺式、束縛系。
	331	106		1/6		
	332	146?		1/14		
	339	70		1/4		

### 山茶碗

碗	333	153?		1/8	口縁端部はわずかに外反し、体部はゆるやかに内弯する。内底面近くに、一条の沈線を施すもの(333)もある。高台は高いもの(337・338・340)と低いもの(336・341)があり、形態的にもバラエティがある。	ロクロナデ。高合は貼付。施釉せず。高台端部に、モミ痕は認められない。	色調 (333) 灰白色 (334・336) 淡黄 灰色、他は淡灰色 胎土 (333・341) 1mm~5mm位の良石片等を含む。(334~337) 精良、(338) 黒い斑点状の微砂を含む (340) 気泡 が多い 焼成 (336) やや硬、他 は硬 層位 (334・335・341) 3層、(333) 2層 臺 (333) 磁器の胎土に類似。
	334	138?		1/7			
	335	147?		1/8			
	336	167	495	1/5			
	337	75		1/4			
	338	57		1/2			
	340	73		1/3			
	341	56		1/3			
	507				口縁部は外反している。(507) は灰釉か。(508)	ロクロナデ。	色調 淡灰白色 胎土 精良

	1 516			510 . 511 . 514) は山茶 碗。他は器種不明。		焼成 硬
須 惠 器						
委	345			緩やかに内凹し、恐らく 底部と思われる。	外面格子叩き後ナデ削 し。内面平行叩き。	色調 淡灰色 胎土 2mm位の小石を含む 焼成 軟

### 磁 器

白磁碗	342	143	59	1/4	(342) は玉縁口縁。 (343) は口縁部内窓。 (344) は口縁部外反。	(342) は削り出し高 台。休部外下方は算削 り後ナデ。(342 . 344) は内面底部と休部との境 に段がつく。	色調 白色 胎土 (342 . 344) 精良 (343) 黒い斑点状 の砂を含む 焼成 硬 層位 (342) 3層
	343	144		1/6			
	344	124?		1/8			
皿	346	38	光 存		直立する断面方形の高台 部。底部中央が突出。底部 に「大」の墨書き。	削り出し高台。	色調 茶地 淡黄白色 胎土 乳白色 精良 焼成 硬 臺 高台部へは軸がから ない。

### 第Ⅲ次調査出土土器 (第6区)

器 形	No	法 直 (cm)	形 態 の 特 徵	手 法 の 特 徵	備 考
豎穴住居16					
土 鍋 壺 甕	347	口径 1.5.5	口縁部は内凹ぎみに外方に 開き、端部を内側につまみ出す。	口縁部内外面横ナデ。休部 内面は斜め方向の刷毛。休部 外面上方は斜め方向、下方は 縦方向の刷毛。	色調 茶褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/4
	348	〃 1.9.0	口縁部は内凹ぎみに開く。	内外面横ナデ。	色調 淡黄褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/12
	349	〃 2.1.0	口縁部は内凹して立ち上る。	内外面横ナデ。内面の一部 に横方向の刷毛が残る。	色調 淡黄白色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/13
	352		壺の胸部の破片と思われる。	外面未調整。内面算削り。 外面に算記号を入れる。	色調 茶灰色 胎土 精良 焼成 硬
土 器 鍋	350		緩やかに弯曲する休部に把手 がつく。	休部外面上方は縦方向の刷 毛。下方は算削りで、一部に 平行叩き状の圧痕が残る。休 部内面は斜め方向の刷毛。把 手は差し込んでいる。	色調 淡黄白色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/4
	351		把手の破片。	把手は貼付で、貼付後上下 に籠状工具による二本の刻み を施す。休部内面は刷毛。	色調 淡茶褐色 胎土 精良 焼成 硬

須恵器 高环	353	底径 8.3	脚部は緩やかに外反し、端部をつまみ上げる。	内外面クロナデ。	残部 2/3 色調 茶褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/3
-----------	-----	--------	-----------------------	----------	---

### 竪穴住居17

弥生式 上器 蓋?	355		口縁部は外反している。	磨滅が著しい。	色調 淡黄色 胎土 精良 焼成 軟
須恵器 蓋	356		脚部の破片。	内面は青釉波文叩き。外面はカキ目後、斜め及び縱方向の平行叩き。	色調 淡灰黄色 胎土 精良 焼成 硬

### 竪穴住居18

須恵器 环身	357	口径 1.3.0	口縁部は外傾して立ち上る。	内外面クロナデ。	色調 (357) 淡灰白色 (359) 淡灰色 胎土 精良 焼成 (357) 軟 (358) 硬 残部 (357) 1/10 (358) 1/2
	358	口径 1.0.3 器高 3.6			
上器 蓋	359		口縁部は緩やかに外反する。	内外面横ナデ。	色調 淡赤褐色 胎土 精良 焼成 硬
	360		口縁部は内窺して立ち上る。 端部内面に浅い凹線が入る。 總体的に肩厚である。	内外面横ナデ。	色調 淡赤褐色 胎土 精良 焼成 硬
須恵器 蓋	364		脚部の破片。	(364) 内面同心円文叩き 外面カキ目後平行叩き。 (365) 内面斜め方向の割毛。 外面平行叩き。	色調 淡灰白色 胎土 精良 焼成 硬
	365				
縄文式 上器 鉢	366		脚部の破片。	磨滅が著しい。	色調 黒褐色 胎土 精良 焼成 軟

### 竪穴住居19

須恵器 环蓋	367	口径 1.6.7	口縁端部を外方につまみ出 す。	内外面クロナデ。	色調 (367) 淡青灰色 (368) 淡灰白色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/12
	368	〃 1.8.2			
須恵器 环身	369	口径 1.2.3	やや丸底ぎみの底部より、 やや外反ぎみに立ち上る口縁 部。(374) は高台が付くか もしれない。	内外面クロナデ。	色調 (369) 淡灰色 (370, 373, 374) 淡青白色 (371, 372) 淡青 灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 (369) 2/3
	370	〃 1.2.9			
	371	〃 1.2.5			
	372	〃 1.1.6			
	373	〃 1.1.6			
	374	〃 1.2.4			

					(370 . 371) 1/8 (372) 1/12 (373) 1/5 (374) 1/4
	375	高台径 10.6	角高台。	内外面横ナデ。高台は貼付。	色調 淡青白色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/7
上 鋸 壁 堀	376	口径 2.2.8	口縁部はくの字状に外反し、 窓部はやや下方につまみ出す。	口縁部外面横ナデ。体部外 面は縱方向の刷毛。口縁部内 面は横方向の刷毛。体部内面 は横方向の刷毛。	色調 (376 . 379 . 380) 淡黄褐色 (377) 暗黄褐色 (378 . 381) 黄褐色
	377	" 2.6.5			胎土 良 焼成 硬 残部 (376) 1/3 (377 . 378 . 380) 1/4 (379 . 380) 1/6
	378	" 2.5.6			
	379	" 2.6.0			
	380	" 2.3.2			
	381	" 2.3.6			
	382	" 1.5.0	口縁部は緩やかに外反する。	口縁部内面は横ナデ。外面 は縱方向の刷毛。内面は横方 向の刷毛。	色調 暗黄褐色 胎土 良 焼成 硬 残部 1/6
	383	口径 1.1.8 窓高 1.0.7	(383) 口縁部は外反ぎみ に、緩やかに立ち上る。丸底 の底部。	口縁部内外面は刷毛。胎部 外面は横方向の刷毛。胎部内 面は横方向の刷毛。	色調 淡赤褐色 胎土 (383) 良 (384) 精良 焼成 硬 残部 1/3
	384				
	385		口縁部は、内凹ぎみに外方 に開き、端部はつまみ出す。 窓部内面に一条の沈線をめぐ らす。長隻。	口縁部外面は縦方向の刷毛 後横ナデ。体部外面は縦方向 の刷毛。	色調 黄褐色 胎土 良 焼成 やや軟 残部 1/3
	386	口径 1.0.4	口縁部は短く、外方に開く。 窓部はあまり張らず、丸底で ある。	口縁部外面横ナデ。口縁部 内面は横方向の刷毛。体部外 面上半は縦方向の刷毛。下半 はその上から横方向の刷毛。 体部内面下半に指压痕がある。	色調 暗黄褐色 胎土 良 焼成 やや軟 残部 1/3
下 鋸 壁 窓	387	口径 8.8	プランデーグラス状の窓部。	内外面費磨き。	色調 暗黄褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/4
古式 上 鋸 壁 堀	388	" 1.5.4	二重口縁で、口縁部外面に 窓凹線を施す。	内外面横ナデ。(389) 体 部内面範削り。	色調 (388) 淡黄褐色 (389) 淡赤褐色
	389	" 1.6.2			胎土 良 焼成 (388) 硬 (389) 軟 残部 (388) 1/6 (389) 1/8 素 (389) の口縁部は浅 い窓凹線か。
	390	" 1.9.2	口縁部は内凹ぎみに外方へ 開く。	体部内面範削り。他の内外 面は横ナデ。	色調 黄褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/10

### 第 A トレンチ土坑13

弥生式 土器 器 皿?	354		口縁部の破片で、端部を垂 下させる。底部外面に彫刻 線を施す。	内外面横ナデ。	色調 淡黄褐色 胎土 精良 焼成 硬
----------------------	-----	--	---------------------------------------	---------	--------------------------

### 第 F トレンチ土坑14

弥生式 上器 甕	361		二重口縁で、口縁部外面に 彫刻線を施す。	内外面横ナデ。	色調 淡赤褐色 胎土 精良 焼成 硬
須恵器 甕	363		胴部の破片。	内面刷毛。外面平行叩き。	色調 淡灰白色 胎土 精良 焼成 軟

### 第 F トレンチ土坑15

土器 甕	362		口縁部は短く外反する。	口縁部内外面横ナデ。胴部 外面刷毛方向の刷毛。	色調 深褐色 胎土 精良 焼成 硬
---------	-----	--	-------------	----------------------------	-------------------------

### 第 G トレンチ溝4

須恵器 環蓋	391	口径 1.4	内面にかえりがつき、かえ りは蓋の附よりも下方へのび る。	内外面クロナデ。	色調 淡青灰色 胎土 精良 焼成 硬
	392		扁半な宝珠つまみ。	内外面クロナデ。大井部 鉢割り。	残部 (391) 1/40 (392) 1/2
須恵器 瓶	393	口径 8.2	口縁部は内凸ぎみで、端部 を上方につまみ出す。	内外面クロナデ。	色調 淡灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/6 臺 焼けひずみか。
須恵器 盞	394	高台径 8.2	外方へ広がる、太い角高台。 体部は外方へ斜く。	内外面横ナデ。高台は貼付。	色調 青灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/4 臺 内面に自然釉付着。
須恵器 甕	395		口縁部は外反し、端部は丸 みをおびる。	内外面クロナデ。	色調 青灰色 胎土 精良 焼成 硬
	396		頸部 (396) と胴部の破片。	内面は同心円文叩き (396, 397) と青釉波文叩き (398)。 外面は平行叩きで、(399) は外向をわずかにスリ消す。	色調 (396) 青灰色 (397) 淡灰色 (398) 青青灰色 胎土 精良 焼成
	398				

### 第 A トレンチ溝4

須恵器 环蓋	399	口径 1.5.7	口縁部はほぼ垂直におりる。	内外面クロナデ。大井部 鉢割り。	色調 淡青灰色 胎土 精良
-----------	-----	----------	---------------	---------------------	------------------

				焼成 硬 残部 1/12
須恵器 坏身	400	口径 1.6.2 器高 3.5 高台径 1.2.2	口縁部は直線的に外に開く。 高台は外方に開く。	内外面ロクロナデ。高台は貼付。
	401	底径 6.5	ほぼ平底の底部。	内外面ロクロナデ。
須恵器 蓋	402	口径 1.1.0	口縁部は、上半が内側する。	内外面ロクロナデ。
無軸陶器 椀	403	高台径 7.2	高台は外方に開く。	内外面ロクロナデ。
無軸陶器 椀	404	" 8.8	丸の目高台。	内外面ロクロナデ。削り出し高台。
土師器 高坏	405		环底部は水平。脚部は短く、 脚部が開く。	环部外面はナデ。脚部外面 は荒削り。脚部内面に右回り のしほり痕を残す。
須恵器 蓋	406		脚部の破片。	内面は同心円文叩き。外面 は平行叩き。
	407			色調 (406) 青灰色 (407) 淡灰白色
陶器 ? 蓋	408		脚部の破片。	内外面ロクロナデ。

第B トレンチ溝4-A

須恵器 坏蓋	409	口径 1.4.7 器高 1.9.5	内面にかえりが付き、かえりは環部と水平になる。天井部は中央が凹む。	内外面ロクロナデ。天井部 荒削り。	色調 淡灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/3
須恵器 坏身	410	口径 1.1.6.5 器高 4.2	ほぼ平底さみの底部。口縁部は外反ぎみに立ち上る。	内外面ロクロナデ。	色調 淡灰色 胎土 気泡を含む 焼成 やや硬 残部 2/3
須恵器 蓋	411		脚部の破片。	内面同心円文叩き。外表面 子叩き。(517) 外面平行叩 き。	色調 (411) 淡青白色 (517) 青灰色
	517				胎土 精良 焼成 硬

第B トレンチ溝4-B

須恵器 坏蓋	412	口径 1.2.3.5 器高 4.0.5	口縁部はほぼ直線的にさがり、端部は火くおさまる。口	(412) の天井部外面はカキ目調査。他の内外面はロク	色調 (412) 淡赤黄色 (413) 淡灰白色
-----------	-----	------------------------	---------------------------	-----------------------------	-----------------------------

	413	口径 1.3.0	底部と天井部との境には明確な棱を作る。	ロナデ。	胎土 精良 焼成 (412) やや軟 (413) 細 残部 (412) 完形 (413) 1/10 ※ (412) は須恵器の生焼け。
	414		宝珠形のつまみ (414) 、ボタン状のつまみ (415・416) 。	内外面ロクロナデ。	色調 (414・415) 淡青灰色 (416) 淡灰白色 胎土 精良 焼成 硬 (414・416) 1/3 (415) 1/5
	416				
	417	口径 1.6.2	内面にかえりがつき、かえりは裾部より短い。つまみは宝珠形と思われる。		色調 淡青灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/40 ※ 外面に自然輪が付着。
須恵器 环身	418	口径 1.0.7.5 器高 3.2	立ち上りは短く、内傾する。		色調 淡青灰色 胎土 精良 焼成 硬 (418) 完形 (419) 1/6
	419	口径 9.4			
	420	〃 1.0.0	やや丸みをおびた底部より、外方に開く口縁部。		色調 (420・421) 淡緑灰色 (422) 淡青灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 (420・421) 1/4 (422) 2/3
	421	〃 9.8			
	422				
	423	口径 1.2.4	平底の底部。口縁部はやや外反する。		色調 淡青灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/4
	424	口径 1.3.3 器高 4.2 高台径 6.7.5	平底の底部。口縁部はやや外反ぎみに立ち上る。高台はやや外方に開く。	内外面ロクロナデ。高台は貼付。	色調 (429) 青灰色 他は淡青灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 (424) ほぼ完形 (425) 1/8 (426) 1/5 (427) 高台部完存 (428・429) 1/5 (430) 1/4 ※ (425・426) 高台が付くと思われる。
	425	口径 1.6.7			
	426	〃 1.4.6			
	427	高台径 8.2			
	428	〃 7.9			
	429	〃 8.3			
	430	〃 9.7			
須恵器 横瓶?	431	口径 8.9	口縁部は内凹ぎみに立ち上る。頸部はしまる。	内外面ロクロナデ。	色調 淡灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/7
須恵器 横瓶	432		頸部はやや内凹ぎみに立ち上る。体部外面に円形浮文が	内外面ロクロナデ。頸部と体部は接合している。	色調 青灰色 胎土 精良

			一つ付く。		焼成 硬 残部 頭部完存
須恵器 蓋?	433	底径 9.5	底部は平底。体部は外上方に立ち上る。	内外面口クロナデ。	色調 淡灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/7
須恵器 瓶?	434	" 8.4	底部は平底。体部は直線的に立ち上る。		色調 青灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/10
須恵器 器台?	435	口径 24.0	(435) 内凹する口縁部。 (438) 外反する器部で、外面中程に二条の突帯をめぐらす。		色調 (435) 淡青灰色 (438) 淡灰色
	438	底径 3.0			胎土 精良 焼成 硬 残部 (435) 1/13 (438) 1/11
須恵器 鉢?	436	口径 18.6	口縁部は内窵し、端部内面を凹取りする。		色調 淡青灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/10
須恵器 高环	437	底径 7.1	器部は外反し、器端部を横につまみ出す。		色調 (437) 淡青灰色 (439) 暗灰色
	439		脚柱形はなだらかに外反する。中程に二条の沈線を施す。		胎土 精良 焼成 硬 残部 (437) 1/5 (439) 脚柱部完存
土師器 甕	440	口径 26.0	口縁部は内窵ぎみに外方に開き、端部上面を凹取りする。	(440) 体部内外斜め方向の刷毛。他の内外面は尖冲横ナデ。	色調 (440) 暗灰褐色 (441) 淡黄白色
	441	" 23.0			胎土 良 焼成 (441) 硬 (442) やや軟 残部 1/8
土師器 ミニチュア ?	442	底径 2.8	窪み底の底部。体部は上方へ立ち上る。	指圧後、内外面ナデ。	色調 淡茶褐色 胎土 良 焼成 硬 残部 底部完存
土師器 环	443	口径 14.8	口縁部は内窓し、口縁端部内側を門線状につまむ。	口縁部外面は横ナデ。体部外面は横方向の太い窪磨き。体部内面は放射状暗文を施す。	色調 黄褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/6
土師器 椀	444	口径 21.4	器体が内窓し、口縁端部をわずかに上方につまみ出す。	口縁部外面は横ナデ。体部外面は横方向の太い窪磨き。体部内面は放射状暗文と思われる。	色調 赤褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/8
土師器 环	445	口径 13.0	口縁部はやや外反し、端部を丸く肥厚させる。口縁端部内側を回線状につまむ。	口縁部内外横ナデ。体部外面未調整。体部内面は放射状暗文と思われる。	色調 赤褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/8
	446	" 19.8			色調 赤褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/8
土師器 皿	447	口径 21.4 高さ 3.2	口縁部は内窓ぎみに外方に開く。	外面上半横ナデ。下半未調整。内面は放射状暗文を施す。	色調 赤褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/3

縦軸陶器 瓶	448	高台径 7.3	ほぼ真直におりる高台。	内外面笠密き。削り出し高台。	色調 淡緑色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/6 ※ 土師質。
反軸陶器 瓶	449	" 5.6	断面三角形の高い高台。	内外面ロクロナダ。高台は貼付。	色調 淡灰褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 高台部ほぼ完存 ※ 鉄分が付着。
須恵器 甕	450 458		頸部(450)と胴部(451～458)の破片。	内面は同心円文叩き(450～453、455～457)、青海波文叩き(454、458)。外面は平行及び格子叩きで、カキ目を施すもの(451、454、455、457)がある。(450)は内面、(452)は外面をスリ消す。	色調 (450) 暗青灰色 (451～458) 青灰色 (452) 淡青灰色 (454) 淡灰白色 胎土 精良 焼成 硬 ※ (450) 外面に自然剥付着。

#### 第Cトレント溝4-B

須恵器 甕	459	口径 1.2.6 器高 4.1.5 高台径 8.6	平底の底部。口縁部はやや外反ぎみに立ち上る。高台はやや外方に開く。	内外面ロクロナダ。高台は貼付。	色調 (459) 淡灰白色 (460) 淡青灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 (459) 1/5 (460) 1/6
	460	高台径 9.8			
	461	底径 6.8	平底の底部。体部は内窪する。	内外面ロクロナダ。	色調 淡青灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 底部ほぼ完存
	462	" 6.1	ほぼ平底の底部。体部はやや外反する。		色調 淡青灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/3
	463		やや丸みをおびた底部。		色調 淡青灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/3
須恵器 甕	464	口径 1.5.8	口縁部は外反し、縫部は外面肥厚し、上下に拡張する。		色調 暗青灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/10
須恵器 甕	465	口径 1.9.8	口縁部は内窪し、縫部を外方につまみ出す。		色調 淡青灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/10
須恵器 甕	466 467		胴部の破片。	内面同心円文叩き。(467)は一部スリ消す。外面は斜格子状の叩き(466)、(467)はカキ目。	色調 (466) 淡青灰色 (467) 淡灰色 胎土 精良 焼成 硬 ※ (467) は並か。

#### 第Aトレント溝5

上 鋸 器 斐または 鍋	468	口径25.1	口縁部は内凹して立ち上る。	内外面横ナデ。内面に窓の あたりが認められる。	色調 淡褐色 胎土 良 焼成 硬 残部 1/4
土 師 器 窓?	469		カマドの上部か。口縁端部 が外間にやや肥厚する。	内面中程より下半刷毛。他 の内外面は横ナデ。	色調 淡褐色 胎土 良 焼成 硬
把 手	470		鍋の把手か。	貼付把手で、外側に指圧痕 が残る。	色調 淡褐色 胎土 良 焼成 硬

#### 第Fトレンチ溝6

土 師 器 窓	471	口径18.2 器高 4.5	丸底ぎみの底部より、やや 外反ぎみに立ち上る口縁部。 口縁端部を上方にわずかにつ まむ。	底部未調査。他は横ナデ。	色調 淡赤褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/2
------------	-----	------------------	---	--------------	------------------------------------

## 6 まとめ

弘川遺跡の一連の調査によって知りえたことを列記すると次のようになる。

(1) 第4区で縄文時代中期の土器を包含する自然流路(溝1)が検出された。遺物はほとんど磨滅しており、今回の調査では確認されなかったが、付近に集落の存在が推定される。

(2) 遺物の出土量としてはごくわずかであるが、遺跡全体に縄文時代晩期でも新しい時期の土器片が認められる。また、遺構として壁根蒸が1基検出された。

(3) 弥生時代前期の土器は、主に第2区第5トレンチから出土し、散布範囲も狭く出土量もそう多くない。時期的には、第I様式の新段階のもので、琵琶湖西岸では最も北に位置する遺跡である。縄文時代晩期の土器との関係をみると、第5トレンチ内では縄文式土器は含まれておらず、また他地点においても明確に共伴関係の認められる例はなかった。

(4) 弥生時代中期の遺構は、竪穴住居と墓があり、その広がりは第4、5区に限定される。弥生時代後期の竪穴住居が、第1、3、5区に分散してみられるのが対象的である。

竪穴住居の平面形は、第4区のものが隅丸方形、長方形であるのに対し、第5区では円形である。

墓は、第4区で方形周溝墓と木棺墓各1基が近接して検出された。共に、群集せず単独で検出された。

(5) 弥生時代中期の土器は、完形品も少なく、出土量もそう多くはない。畿内の弥生式土器と比較すると、畿内第Ⅲ様式新～第Ⅳ様式併行する時期のものであろう。畿内の同時期の弥生式土器にくらべ、器形はバラエティに乏しく、回線文が多様されていないのが特徴的である。また、近江の土器の特色ともいえる受け口状口縁の甕は、本遺跡ではあまり認められず、くの字状口縁の甕の口縁端に刻み目を入れたものが顕著である。

(6) 弥生時代中期の石器は、全て磨製石器で、石斧の中には定形化していない変則的な扁平片刃石斧が含まれている。このような変則的な石斧は、これまで注意されておらず、はたして本遺跡のみの特色かどうか今後の検討を必要としよう。石製武器も磨製に限られており、鎌、剣(鉄劍型)、戈(木製品)が認められる。

(7) 弥生時代後期の遺構は、第1、3、5区に分散して竪穴住居が認められ、各々独立して一つの単位集団を形成していたようである。そのうち第5区のものについては、弥生時代後期でも古い様相を示す土器の出土す

る堅穴住居があることから、中期以降継続して同じ場所に生活を営んでいたと考えられる。

(8) 歴史時代の造構のうち、第1、4、6区で堅穴住居が認められた。このうち第1、4区のものは、7世紀前半に比定され、第3区にも同じ時期の土坑が検出されている。

第6区の建物（堅穴住居、掘立柱建物）は、5棟の堅穴住居とそれに伴う2棟の掘立柱建物の倉庫からなり、各造構の重複がないことから集落の一単位と考えている。出土遺物は少ないが、おそらく郷倉と推定される弘川A遺跡形成以前の、奈良時代前期ごろの集落と思われる。

(9) 奈良時代～平安時代（8世紀後半～10世紀）の郷倉と推定される弘川A遺跡に関連する造構として、第2、5区で掘立柱建物が検出されている。建物の方位は、N-5°-E 1棟、N-17°-E 2棟、N-24°-E 1棟と3方向のものがある。調査範囲の制約から、建物を群としてとらえることができなかつたし、伴出遺物がないことから年代も不明確である。焼物の性格としては、郷倉外部の遺構群であろう。

(10) 土坑12の遺物は、11世紀後半～末の一括資料で、土師器、近江型黒色土器、灰釉陶器、白磁などの共伴関係のとらえられる好例である。

弘川遺跡の調査は、ほ揚整備終了後、国道161号線バイパス未着工部分にある高田館跡遺跡の調査が残されている。今回、頁数の制約等で十分な検討の加えられなかった点をも含め、高田館跡遺跡調査終了後に総括的に考察を加えたいと思う。

#### 註

- ① 田中勝弘『弘川遺跡発掘調査報告書—古代郷倉跡』（滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和54年）
- ② 山口順子「高島郡今津町弘川遺跡」（『はたけたんか関係遺跡発掘調査報告書』Ⅷ-1、滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和55年）
- ③ 小江慶雄「滋賀県醍醐遺跡発見の釋文式土器」（『京都学芸大学報』5、京都学芸大学、昭和29年）
- ④ 小江慶雄「滋賀県茶の面縞文式土器」（『京都学芸大学報』9、京都学芸大学、昭和31年）
- ⑤ 小玉道明他「東庄内B遺跡」（『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』、日本道路公团名古屋支社・三重県教育委員会、昭和45年）
- ⑥ 柳井伸也「大沢野町布尻遺跡緊急発掘調査報告」（大沢野町教育委員会、昭和52年）
- ⑦ 紅村弘也「牧野小山遺跡　県道土木可見線沿路工事埋蔵文化財調査報告書」（岐阜県教育委員会・美濃加茂市教育委員会、昭和48年）
- ⑧ 田辺昭三編『湖西線関係遺跡調査報告書』（滋賀県教育委員会、昭和48年）
- ⑨ 折戸53号窓のものより後出で、広久手C谷3号窓、百代寺窓、広久手F谷窓などの例に近い。  
『愛知県猿投山西南麓古窓跡群分布調査報告書』Ⅱ（愛知県教育委員会、昭和56年）
- ⑩ 下条信行氏の提唱される九州型石戈に分類され、近畿およびその周辺では、福井県小和田、神戸市青谷例が類例としてあげられよう。  
下条信行「石戈論」（『史報』第113編、九州大学文学部、昭和51年）
- 森川昌和・大森宏『若狭高浜町出土の石劍・石戈』（若狭考古学研究会、昭和46年）
- 赤松幹介「神戸市垂水区青谷遺跡出土の石戈」（『考古学雑誌』第59巻第3号、日本考古学会、昭和48年）

## 第5章 高島郡新旭町針江遺跡

## 1 はじめに

本報告書は、昭和53年度より継続して実施している高島郡新旭町針江土地改良区による団体賞は場整備事業に伴う、昭和55年度の針江遺跡発掘調査の記録である。

調査は、県文化財保護課技師兼康保明氏の指導の下、新旭町教育委員会が行ない、岡司高司が現場を担当した。なお調査にあたっては、地元針江区民の方々をはじめとする多数の方々の協力を得たことを記して、謝意を表したい。

## 2 調査の経過

本年度の発掘調査は、昭和54年度の調査地域の南、国道161号線バイパス予定地から針江集落にかけてのは場整備区域に計画されている2本の排水路予定地が掘削を受けるため、トレンチを設け事前に調査することとした。

調査は、は場整備の工期にしたがって二時期にわたり、第1次調査として第1、第2の2木のトレンチを、第2次調査として第3トレンチを設定した。第1トレンチは3ブロック（北より第1、第2、第3）、第2トレンチは4ブロック（東より第1、第2、第3、第4）、第3トレンチは13ブロック（南より第1、第2……第13）と設置した。調査の実施については、遺物包含層の確認に留意しながら可能な限りバックホウによって堆土を行ない、湧水の激しいブロックでは周囲に溝を掘りポンプで排水しながら行なった。

調査期間は、第1次調査が昭和55年6月5日から7月19日まで、第2次調査が10月5日から10月25日までである。

## 3 調査の結果

### 第1、第2トレンチ

**土層** 第1トレンチの基本土層は、第1層——表土、第2層——黒褐色粘質土層、第3層——青灰色粘砂質土層であり、第2層は床土としては約40~50cmと堆積が厚く、やや肥沃である。第2トレンチの基本土層は、第1層——表土、第2層——床土、第3層——暗褐色粘質土層、第4層——青灰色粘砂質土層、第5層——砂利層（鉄指大）である。地質的には、第2トレンチの方が、第1トレンチより安定しており、第2トレンチ第4ブロックで溝2本が確認され、溝中より弥生式土器（後期）が出土した。

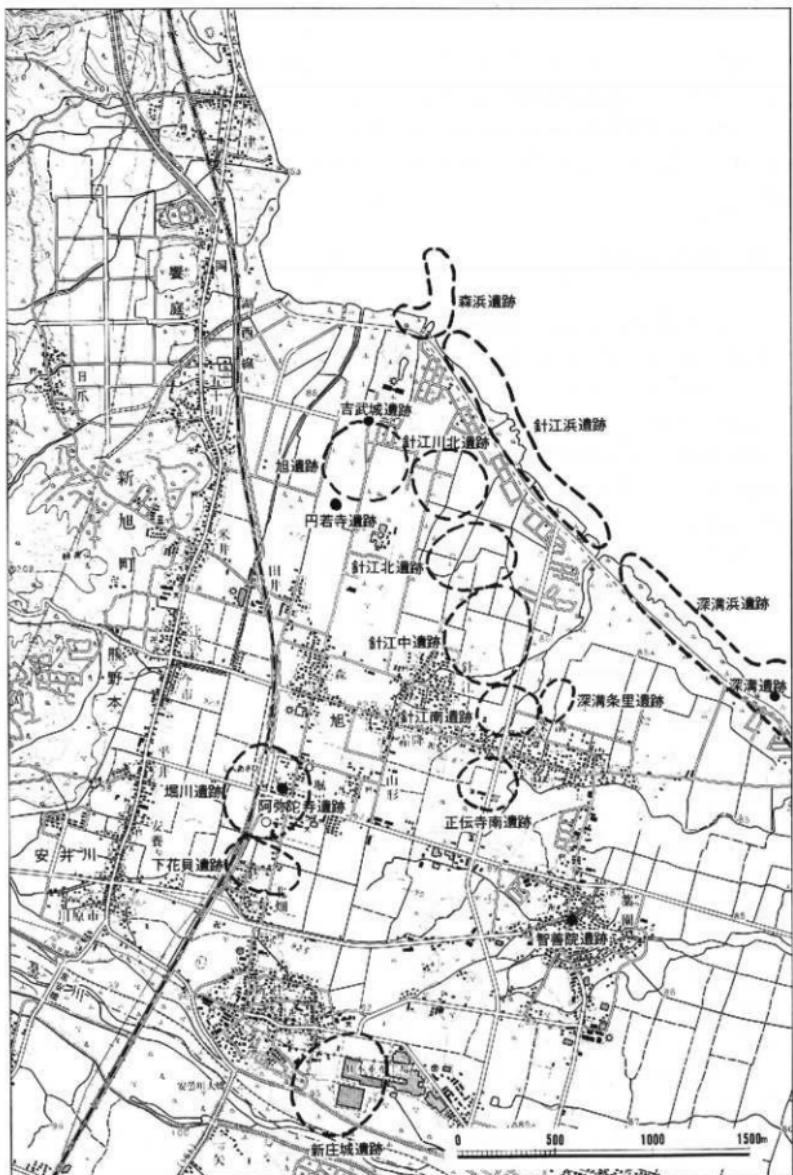
**遺構・遺物** 検出された遺構は、溝2本であった。

(S D 1) 調査地区のはば中央で検出された。青灰色粘質土層を掘り込み、溝幅約170cm~140cm、深さ約10cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。

(S D 2) 調査地区東部で検出された。青灰色粘質土を掘り込み、溝幅約160cm、深さ30cm以上を削る。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は、溝の埋土および青灰色粘質土層上にわずかに堆積している黒褐色粘質土より出土し、弥生時代後期の壺、高杯等の破片が少量出土している。

### 第3トレンチ

**土層** 第3トレンチの基本土層は、第1層——表土、第2層——床土、第3層——暗黒褐色、暗灰褐色粘質土層、第4層——青灰色砂質土層、第5層——砂利層（鉄指大）である。青灰色砂質土層は、北に向うにしたが



第1図 遺跡位置図



第2図 トレーンチ配置図

って下降する傾向にあり、上層に茶褐色粘質土層、青灰色粘質土層が認められる。砂利層は、掘削した深さにもよるが検出されなかったブロックもあり、青灰色砂質土層と同様の傾向にあると思われる。

遺物包含層は第3層であるが、暗灰褐色粘質土層では遺物が出土せず、第1ブロックで確認された厚さ約10~20cmの暗褐色粘質土層においてのみ遺物が出土した。

**遺物・遺構** 遺物としては、弥生時代後期から古墳時代にかけての弥生式土器、土師器の甕、高杯等の破片が第1ブロックの暗黒褐色粘質土層より少量出土しており、木器等の出土はなかった。遺構としては、確実に遺構と判断できるものは検出されなかったが、第9ブロックにおいて青灰色粘質土上に、15~20cm大の礫群、径約100cmの炭化物の広がりが認められた。この性格については不明である。

#### 4 ま と め

本年度の調査の結果、第2トレンチ第4ブロックにおいて溝2本、弥生時代後期の土器、第3トレンチ第1ブロックに弥生時代後期の遺物包含層が確認された。これらの地区は針江集落にも近く、地質的に安定しており、周辺地域に生活遺構の存在が予想されることを記してまとめとしたい。

# 図 版





調査地より西牧野をのぞむ



調査状況



ピット検出トレーニチ

図版三  
今津町弘川遺跡（第一次調査）



調査地区全景（北より）



調査地区全景（東より）



第25・27括トレンチ・堅穴住居1～3（西より）



第25・27拡トレンチ・整穴住居4（北西より）



第25・27拡トレンチ・土坑2（南西より）



第19トレンチ・整穴住居5（南西より）



第12トレンチ・整穴住居6（南西より）



第6トレンチ全景（西より）



第6トレンチ・竪穴住居7（西より）



第12トレンチ・掘立柱建物1・2（東より）



第12トレンチ・掘立柱建物1（北より）

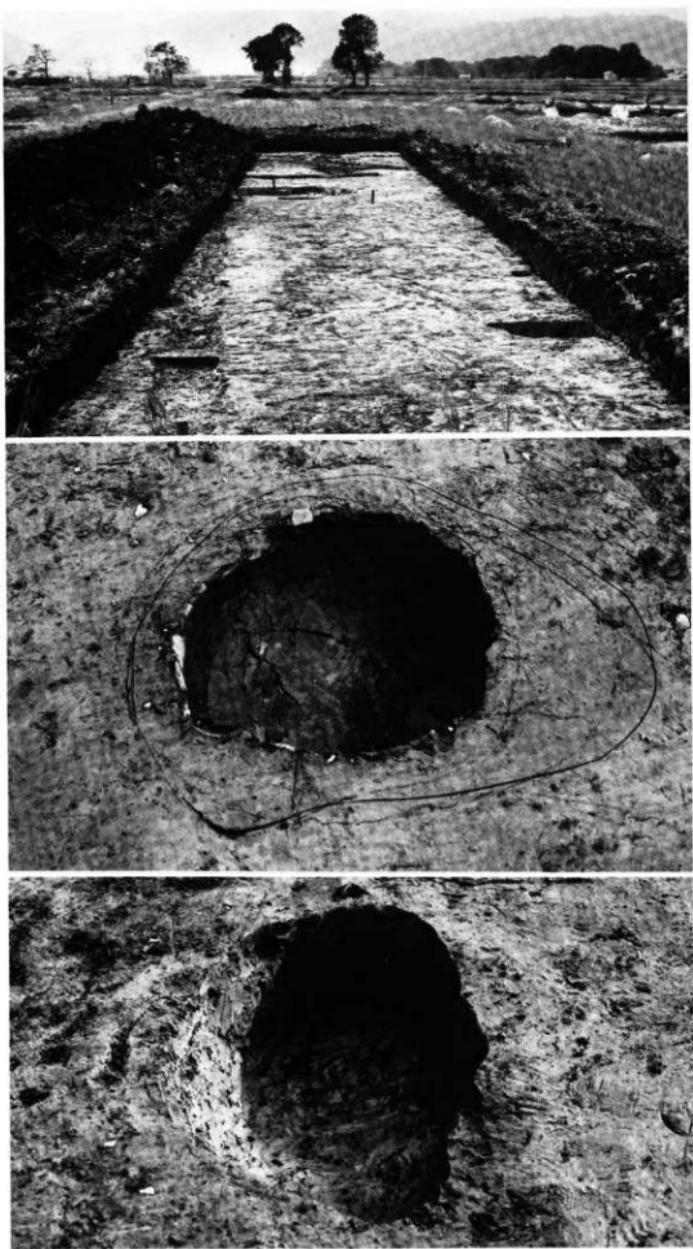


第79トレンチ・掘立柱建物3（北北東より）

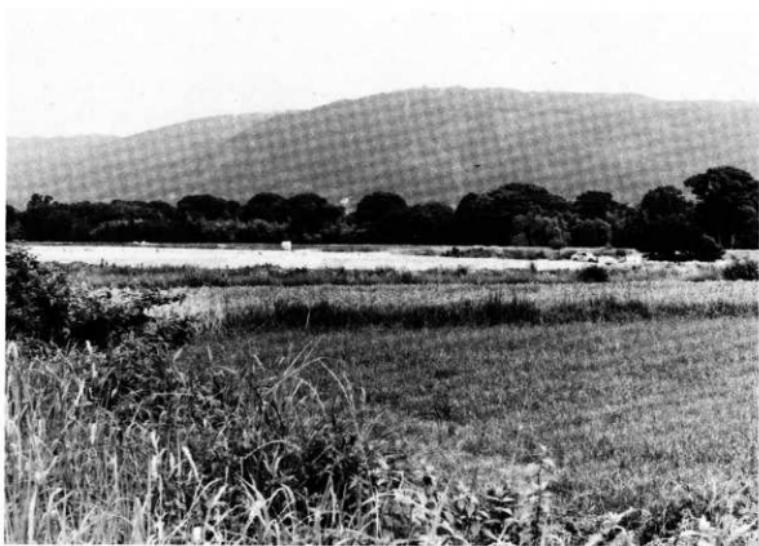


第49トレンチ・足跡検出状況（東より）

図版十 今津町弘川遺跡（第一次調査・造構）



第16トレンチ全景（東より）及び要棺出土状況



遺跡全景（南より）

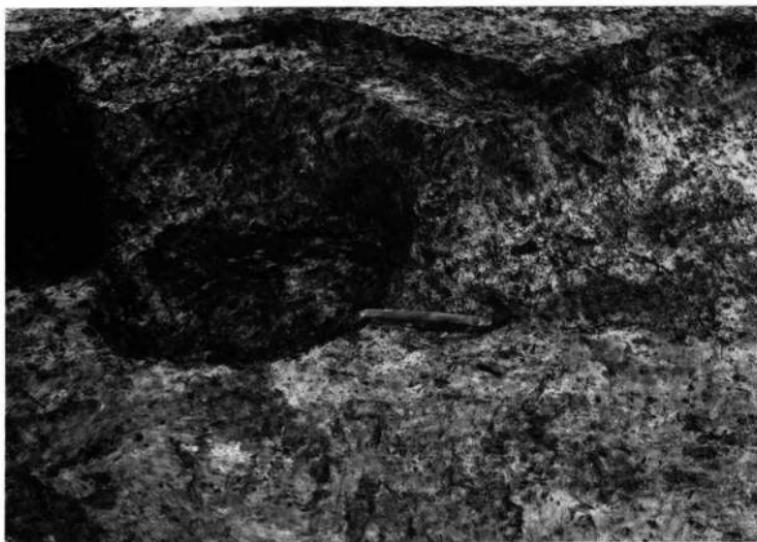


遺跡全景（北より）

図版十二 今津町弘川遺跡（第Ⅱ次調査・遺構）



第27トレンチ・整穴住居 9（南西より）



同上・磨製石剣出土状況（東より）



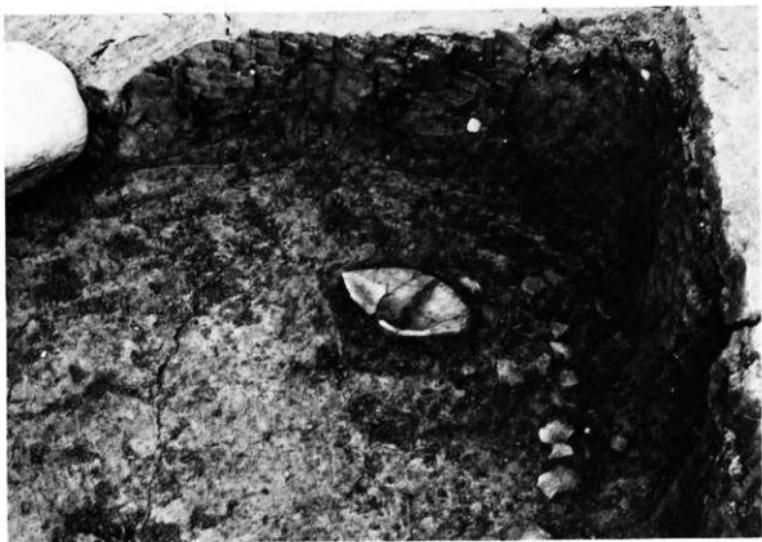
第28・29トレンチ (北東より)



第25トレンチ・竪穴住居8及び土坑9 (南西より)



第34 トレンチ・竪穴住居II（南より）



同上・ペット状遺構下土器出土状況



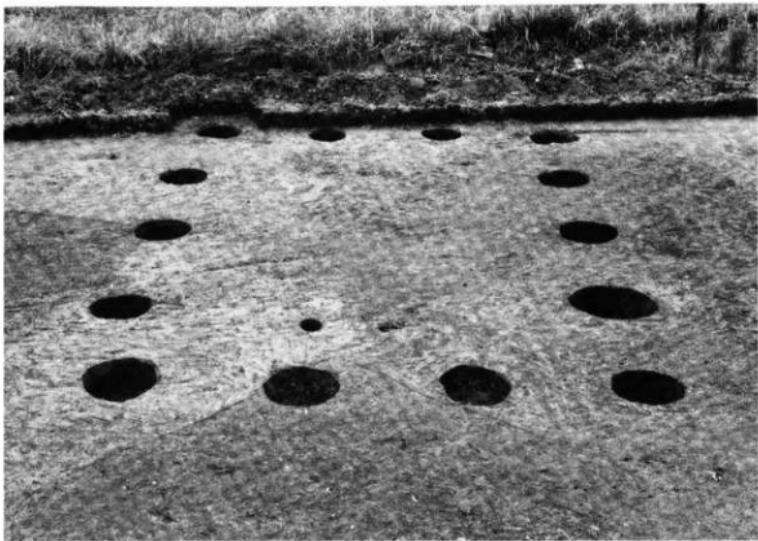
第19トレンチ・竪穴住居12（北より）



第19トレンチ・竪穴住居13（東より）

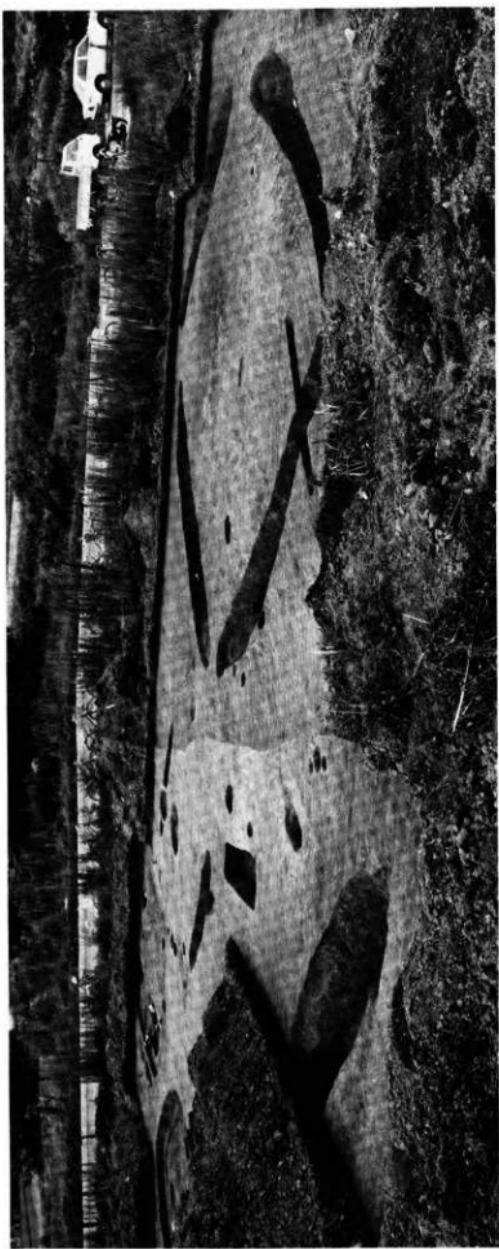


第13・14トレンチ・竪穴住居14及び溝2（西より）

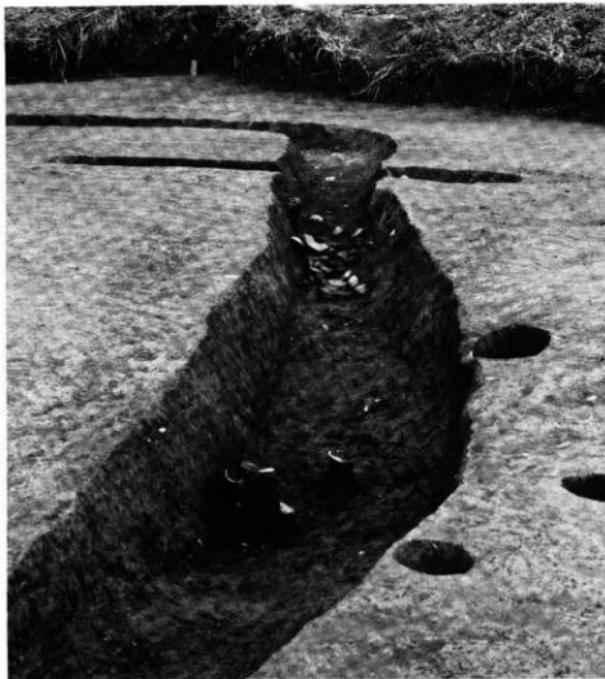


第28・29トレンチ・据立柱建物4（東より）

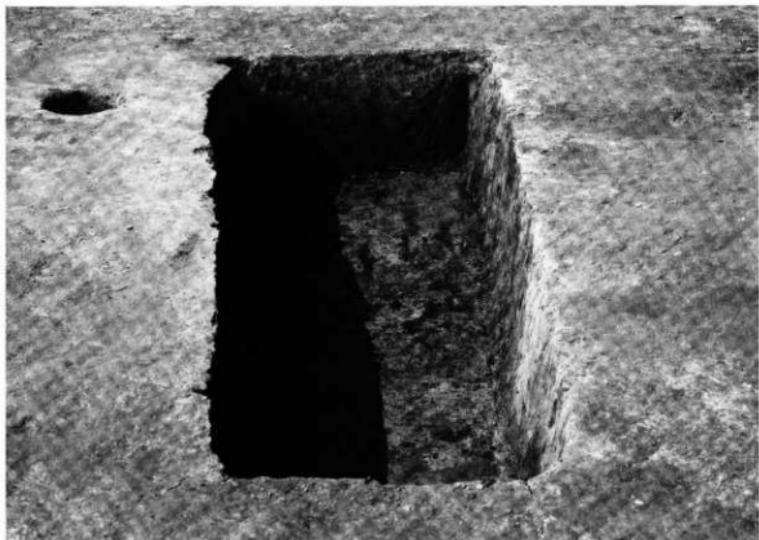
図版十七 今津町弘川遺跡（第Ⅱ次調査・遺構）



第19トレンチ全景（北東より）



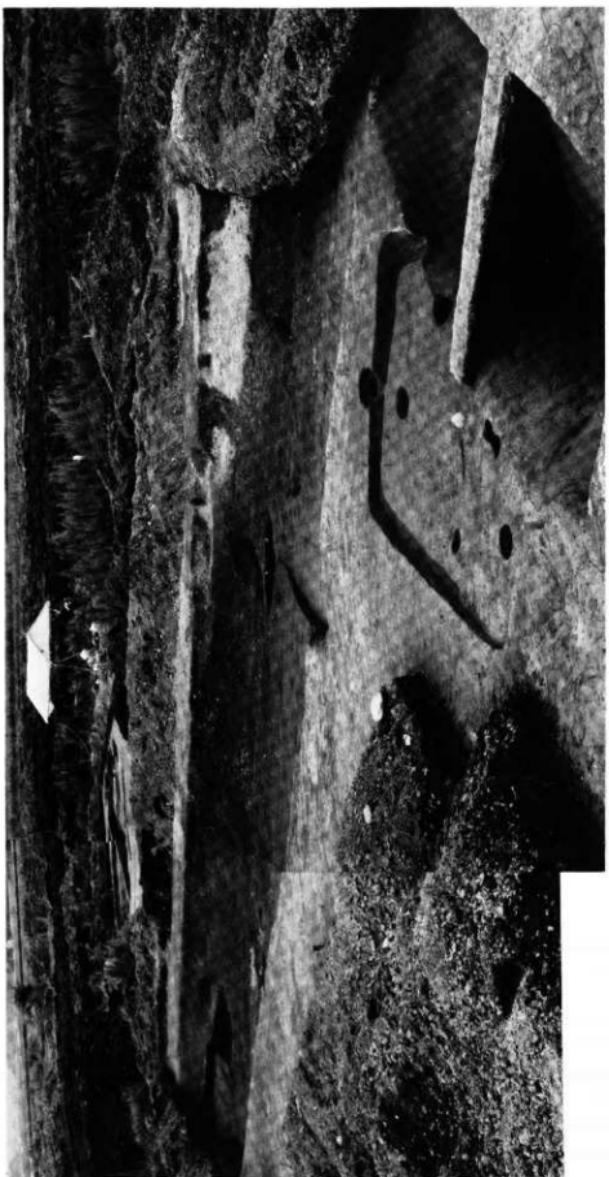
第19トレンチ・方形周溝墓土器出土状況



第19トレンチ・木棺墓（南南西より）



第19トレンチ・溝3（東より）



第13・14トレンチ全景（東より）



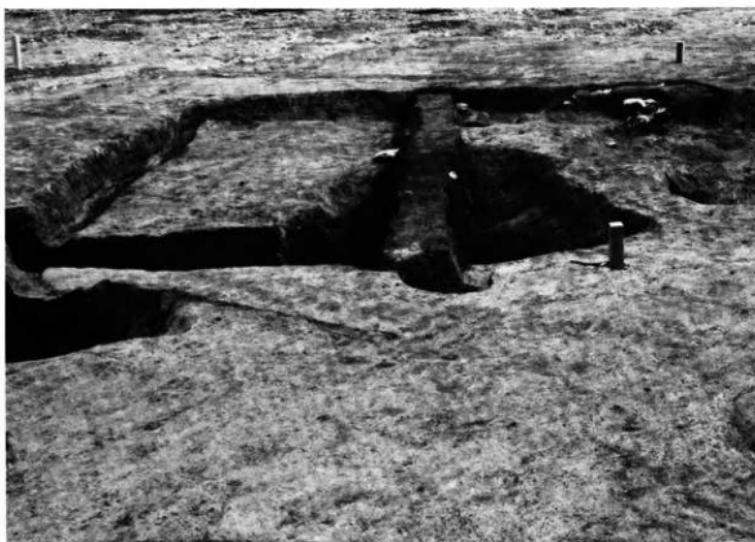
遺跡全景（北より）



遺跡全景（東より）



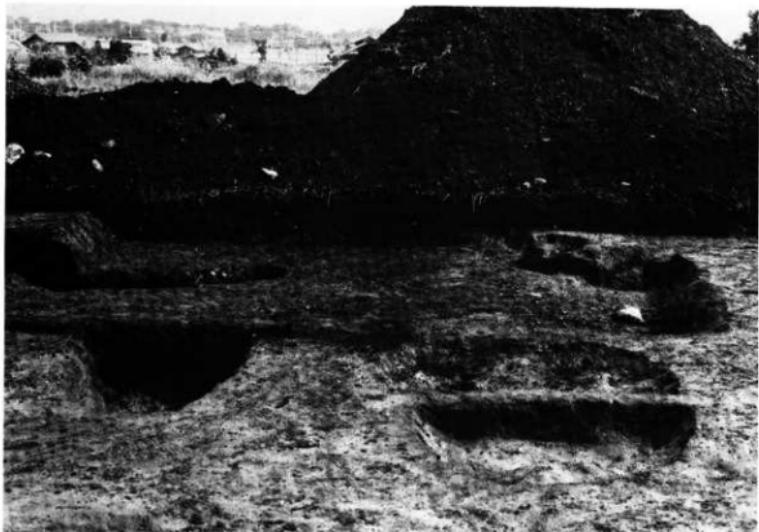
第Aトレンチ・竪穴住居15（北東より）



第Aトレンチ・竪穴住居16（西より）



第Fトレンチ・整穴住居18（南東より）



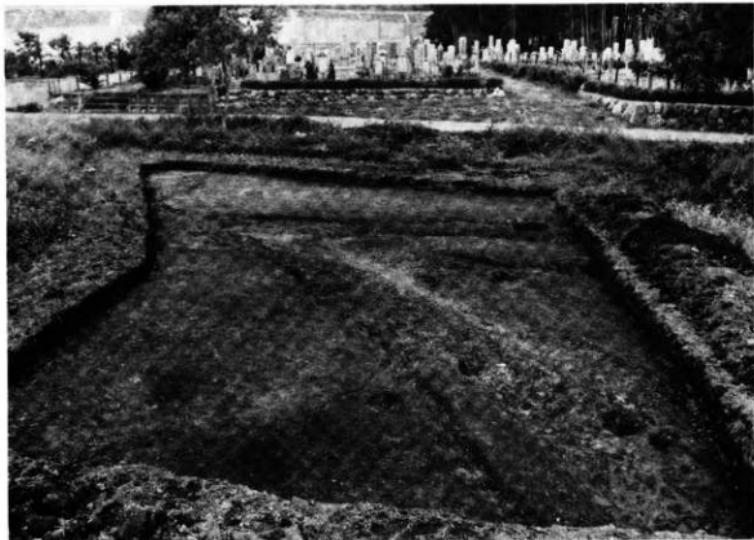
第Fトレンチ・整穴住居19（北西より）



第Fトレンチ・掘立柱建物5（北東より）



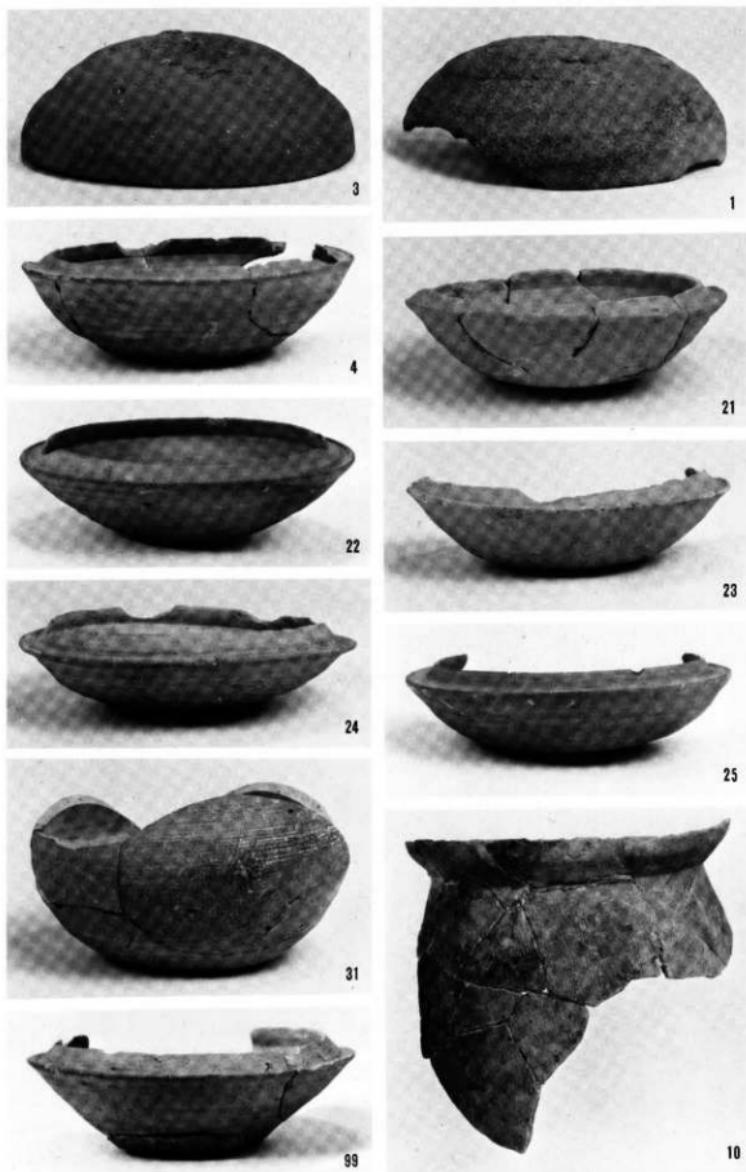
第Fトレンチ・掘立柱建物6（北東より）



第Gトレンチ・溝4検出状況（東より）



第A・B・Cトレンチ・溝4検出状況（南西より）



竪穴住居1 (1・3・4・10) , 竪穴住居2 (21—25・31) , 土坑3 (99)

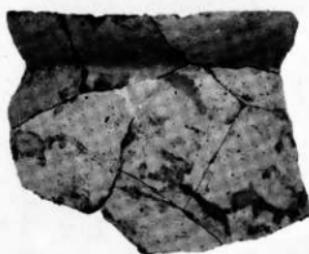
図版二七 今津町弘川遺跡（第一次調査・遺物）



8



14



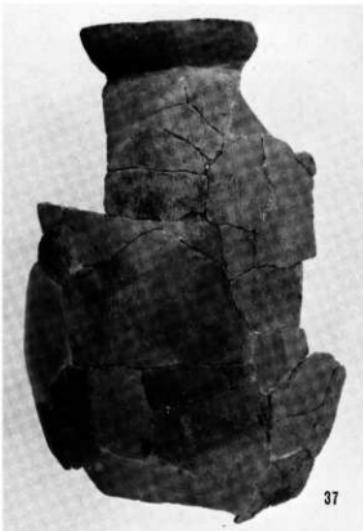
15



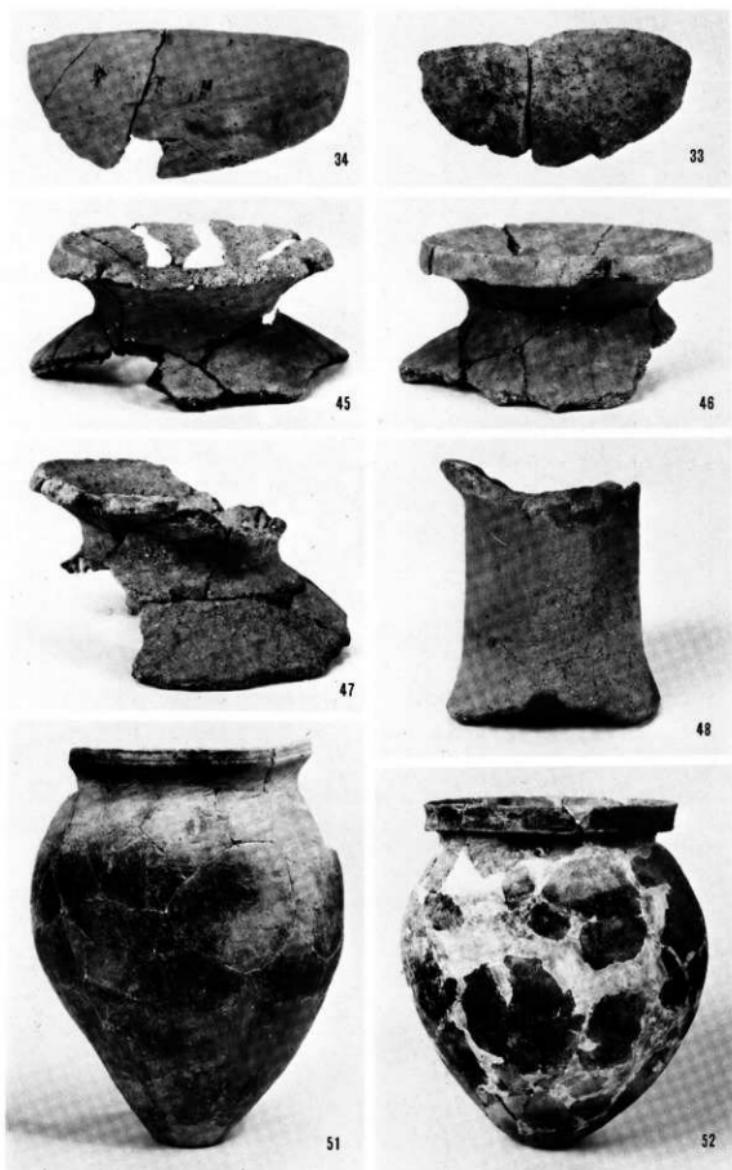
16



38

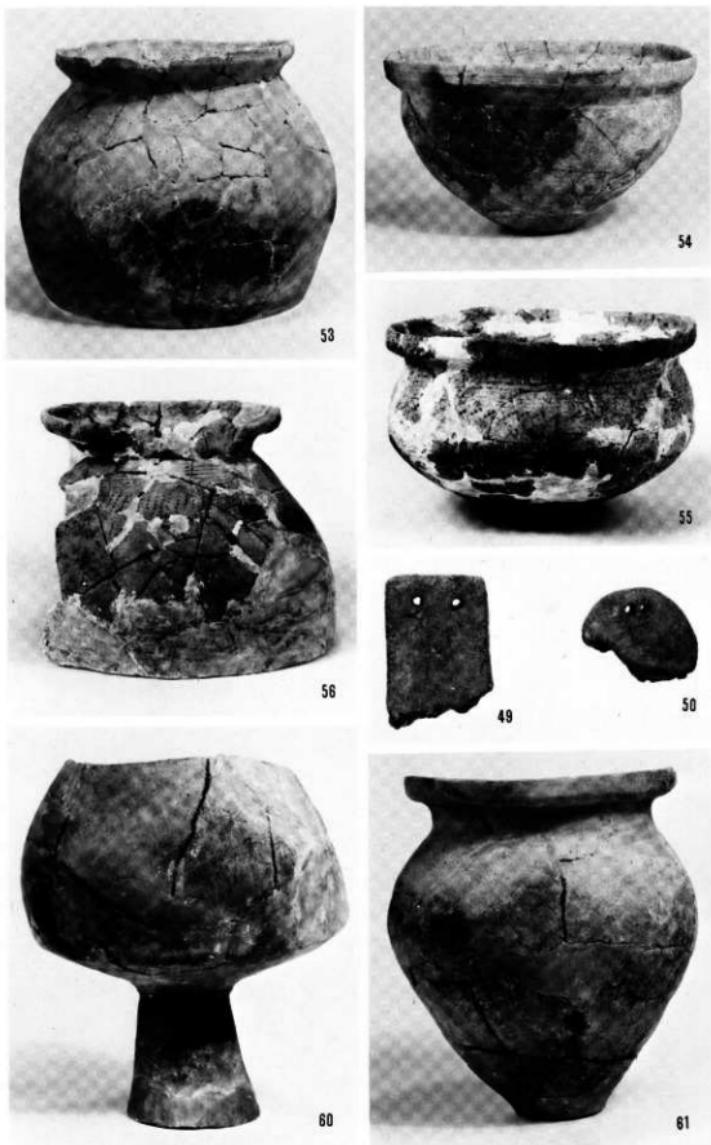


37

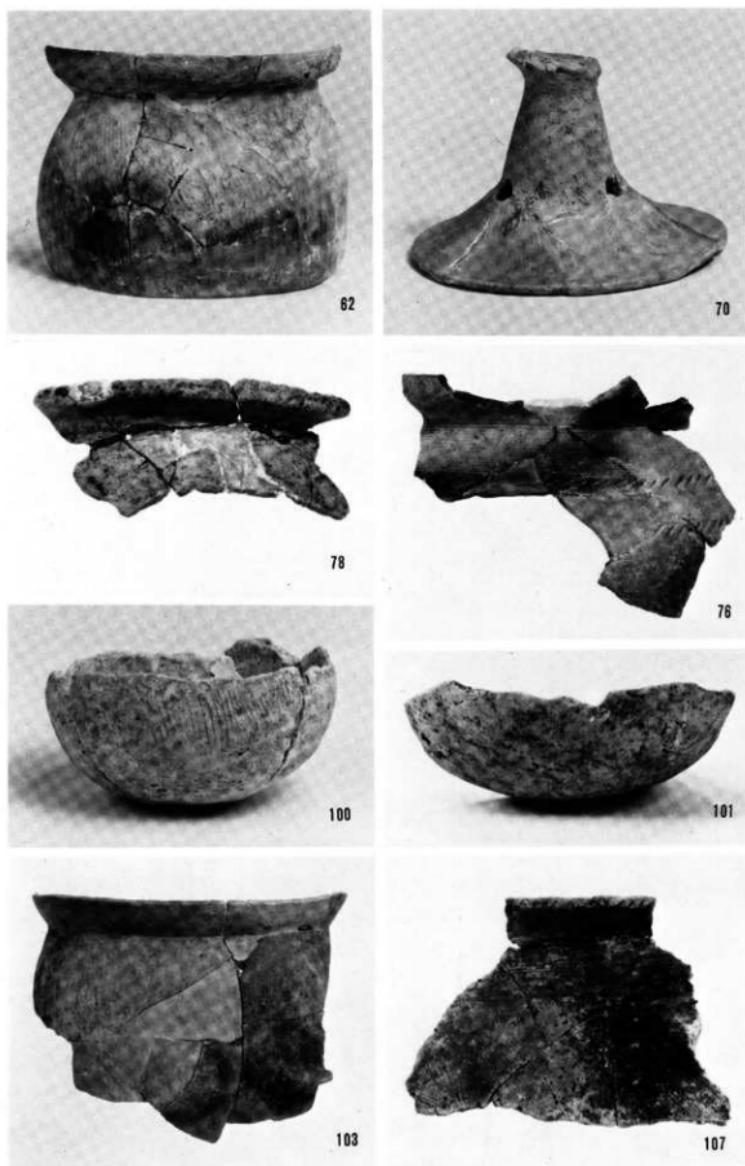


整穴住居2（33・34）、整穴住居4（45～48・51・52）

圖版二九 今津町弘川遺跡（第1次調査・遺物）



整穴住居4 (49・50・53~55), 整穴住居5 (56・60・61)

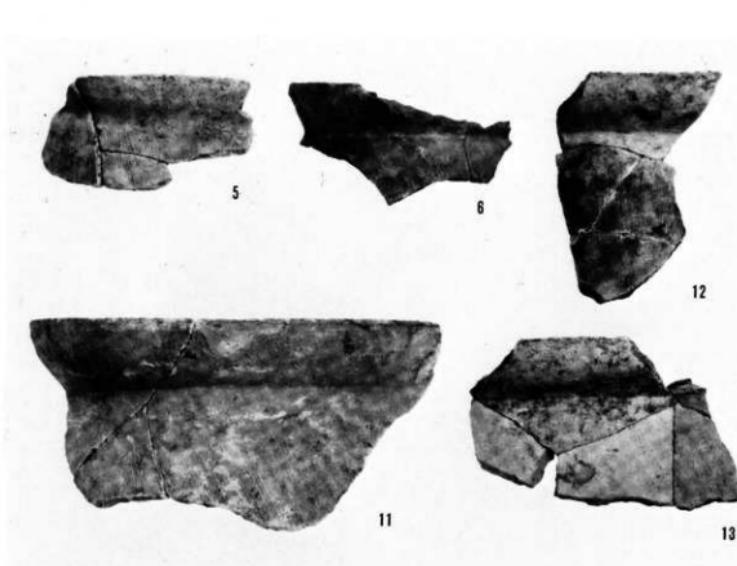


竪穴住居5 (62・70)・竪穴住居7 (76・78)、土坑3 (100・101・103)、表採 (107)

図版三一 今津町弘川遺跡（第一次調査・遺物）

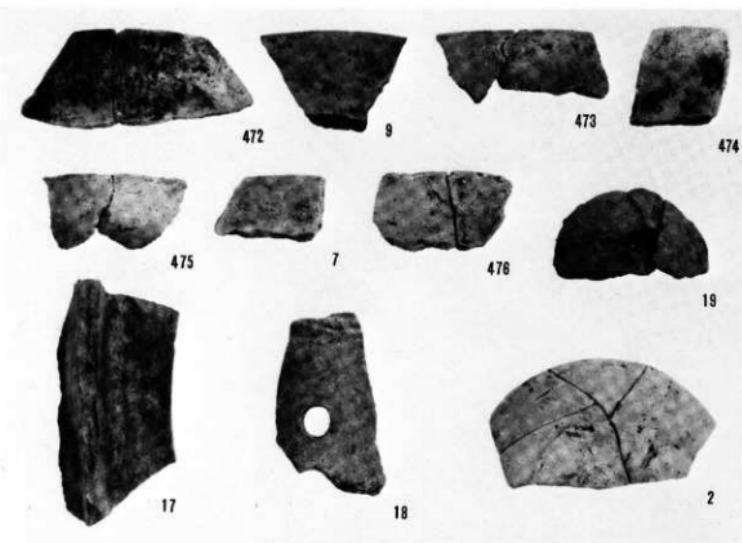


第16トレンチ（遺物）

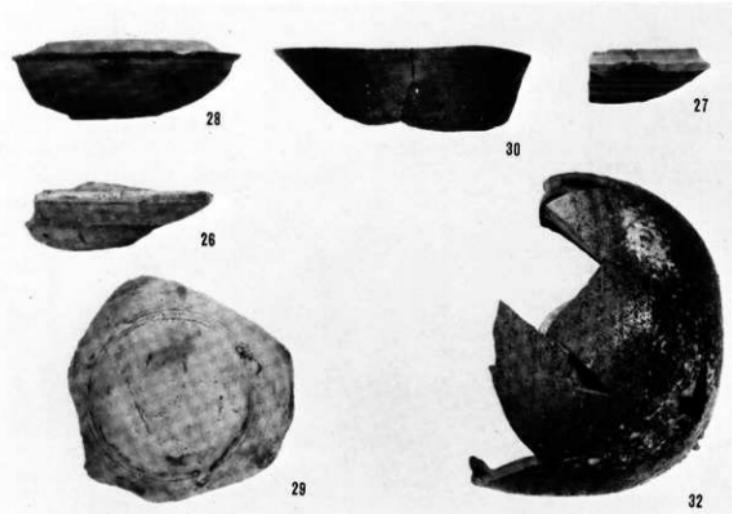


竪穴住居 I

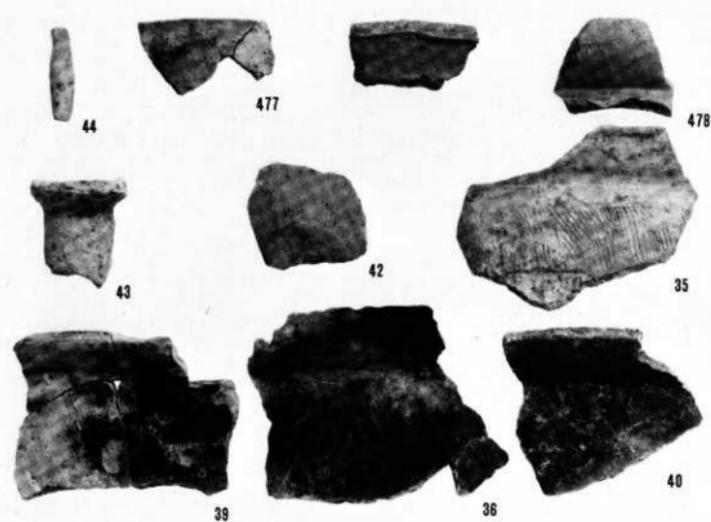
図版三三 今津町弘川遺跡（第一次調査・遺物）



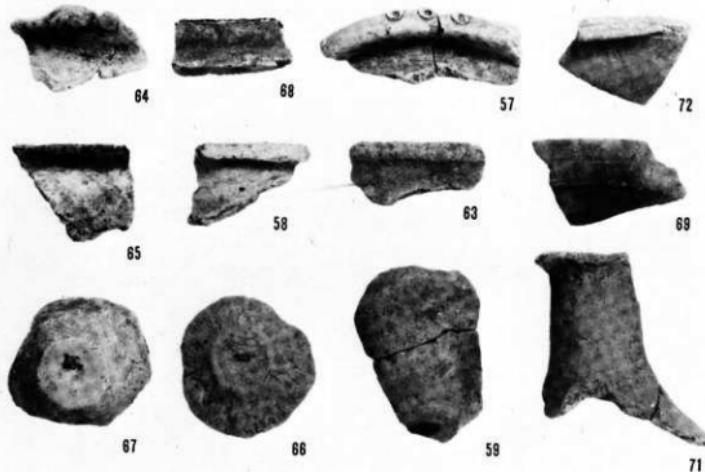
竪穴住居1



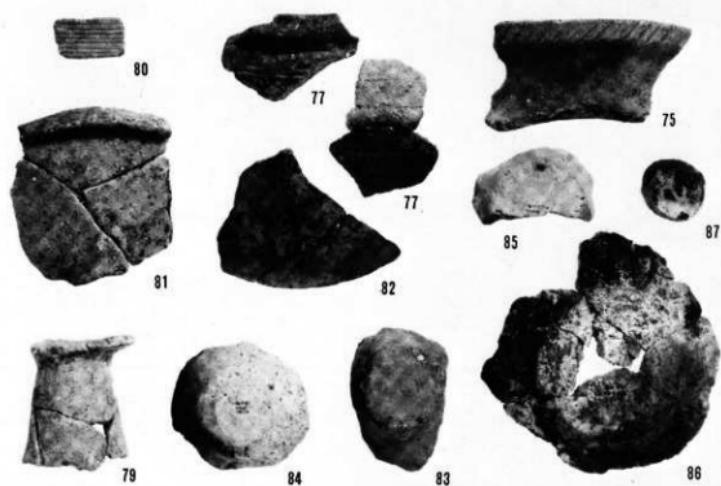
竪穴住居2



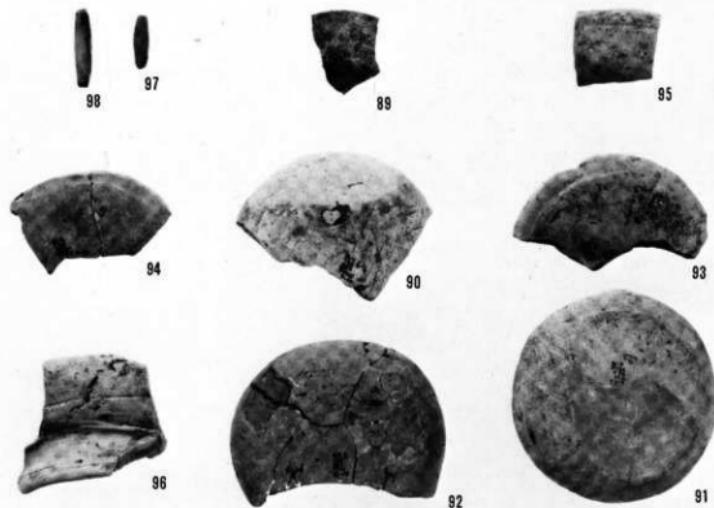
竪穴住居2



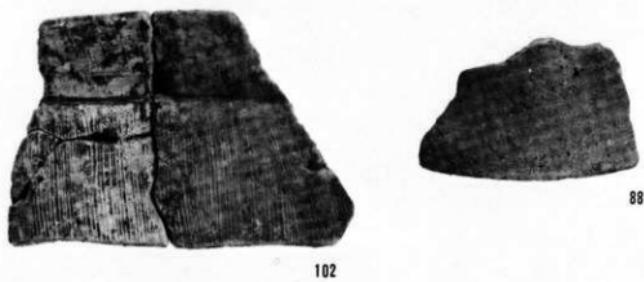
竪穴住居5



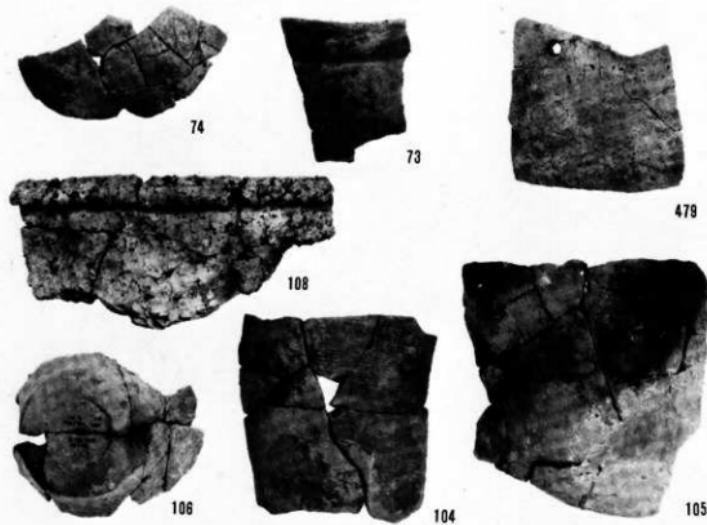
竪穴住居6 (75)、竪穴住居7 (77・79～87)



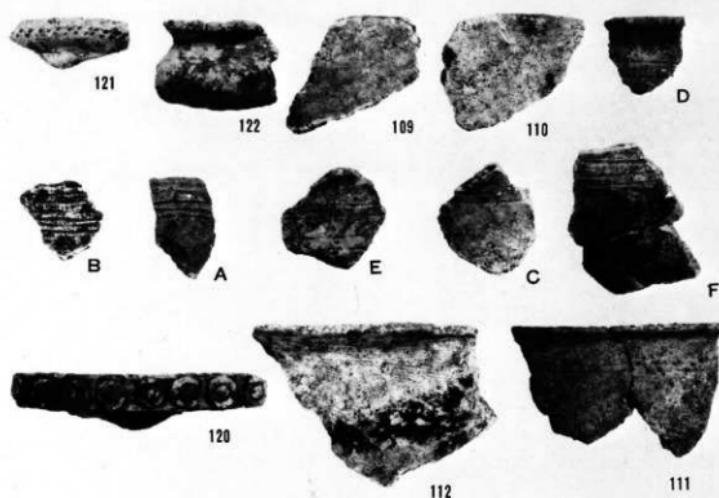
土坑2



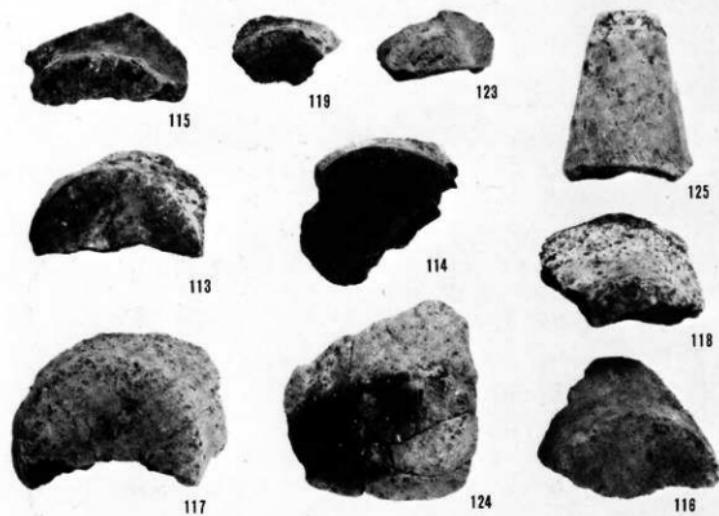
土坑1 (88), 土坑3 (102)



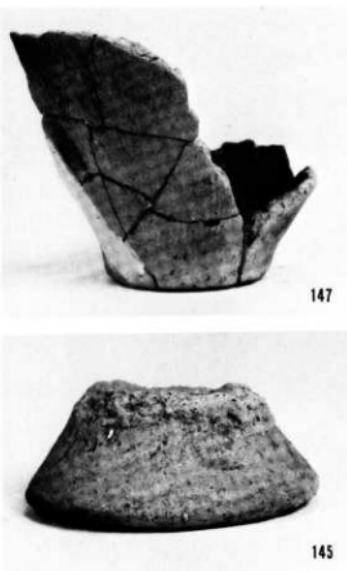
整穴住居6 (73・74), 第25トレンチ (479), 第25・27拡張トレンチ (104~106・108)



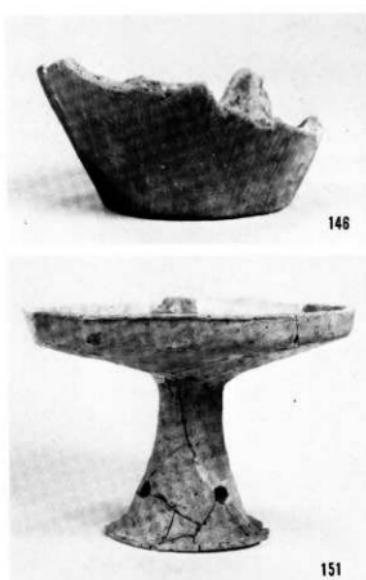
第5トレンチ



第5トレンチ



145



146



147



151



163



162

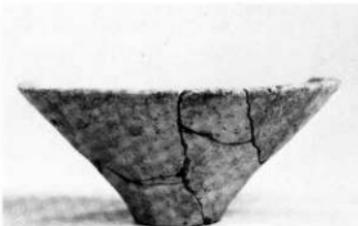
整穴住居9（145～147）、整穴住居10（151）、整穴住居11（160～163）



166



176



164

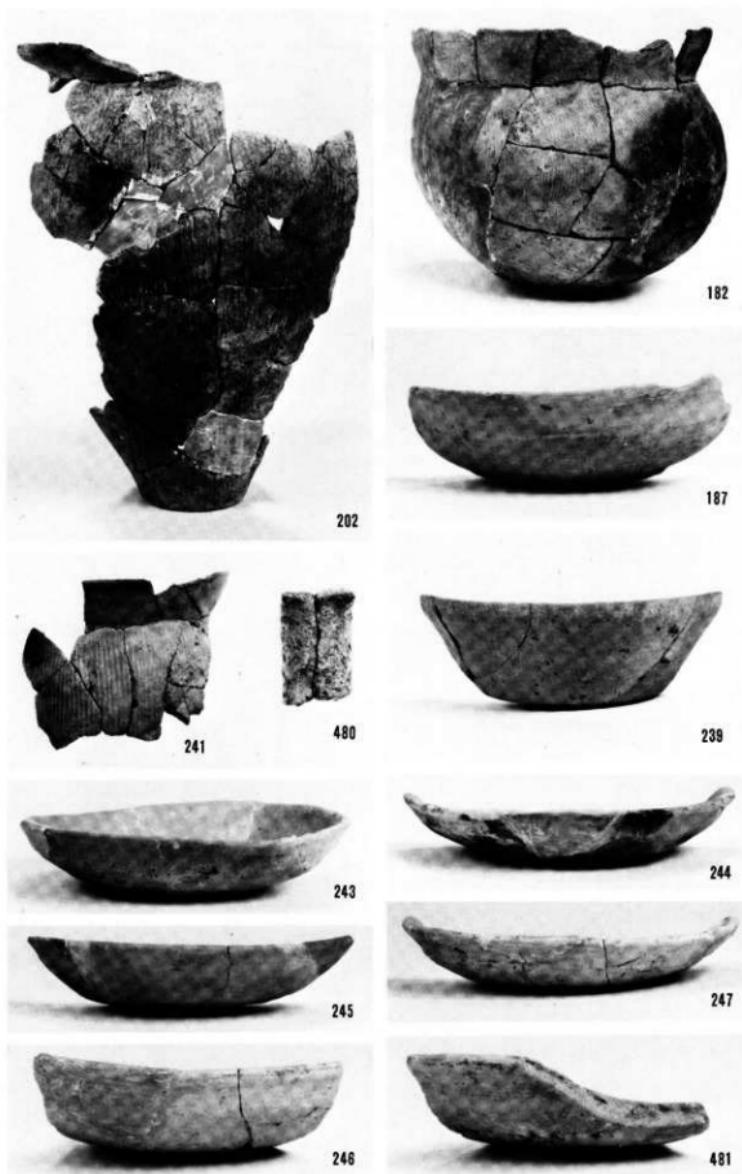


172

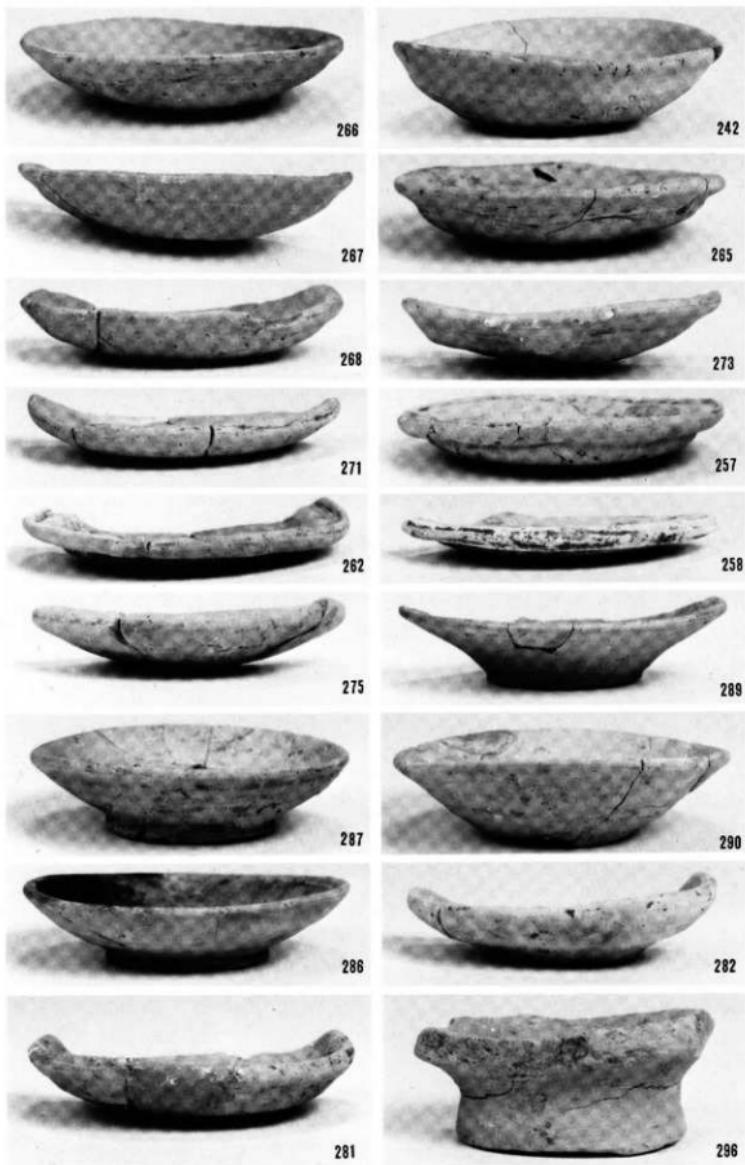


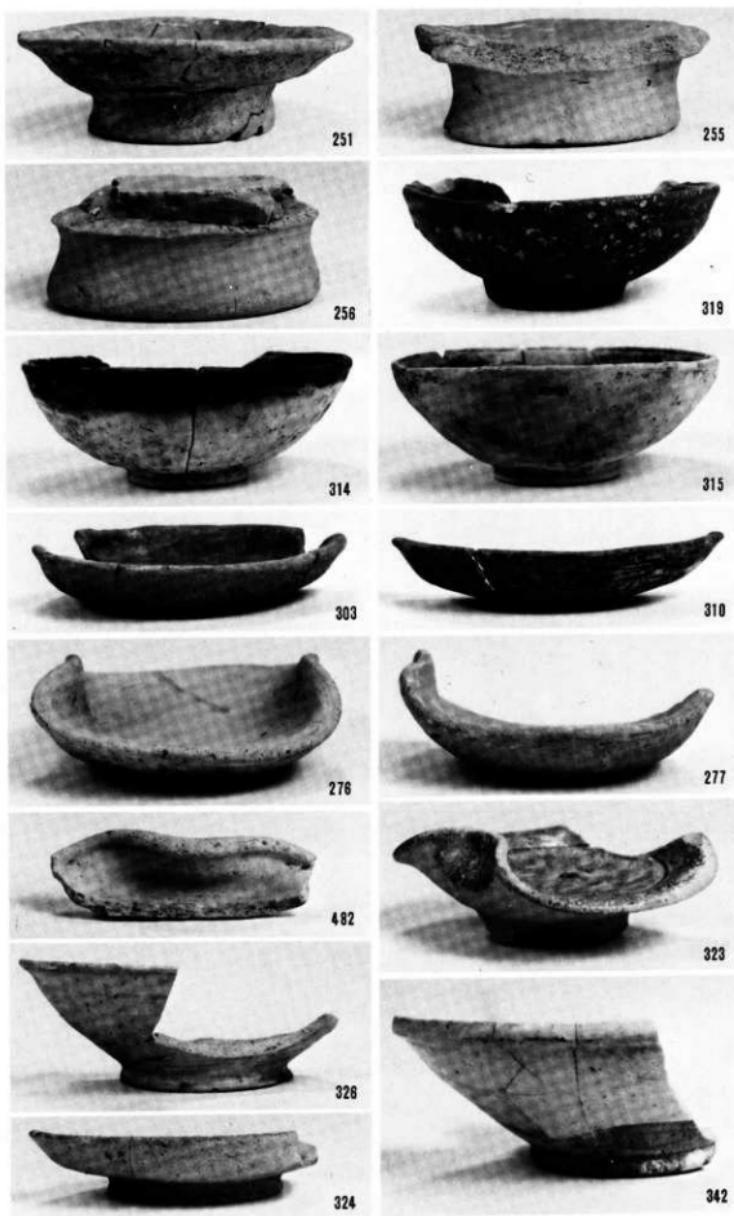
227

整穴住居11 (164・166), 整穴住居12 (172・176), 方形周溝墓 (227)

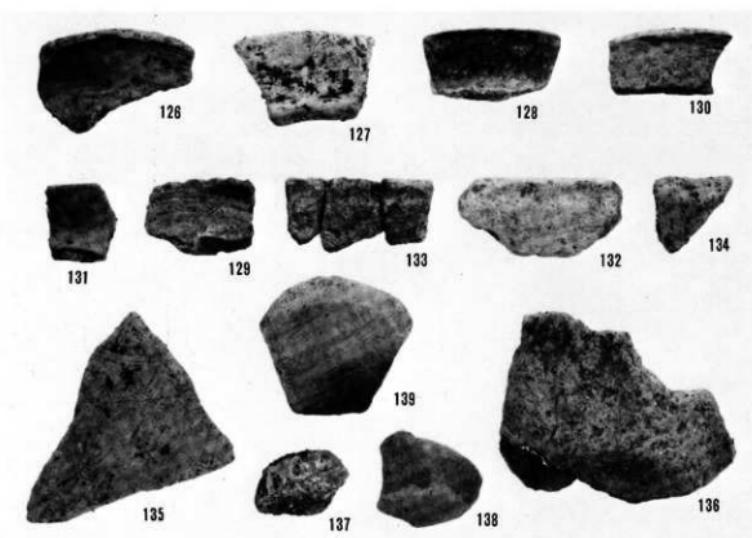


整穴住思13 (182・187) , 土坑6 (202) , 土坑10 (239) , 溝1 (241・480) , 土坑12 (243~247・481)

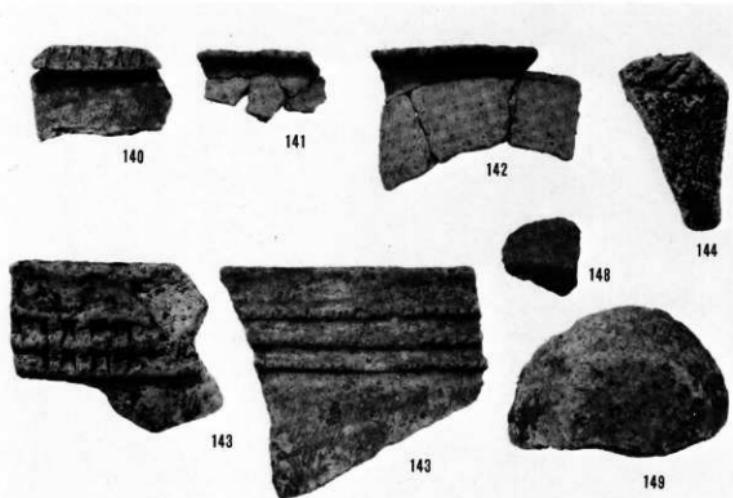




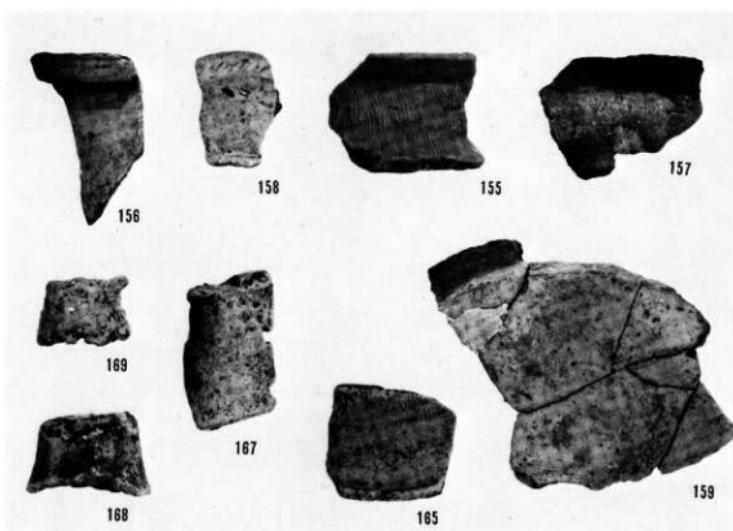
図版四二 今津町弘川遺跡（第Ⅱ次調査・遺物）



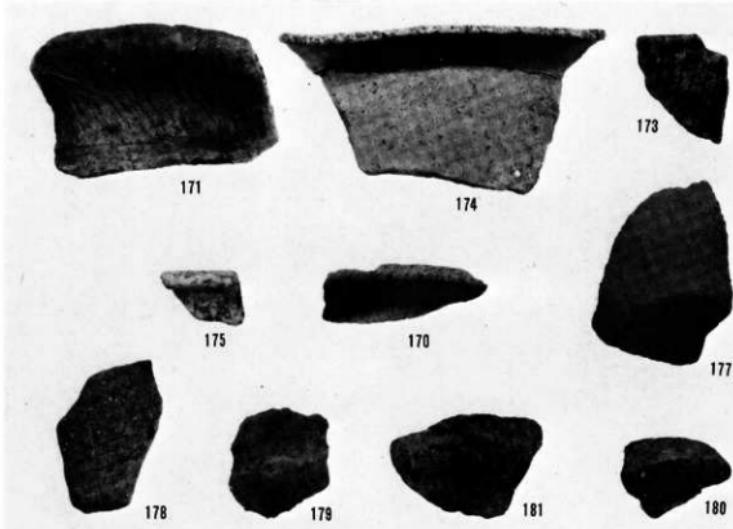
堅穴住居 8



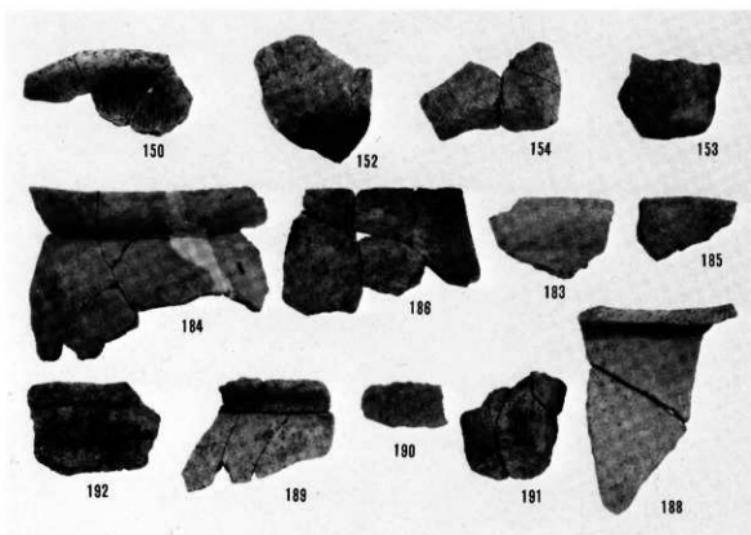
堅穴住居 9



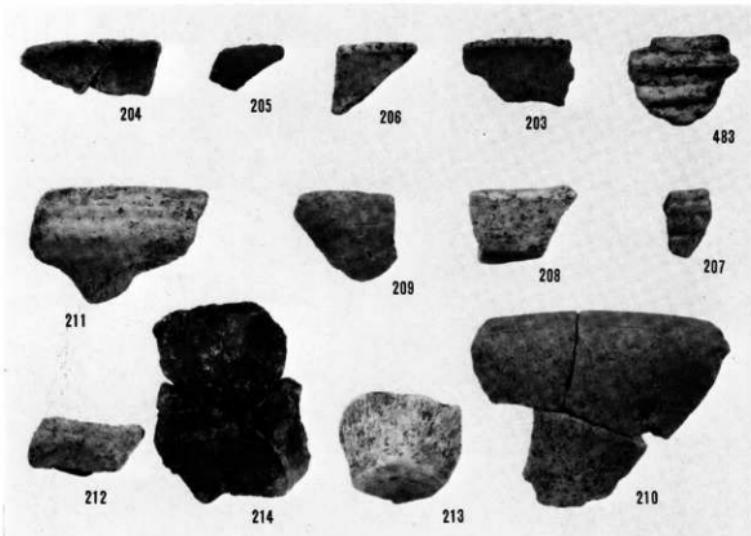
整穴住居 1 1



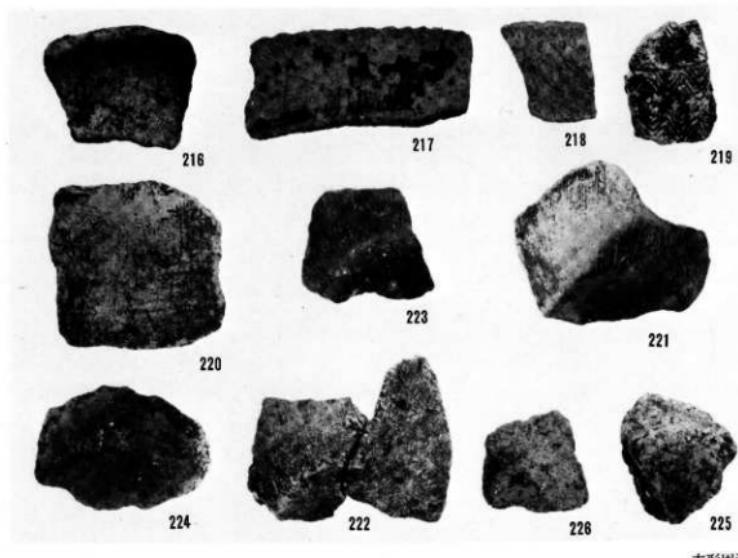
整穴住居 1 2



整穴住居10（150・152～154）、整穴住居13（183～186）、整穴住居14（188～192）



圖版四五 今津町弘川遺跡（第Ⅱ次調査・遺物）

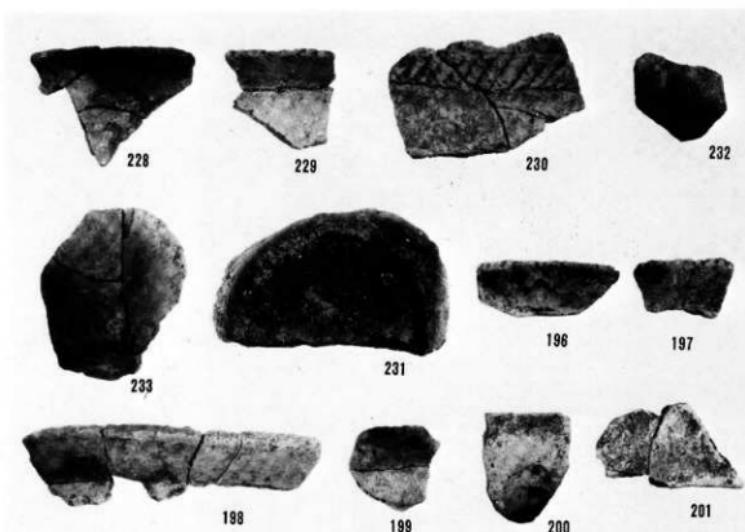


方形周溝墓

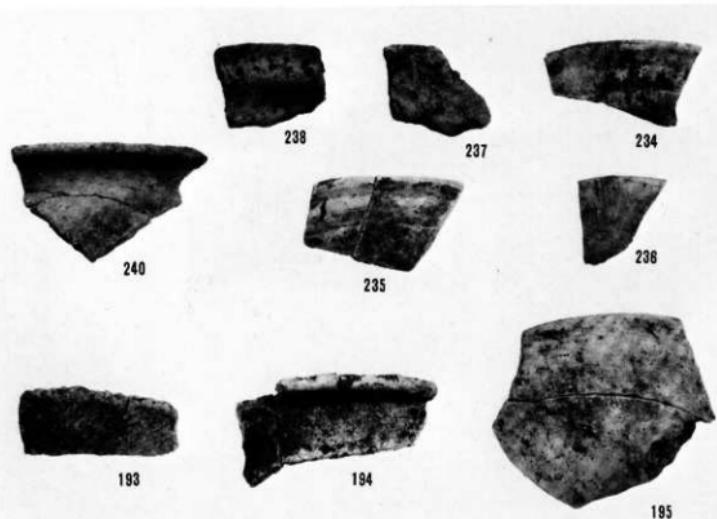


方形周溝墓 (215)

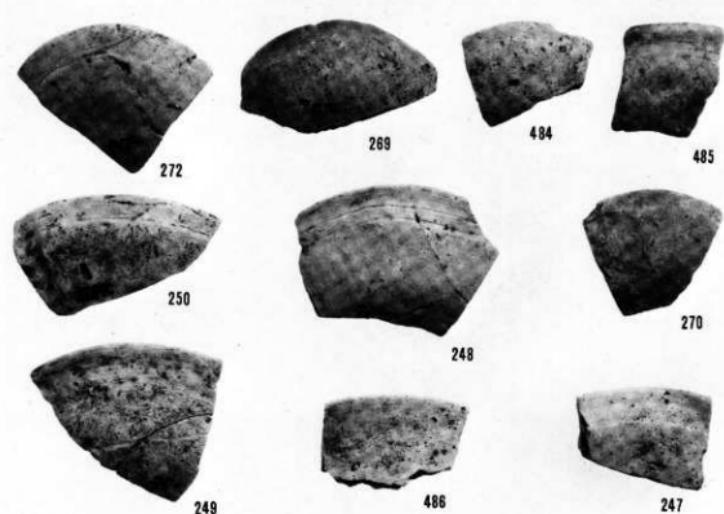
図版四六 今津町弘川遺跡（第Ⅱ次調査・遺物）



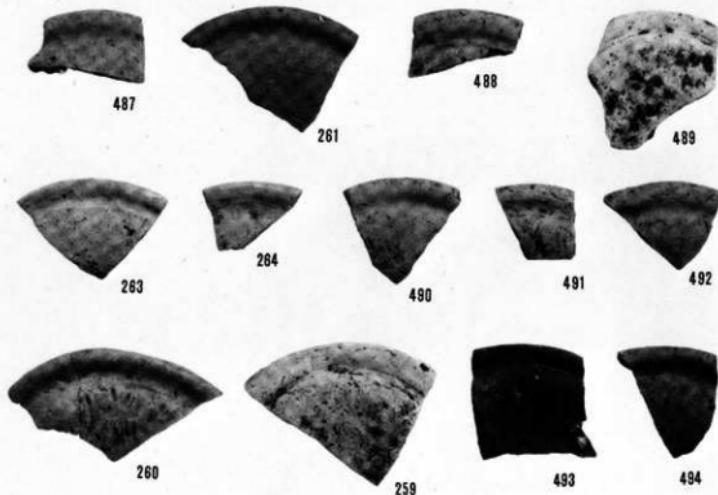
土坑6 (196~201), 第10トレンチ落込み (228~233)



土坑4 (193), 土坑5 (194), ピット1 (195), 土坑9 (234~238), 土坑11 (240)

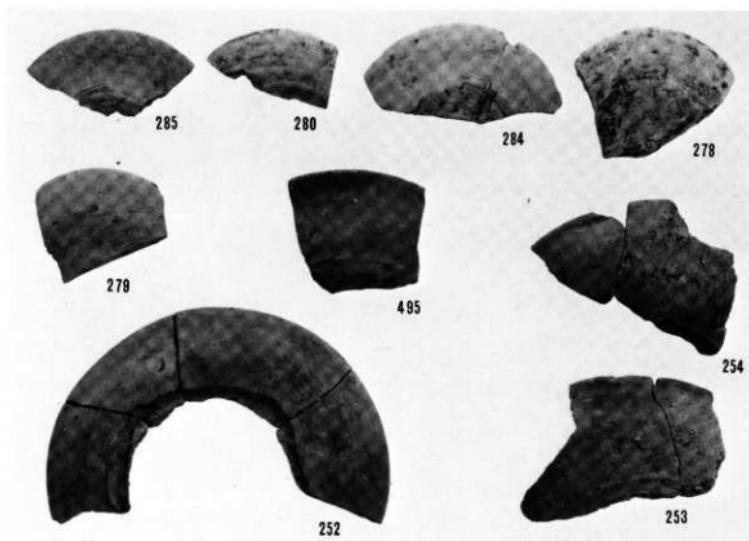


土坑1 2

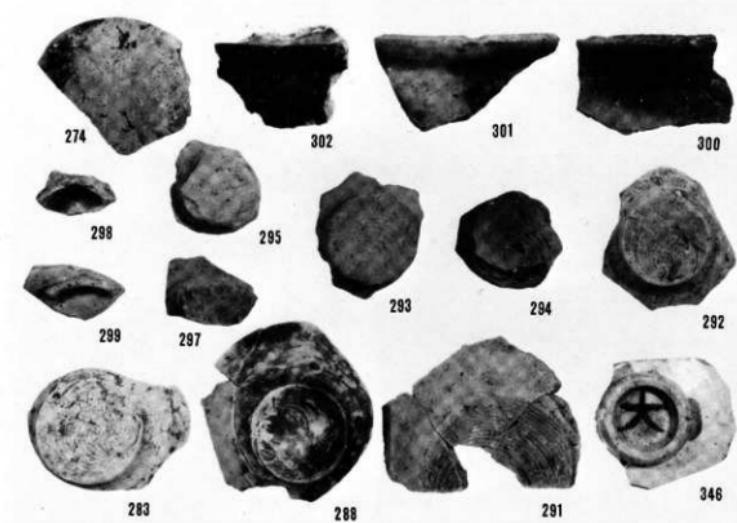


土坑1 2

圖版四八 今津町弘川遺跡（第Ⅱ次調査・遺物）

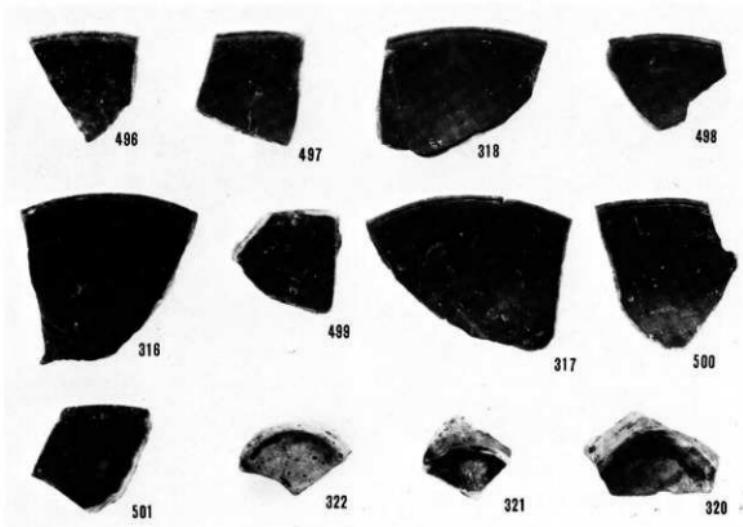


土坑1 2

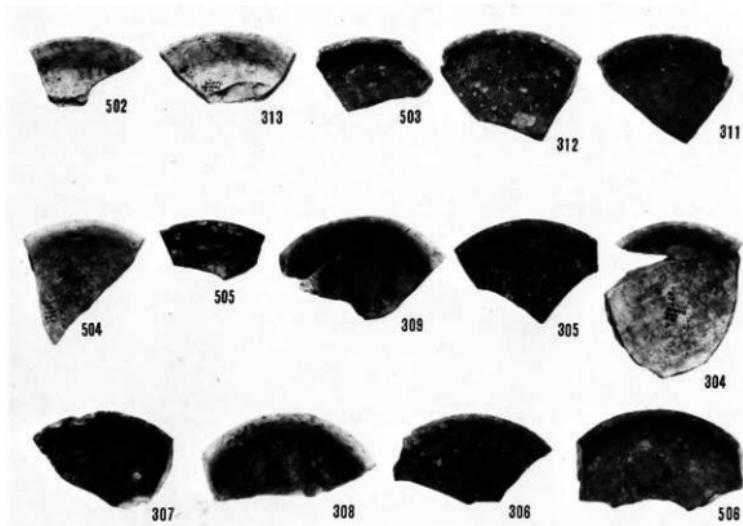


土坑1 2

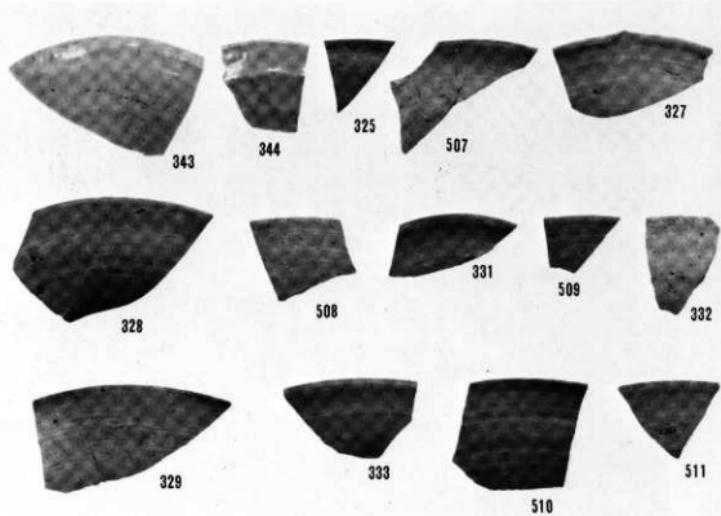
図版四九 今津町弘川遺跡（第Ⅱ次調査・遺物）



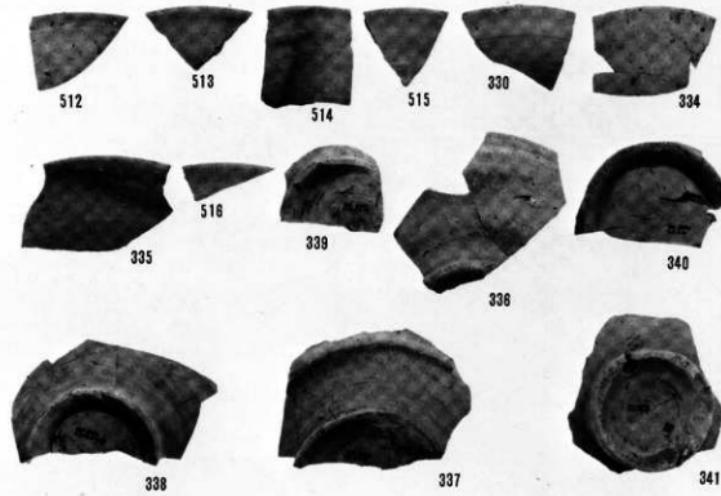
土坑12



土坑12

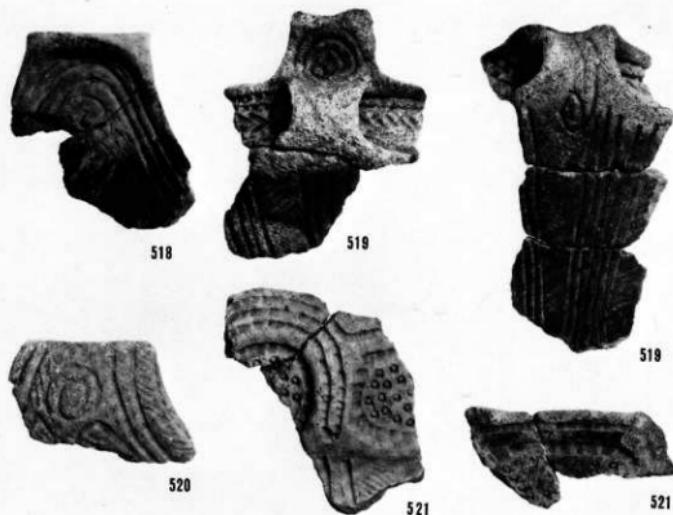


土坑12

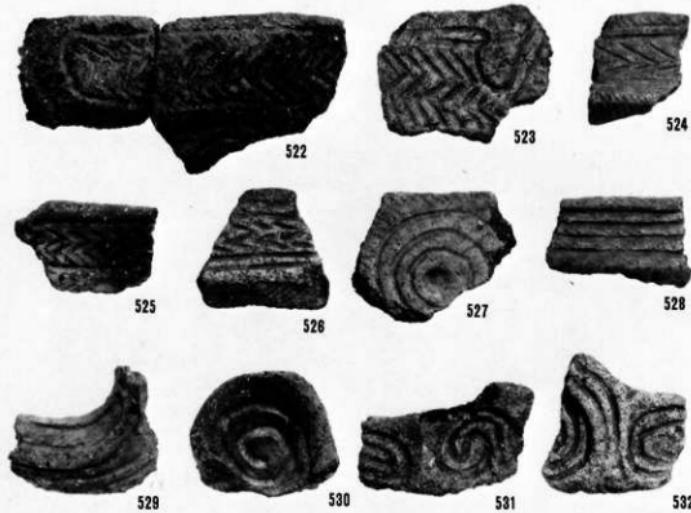


土坑12

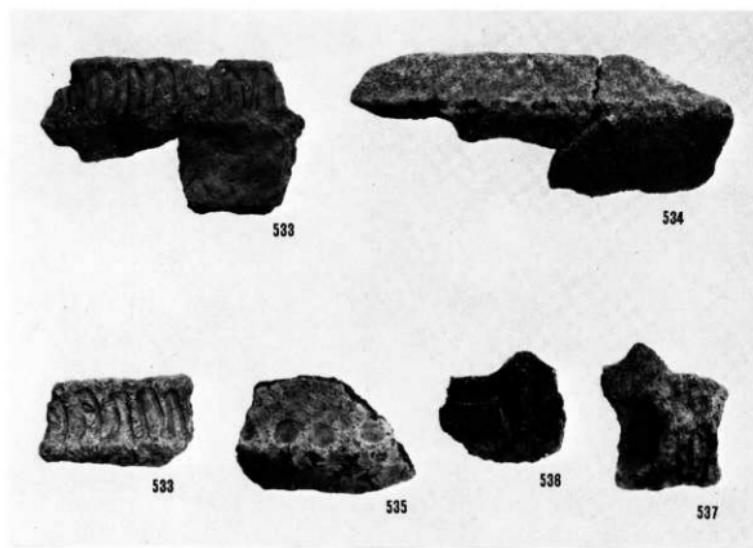
図版五一 今津町弘川遺跡（第Ⅱ次調査・遺物）



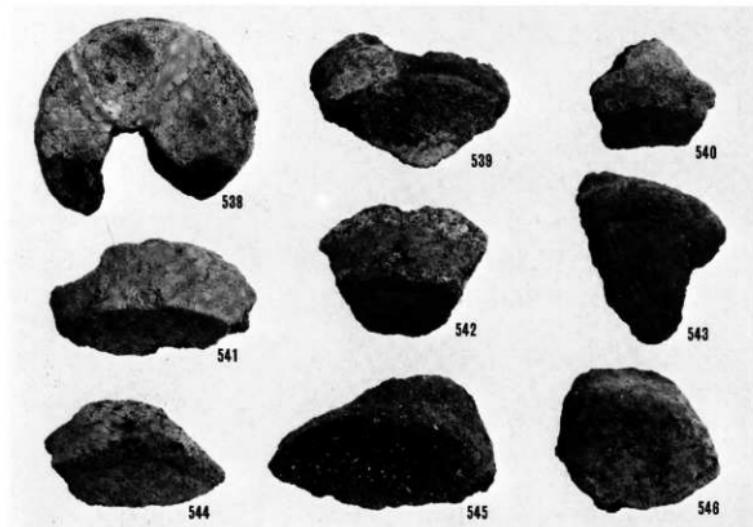
溝1



溝1



溝1



溝1



383



369



418



358

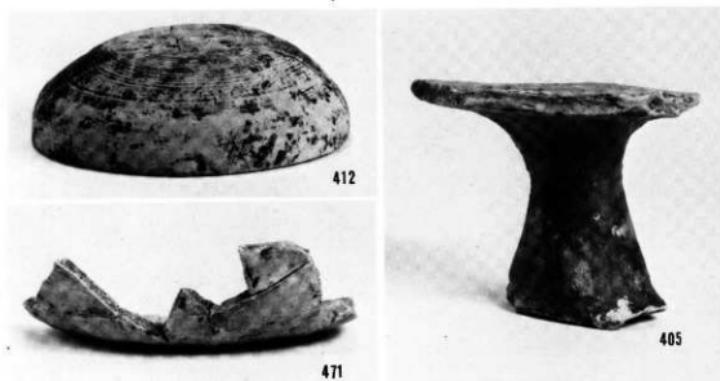


424

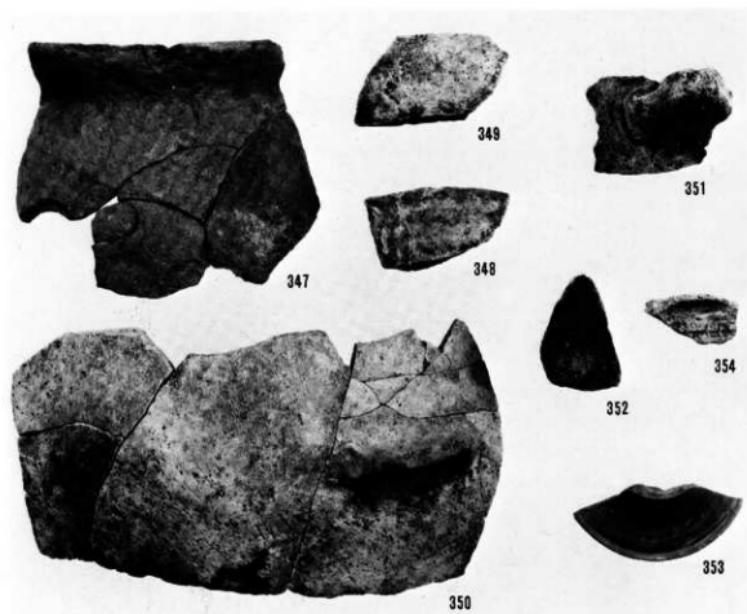


410

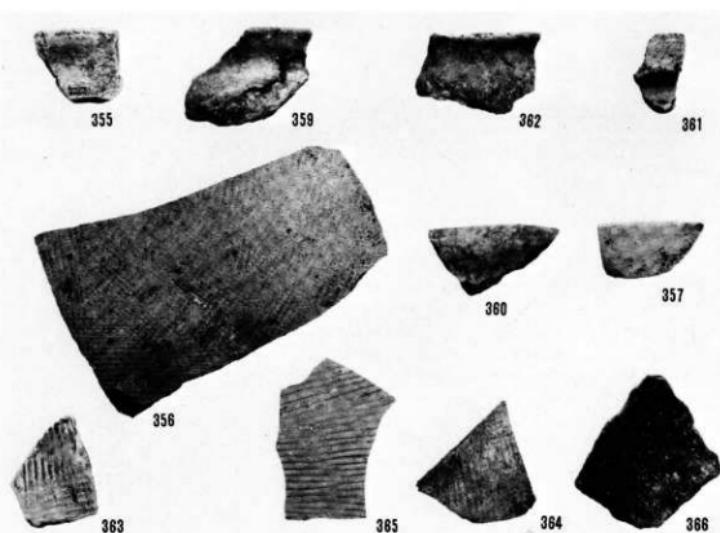
竪穴住居18(358)、竪穴住居19(369・383)、第Bトレンチ溝4-A(410)、第Bトレンチ溝4-B(418・424)



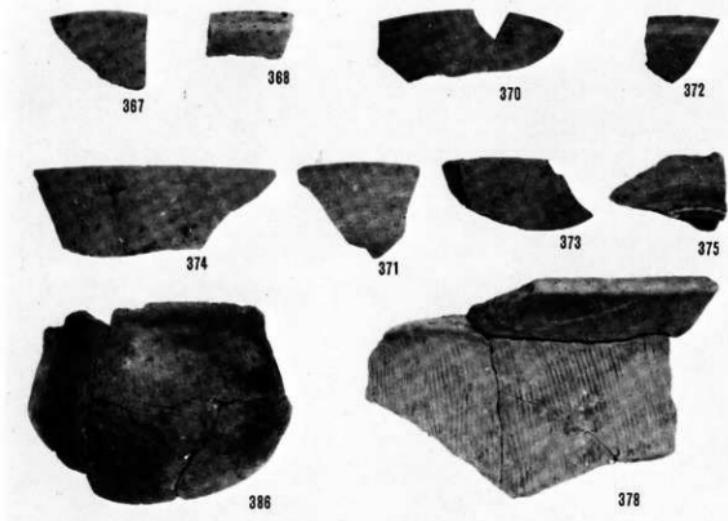
第Aトレンチ溝4（405）、第Bトレンチ溝4-B（412）、第Fトレンチ溝6（471）



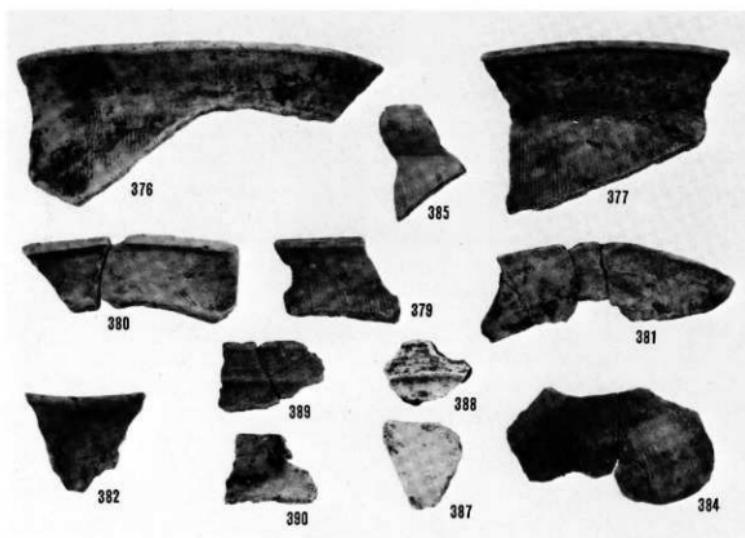
堅穴住居16（347～353）、土坑13（354）



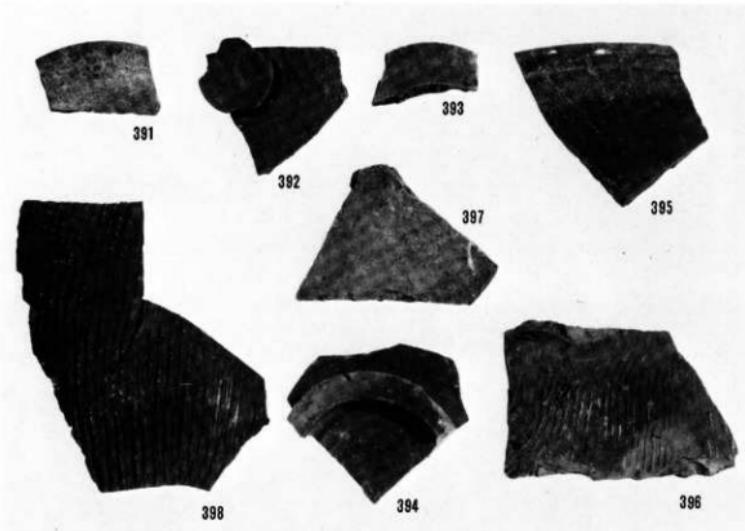
整穴住居17 (365・356)、土坑14 (361・363)、土坑15 (362)、整穴住居18 (357～360・364～366)



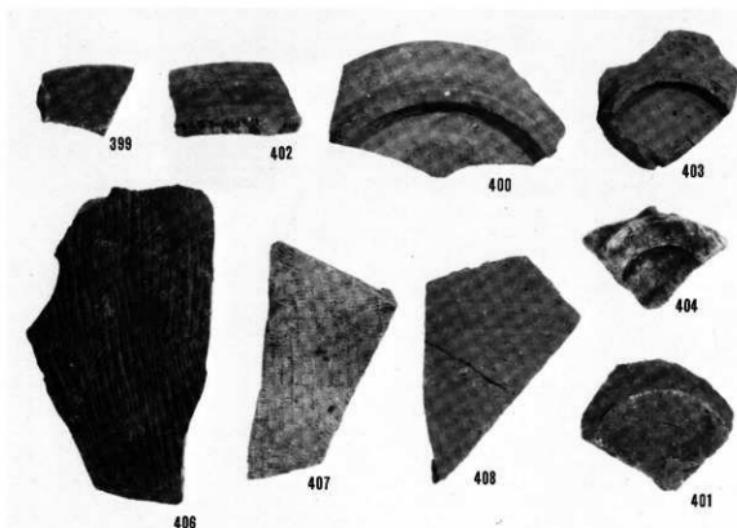
整穴住居 19



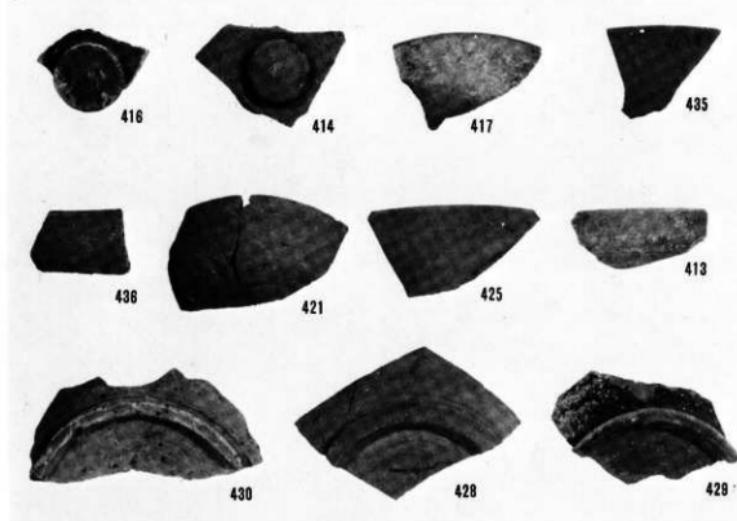
竪穴住居 19



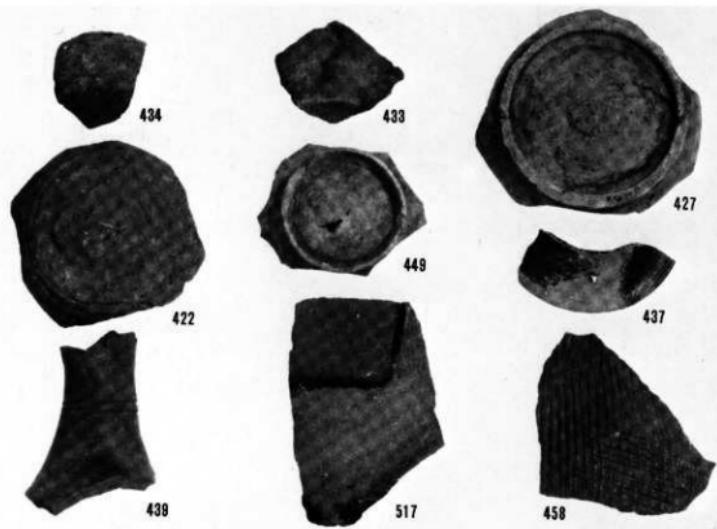
第 G トレンチ、溝 4



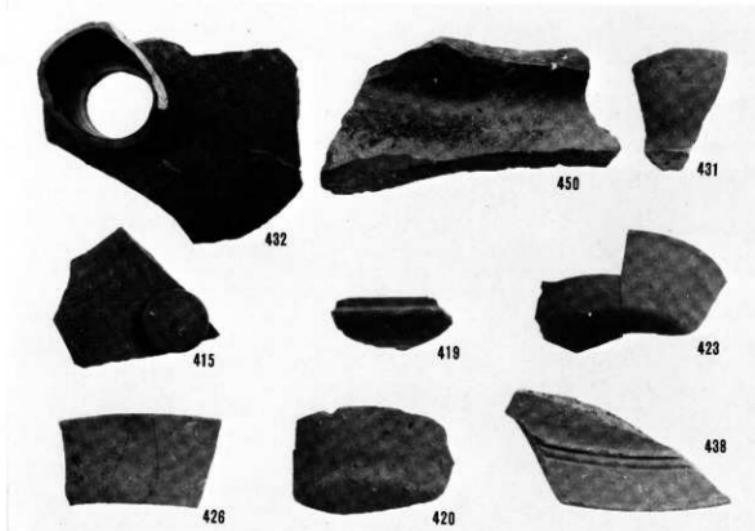
第A トレンチ・溝4



第B トレンチ・溝4-B

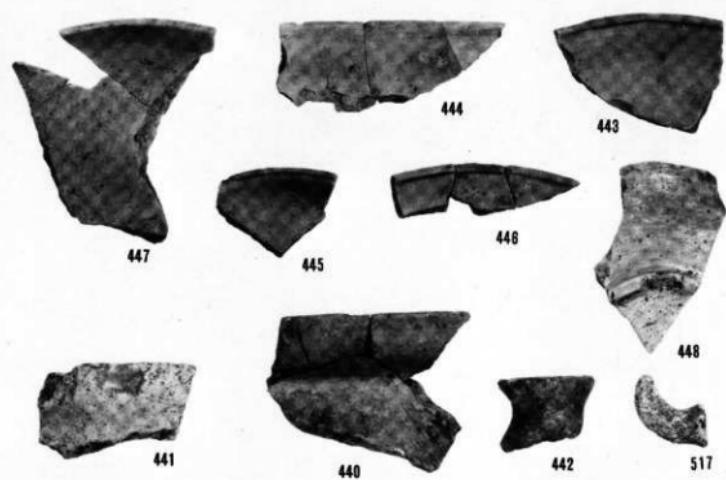


第B トレンチ・溝4-B

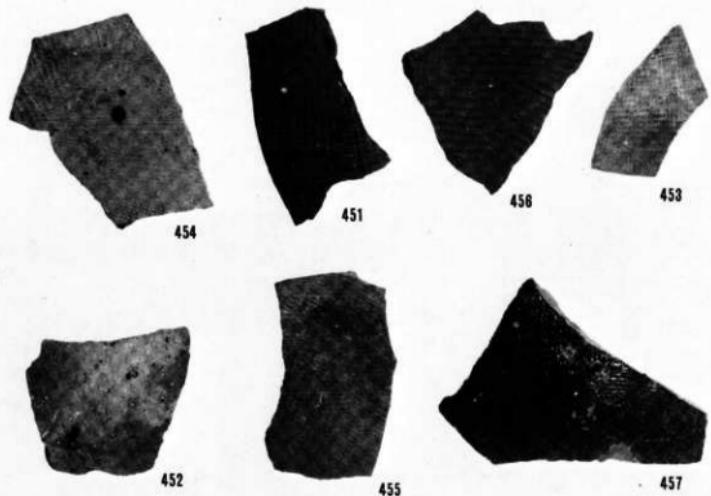


第B トレンチ・溝4-B

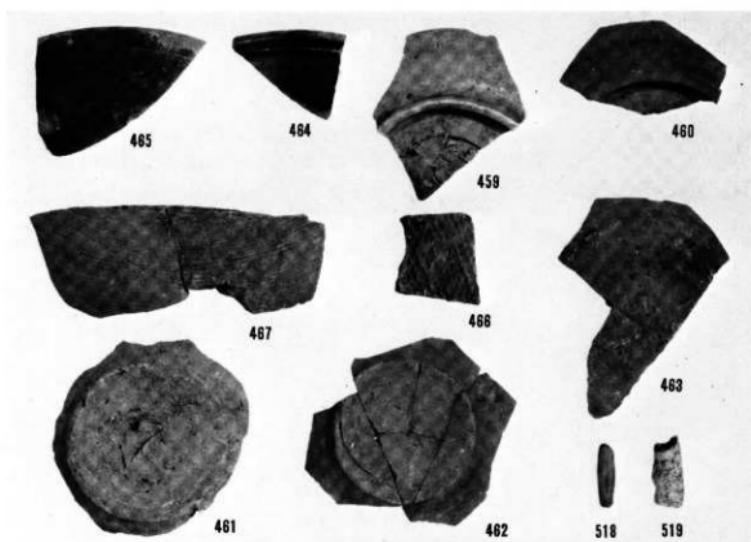
図版五九 今津町弘川遺跡（第Ⅱ次調査・遺物）



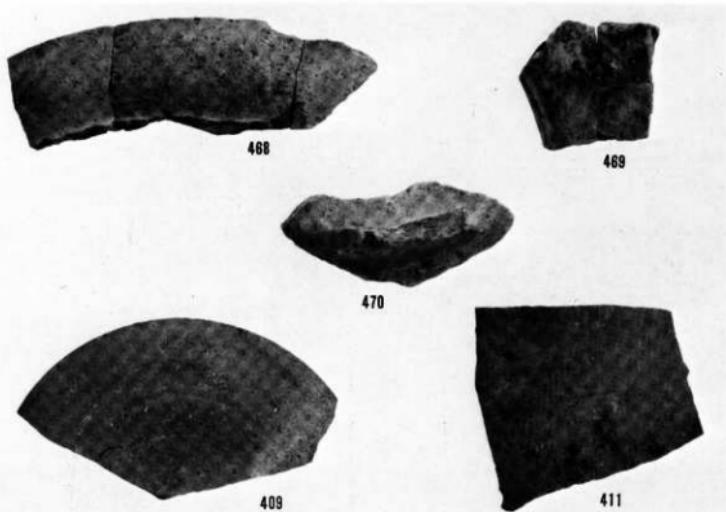
第Bトレンチ・溝4-B



第Bトレンチ・溝4-B



第Cトレンチ・溝4-B

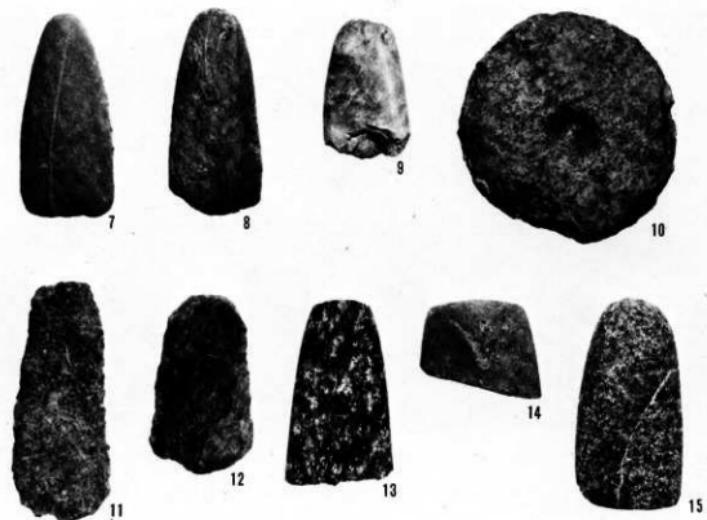


第Bトレンチ溝4-A (409・411), 第Aトレンチ溝5 (468~470)

図版六一 今津町弘川遺跡（第Ⅰ・Ⅱ次調査・石製品）

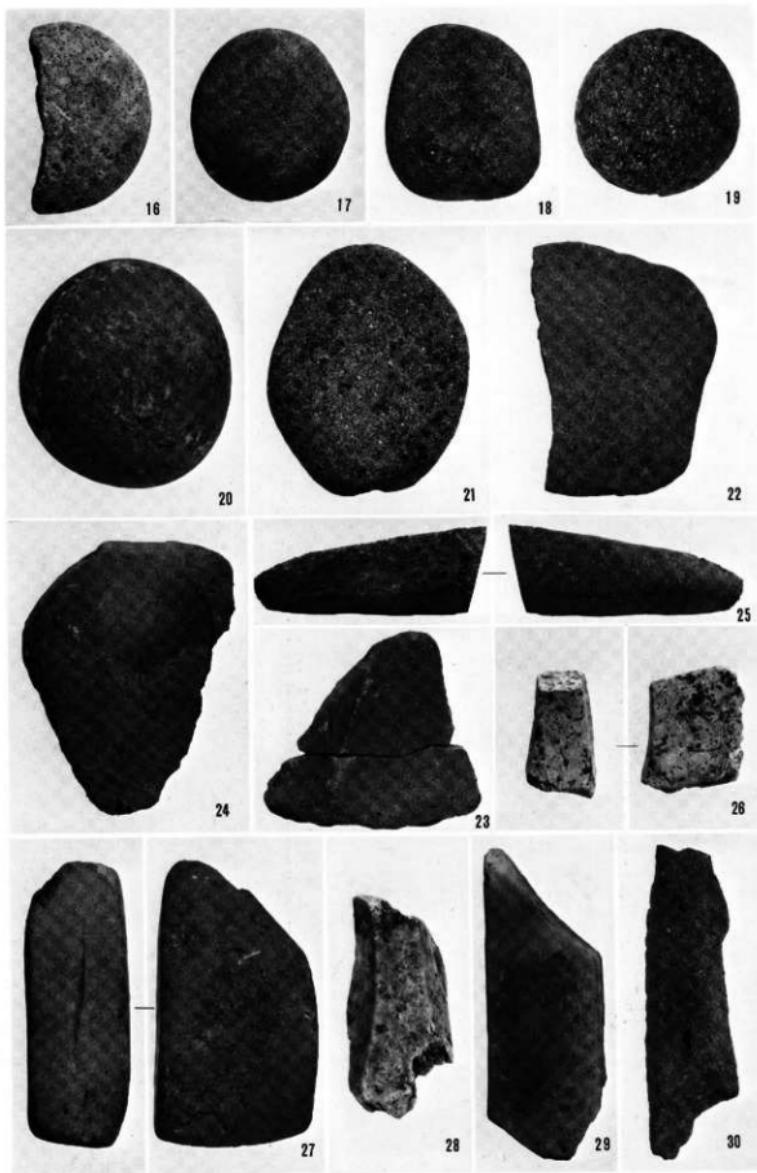


竪穴住居9 (1) , 土坑8 (2) , 溝2 (3) , 第10トレンチ落ち込み (4)  
土坑12 (5) , 竪穴住居12 (6)



竪穴住居2 (7) , 竪穴住居4 (8・9) , 溝1 (10・13) , 表探 (11) ,  
ピット2 (12) , 方形周溝墓 (14) , 土坑12 (15)

図版六二 今津町弘川遺跡(第I・II・III次調査・石製品)



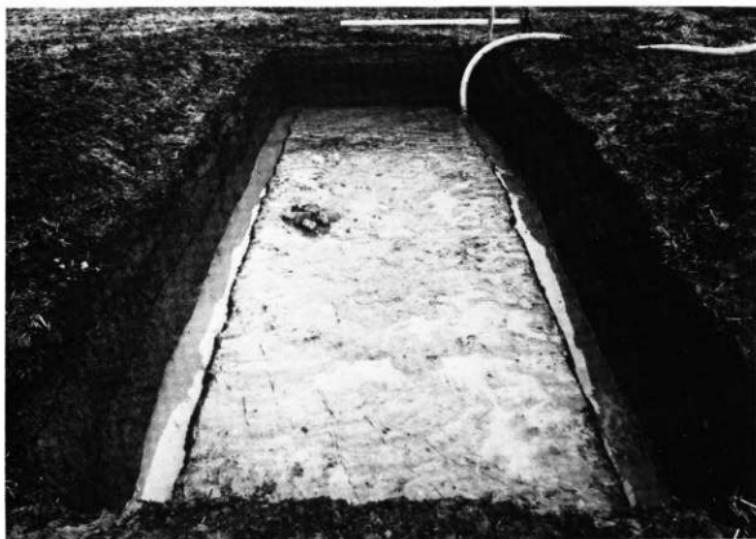
溝1(16~18), 積穴住居12(19・25・27), 土坑12(28), 方形周溝墓(21),  
積穴住居9(20・22~24・29), 積穴住居1(26), 溝4(30)



第2トレンチ第4ブロック（西より）



第2トレンチ・SD2（南より）

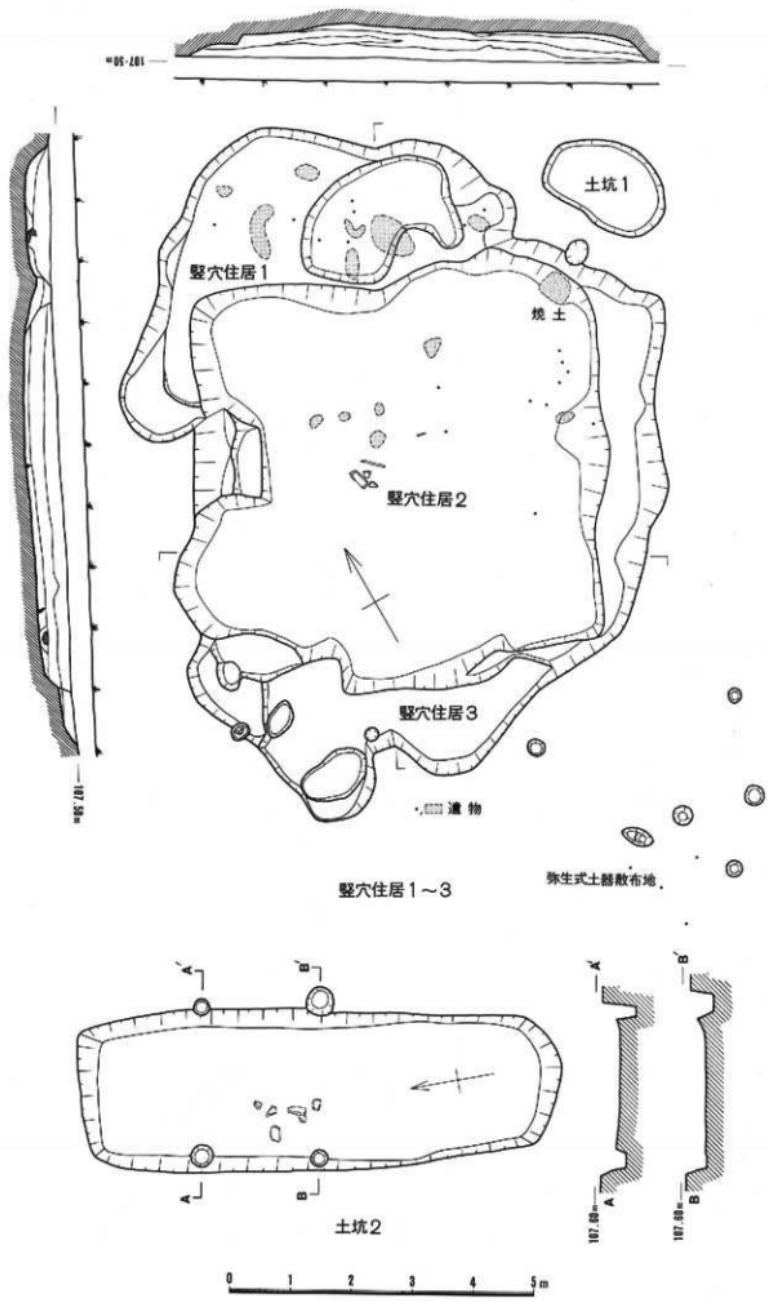


第3トレンチ第5ブロック（南より）

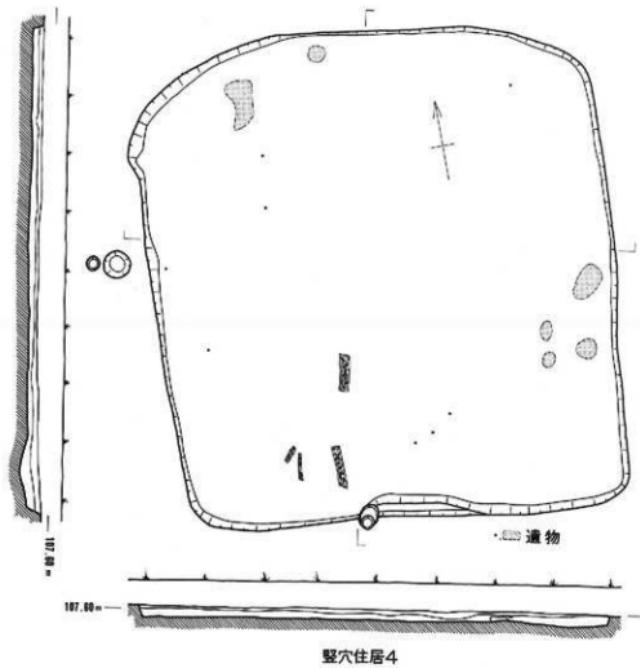


第3トレンチ礫群

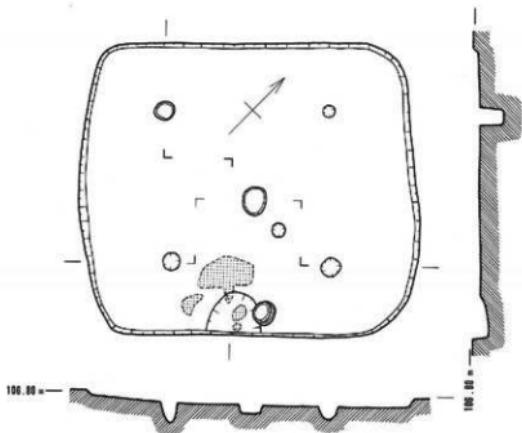
図版六五 今津町弘川遺跡（第一次調査・遺構実測図）



図版六六 今津町弘川遺跡（第一次調査・遺構実測図）

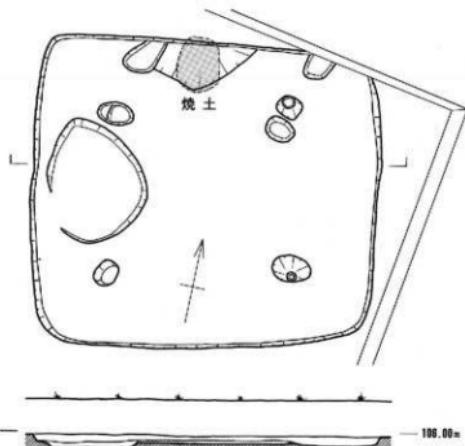


竪穴住居4

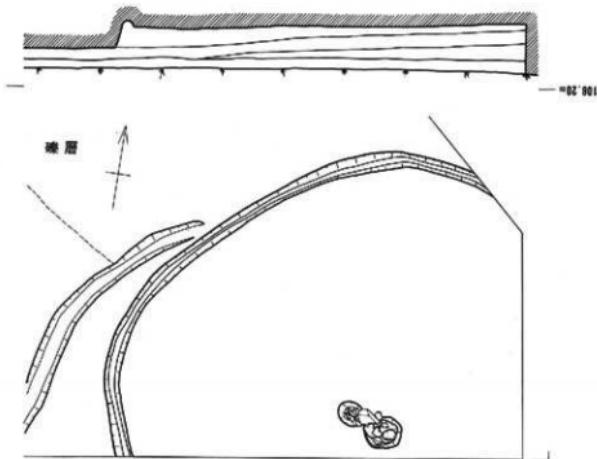


竪穴住居5





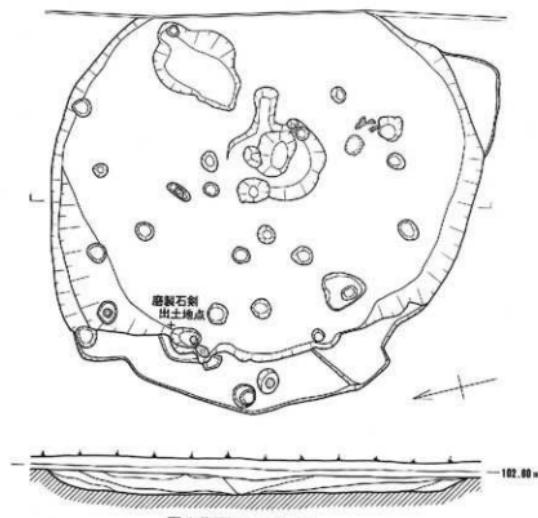
竪穴住居 6



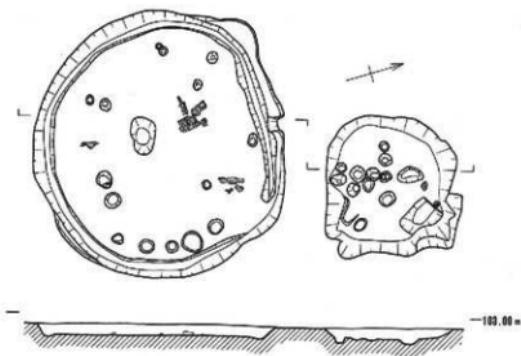
竪穴住居 7

0 1 2 3 4 5 m

図版六八 今津町弘川遺跡（第Ⅱ次調査・造構実測図）

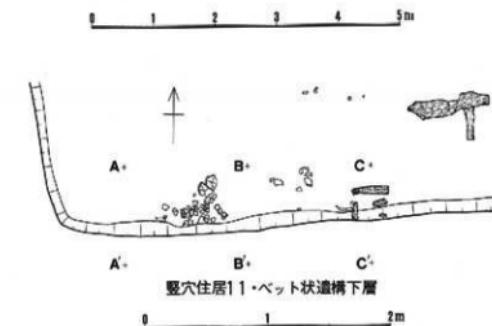
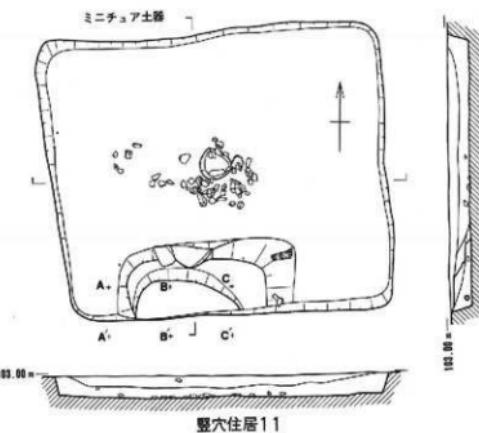
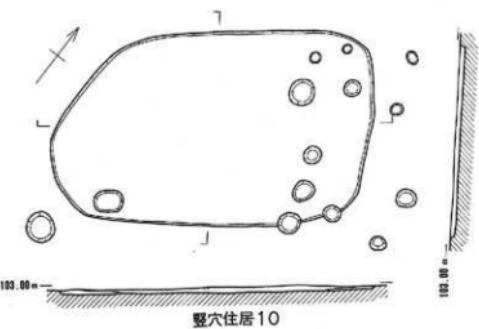


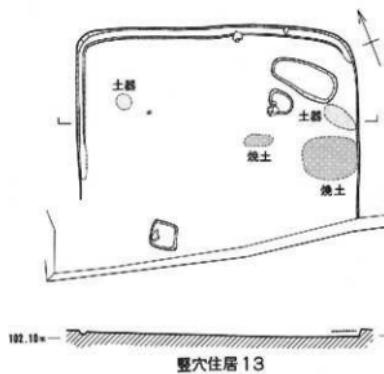
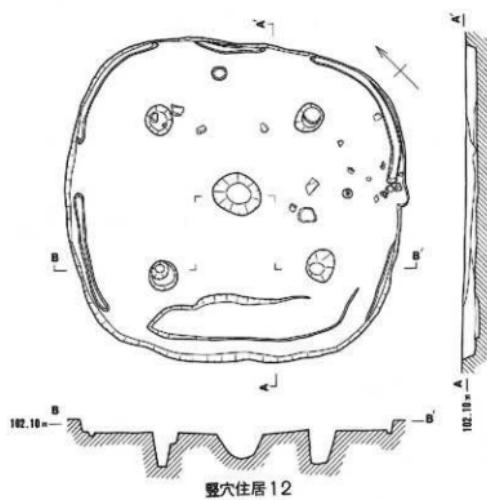
竪穴住居9・土坑12



竪穴住居8・土坑9

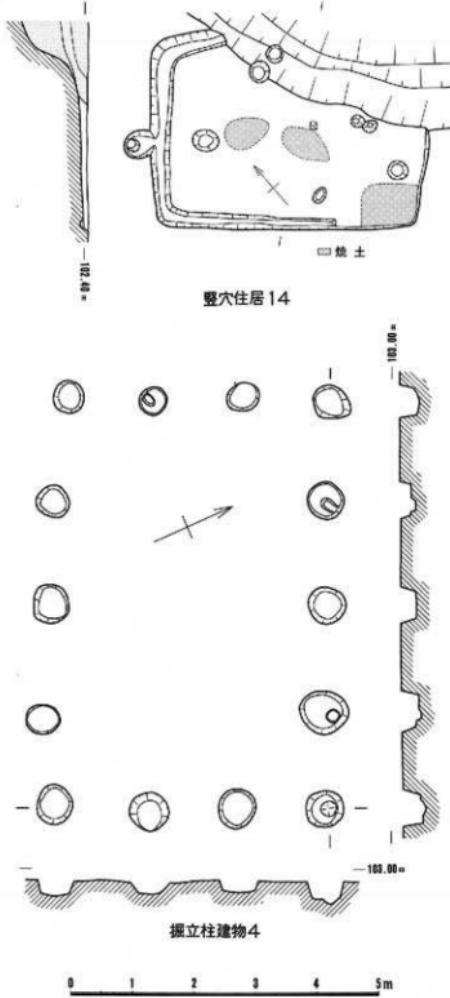
0 1 2 3 4 5m



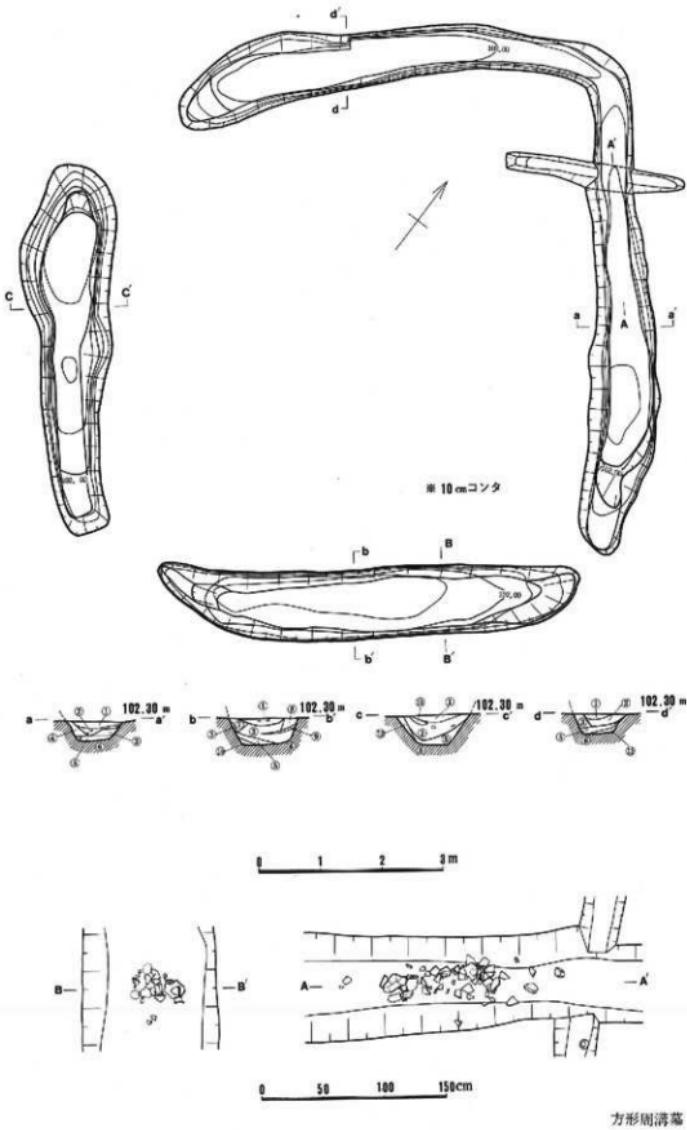


0 1 2 3 4 5m

図版七一 今津町弘川遺跡（第Ⅱ次調査・造構実測図）

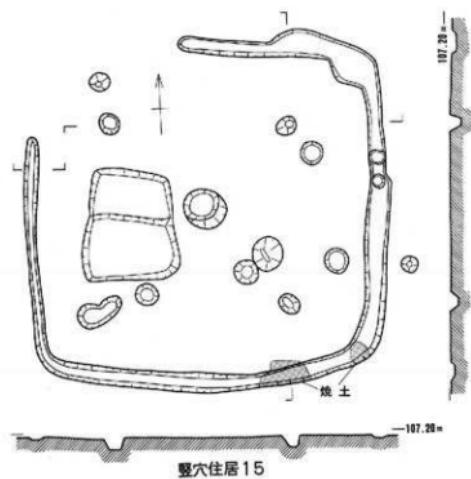


図版七二 今津町弘川遺跡（第Ⅱ次調査・遺構実測図）

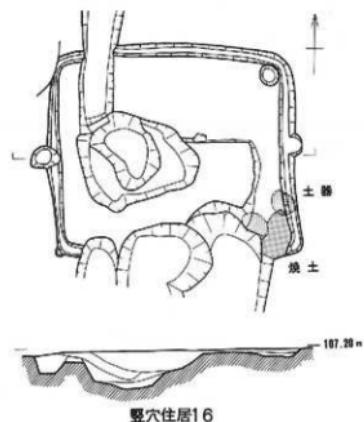


方形周溝墓

図版七三 今津町弘川遺跡（第Ⅱ次調査・造構実測図）



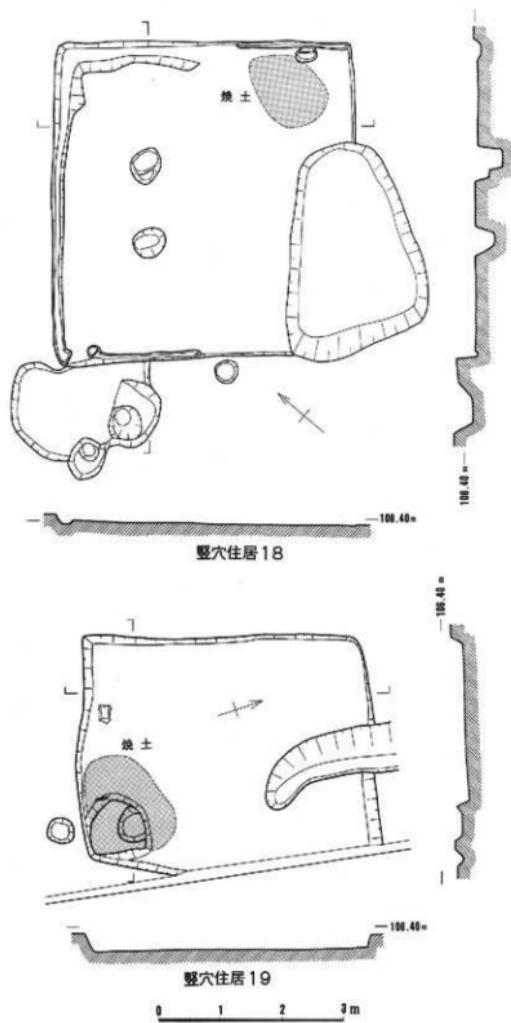
竪穴住居15



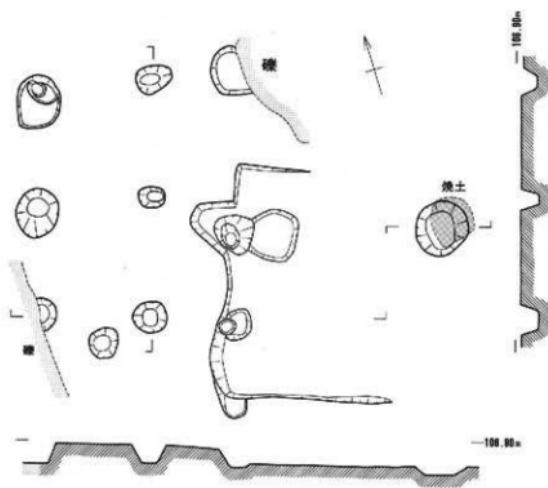
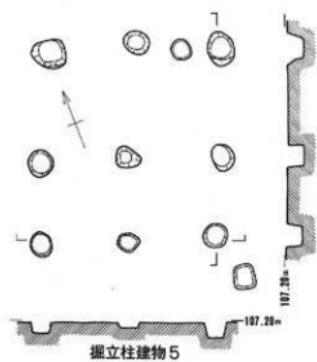
竪穴住居16

0 1 2 3m

図版七四 今津町弘川遺跡（第Ⅲ次調査・遺構実測図）

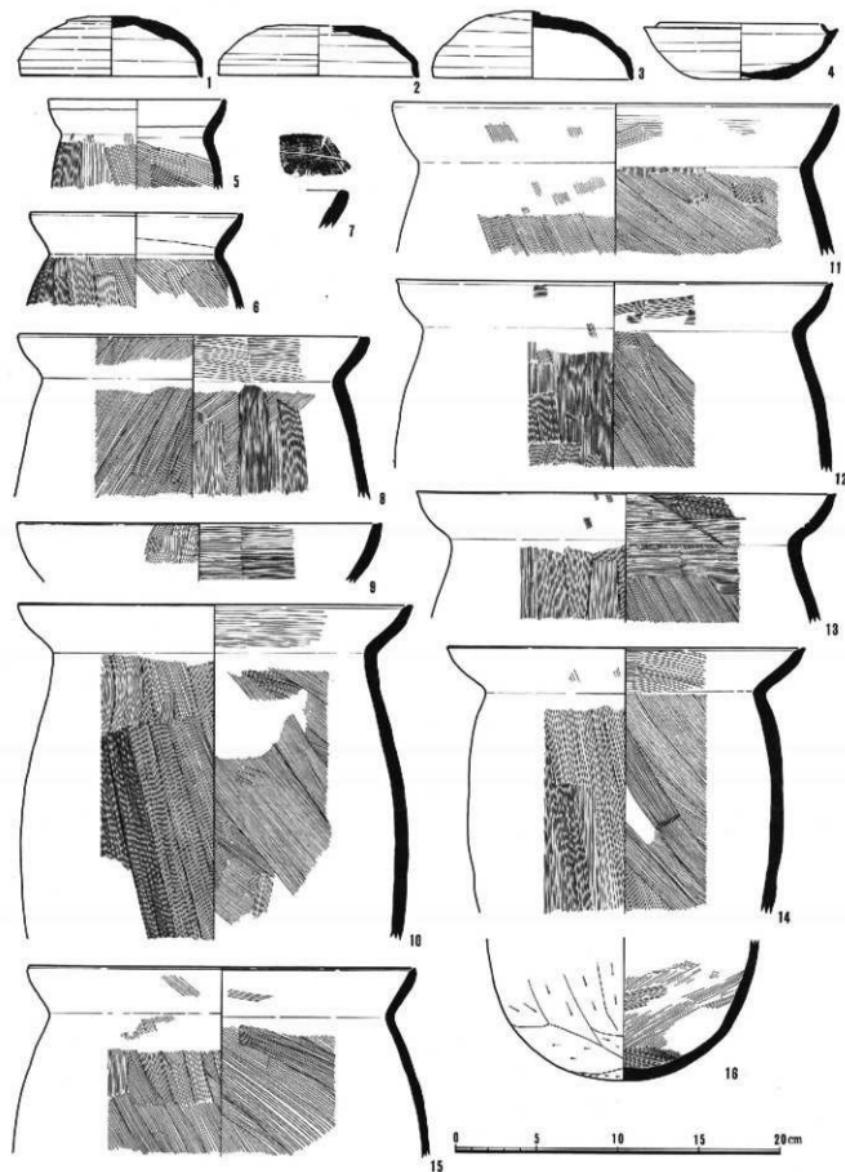


図版七五 今津町弘川遺跡（第Ⅲ次調査・遺構実測図）

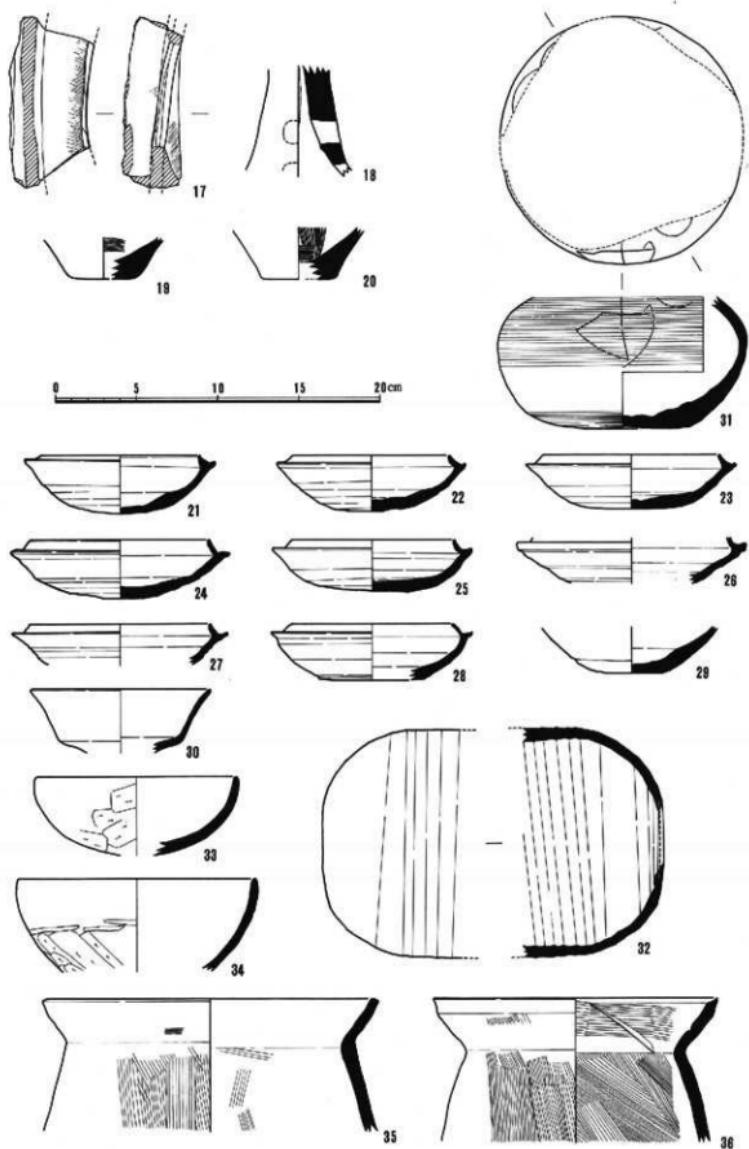


1 2 3m

図版七六 今津町弘川遺跡（第一次調査・遺物実測図）

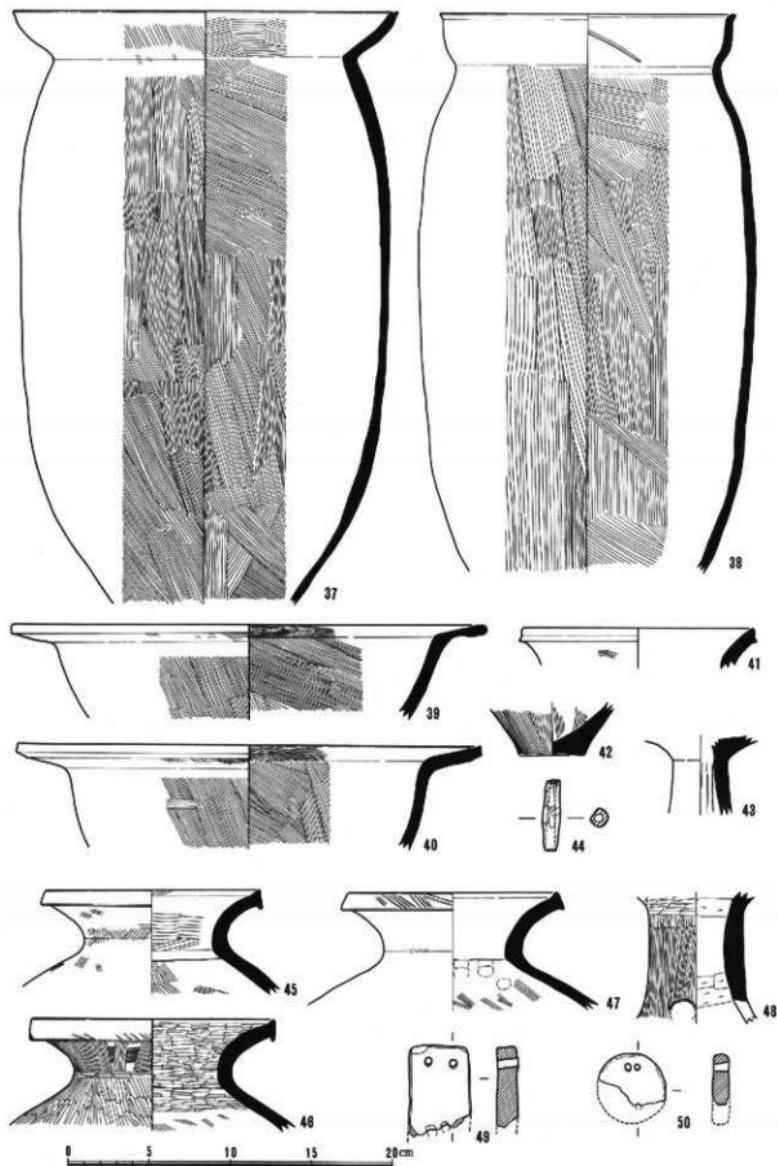


整穴住居 1

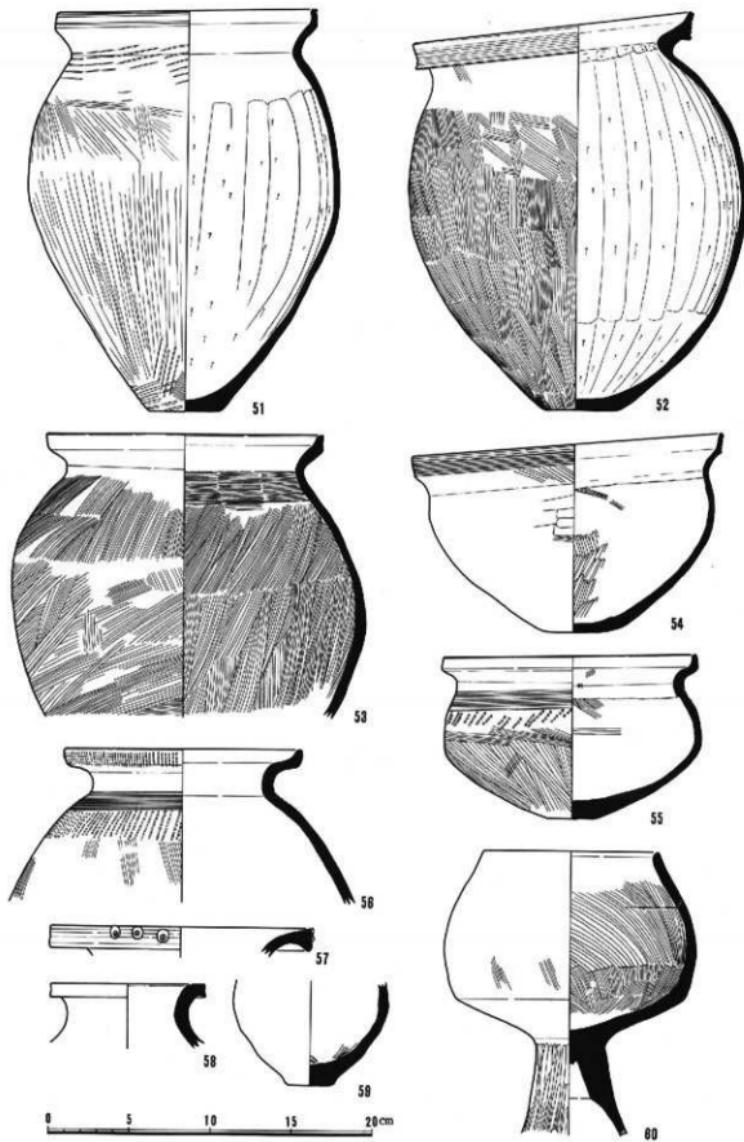


竪穴住居1 (17~20), 竪穴住居2 (21~36)

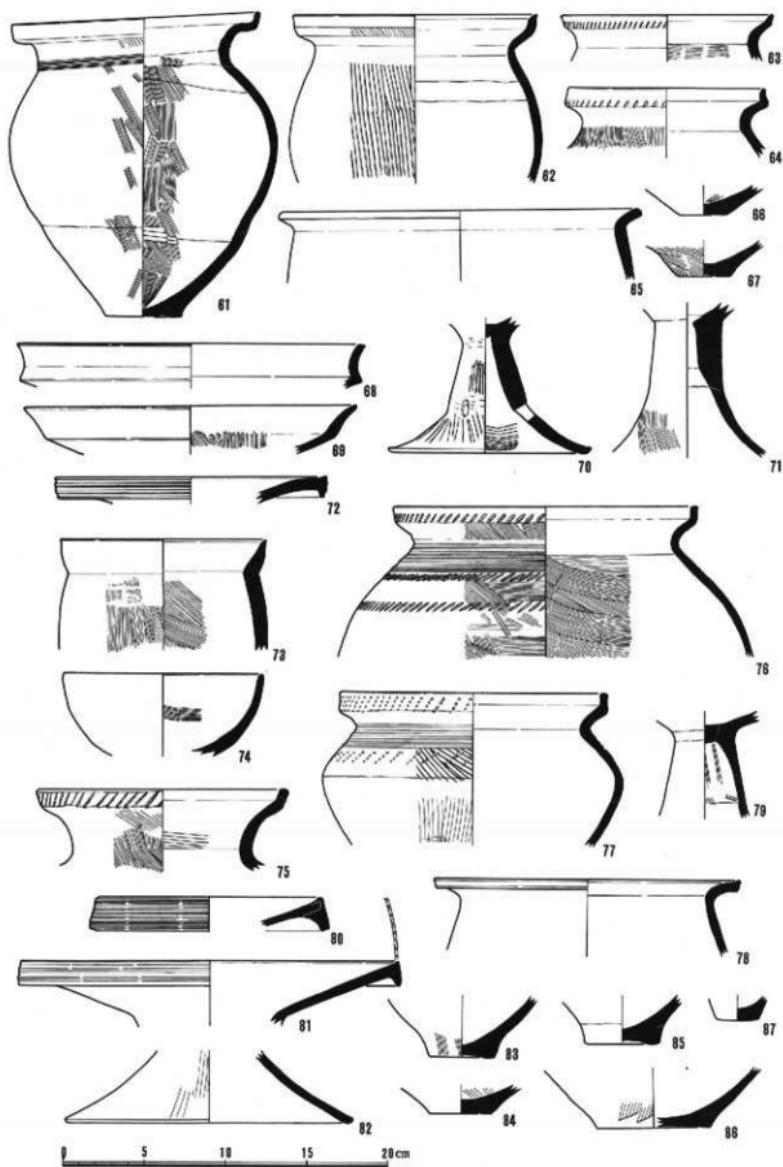
図版七八 今津町弘川遺跡（第一次調査・遺物実測図）



縫穴住居2 (37~44), 縫穴住居4 (45~50)

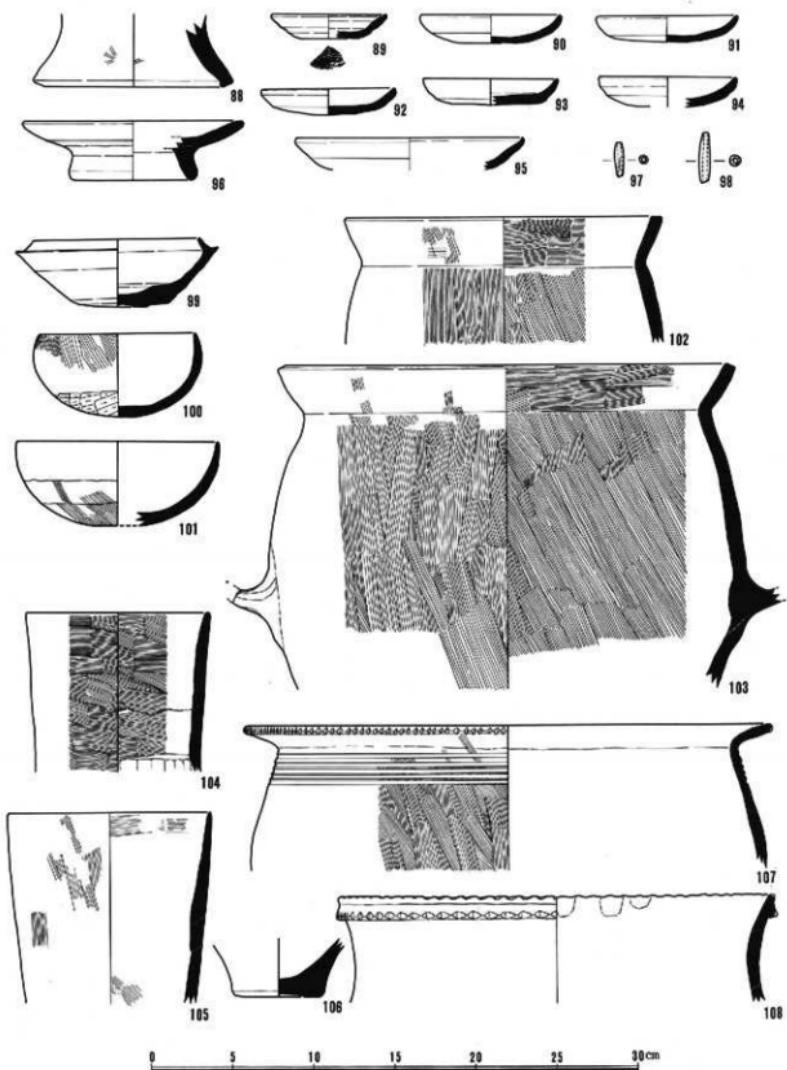


豊穴住居4（51～55）、豊穴住居5（56～60）



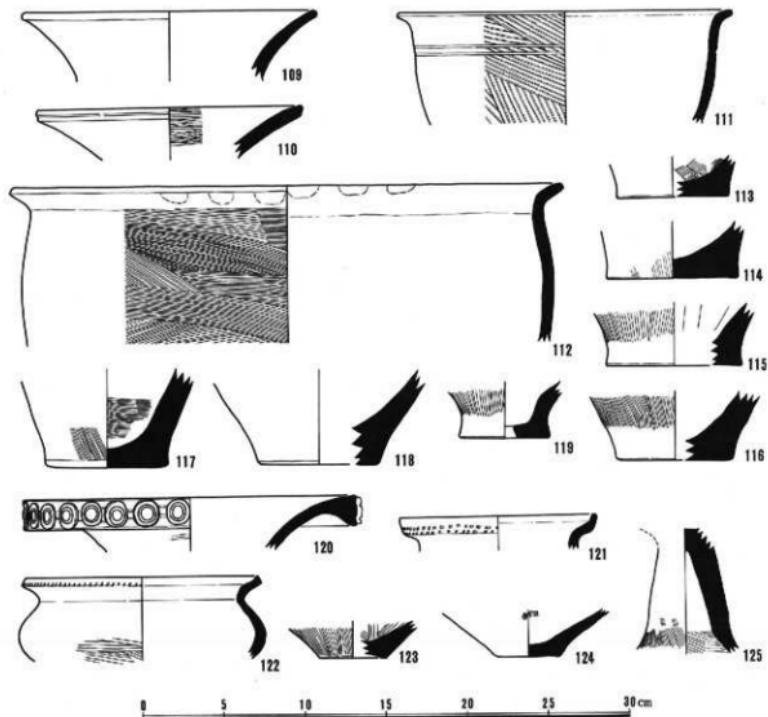
竪穴住居5 (61~72), 竪穴住居6 (73~75), 竪穴住居7 (76~87)

図版八一 今津町弘川遺跡（第1次調査・遺物実測図）

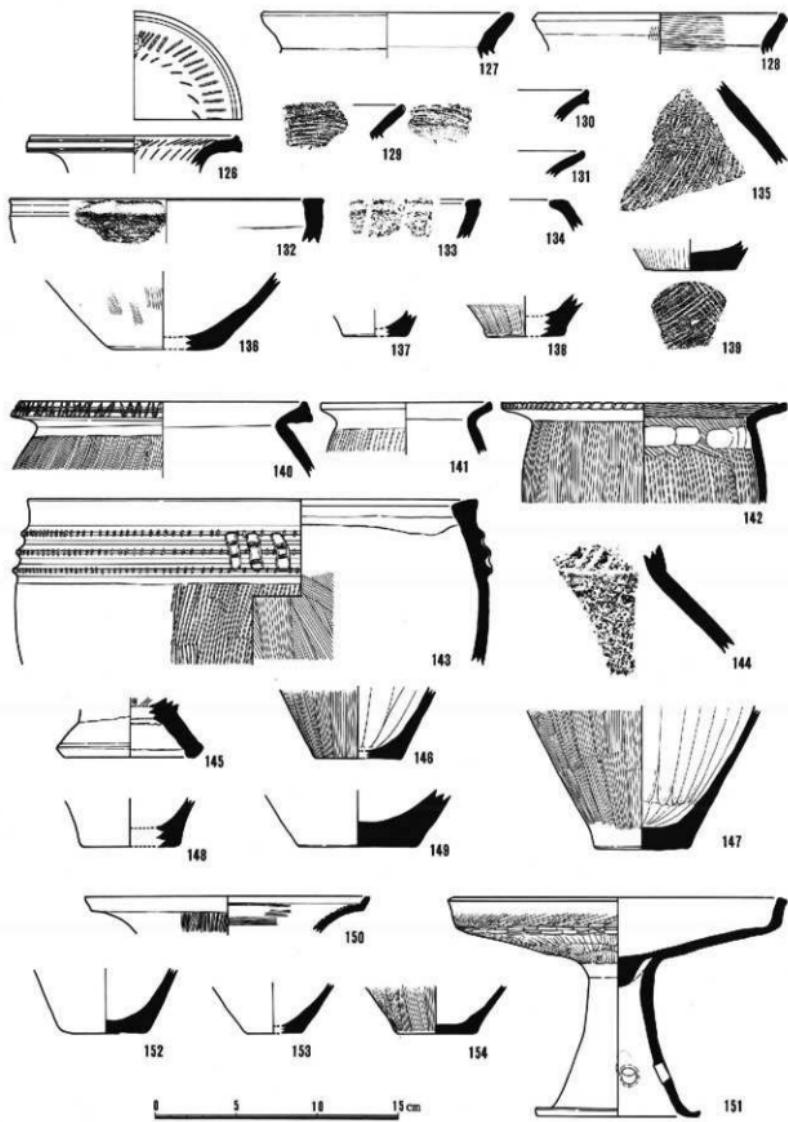


土坑1 (88), 土坑2 (89~98), 土坑3 (99~103),  
第25・27拡張トレンチ (104~106・108), 表探 (107)

図版八二 今津町弘川遺跡（第1次調査・遺物実測図）

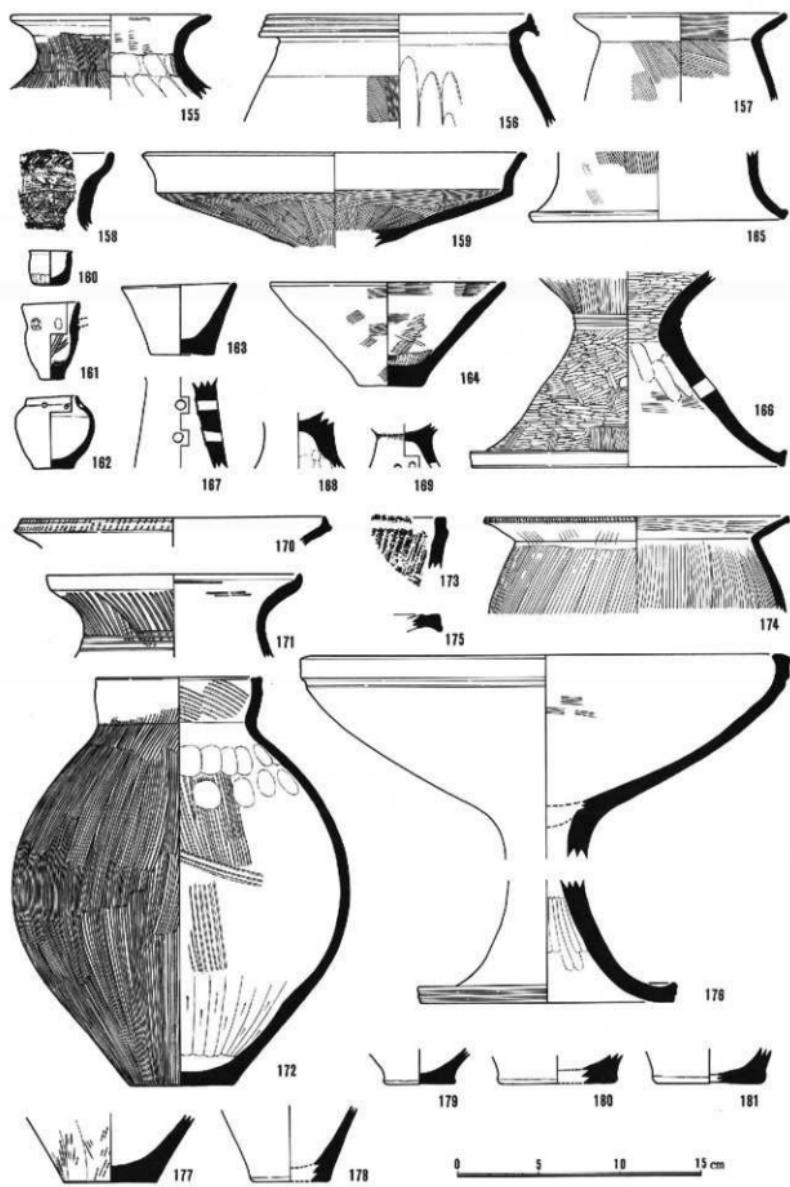


第5トレンチ (109~125・A~F)

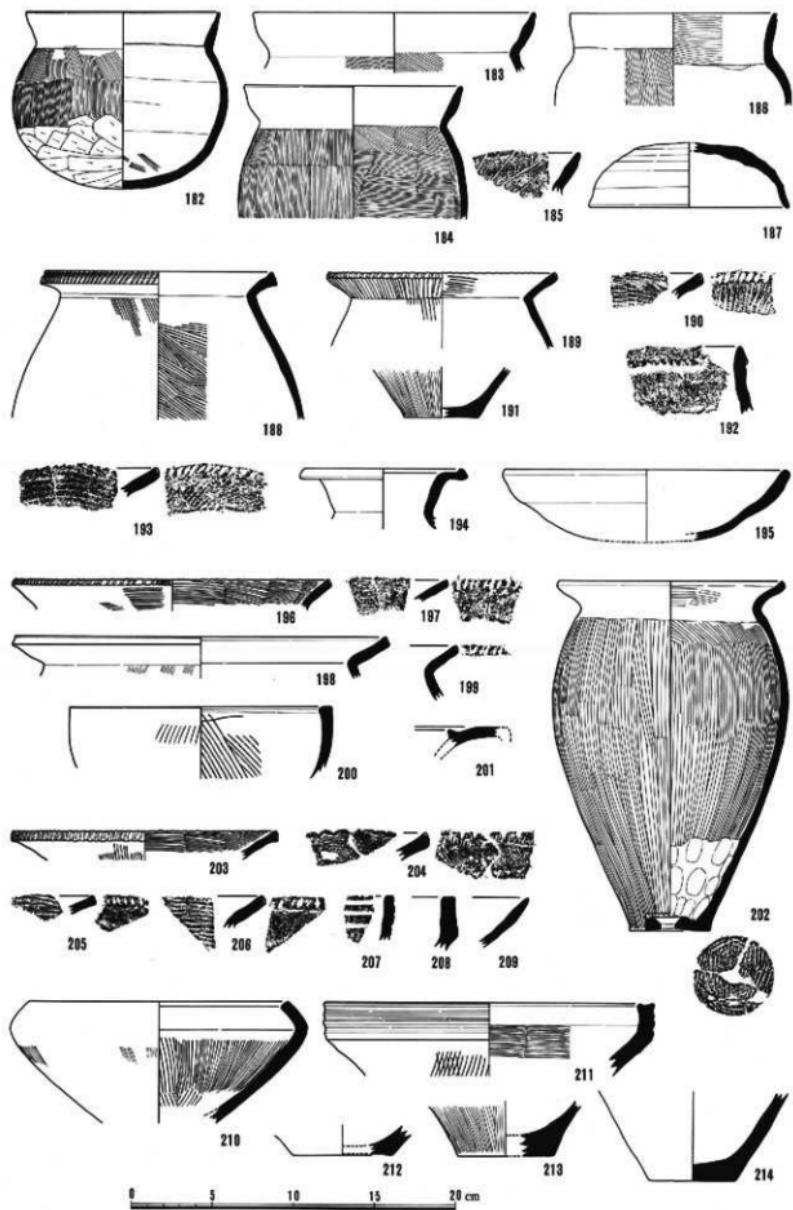


竪穴住居8 (126~139)、竪穴住居9 (140~149)、竪穴住居10 (150~154)

図版八四 今津町弘川遺跡（第Ⅱ次調査・遺物実測図）

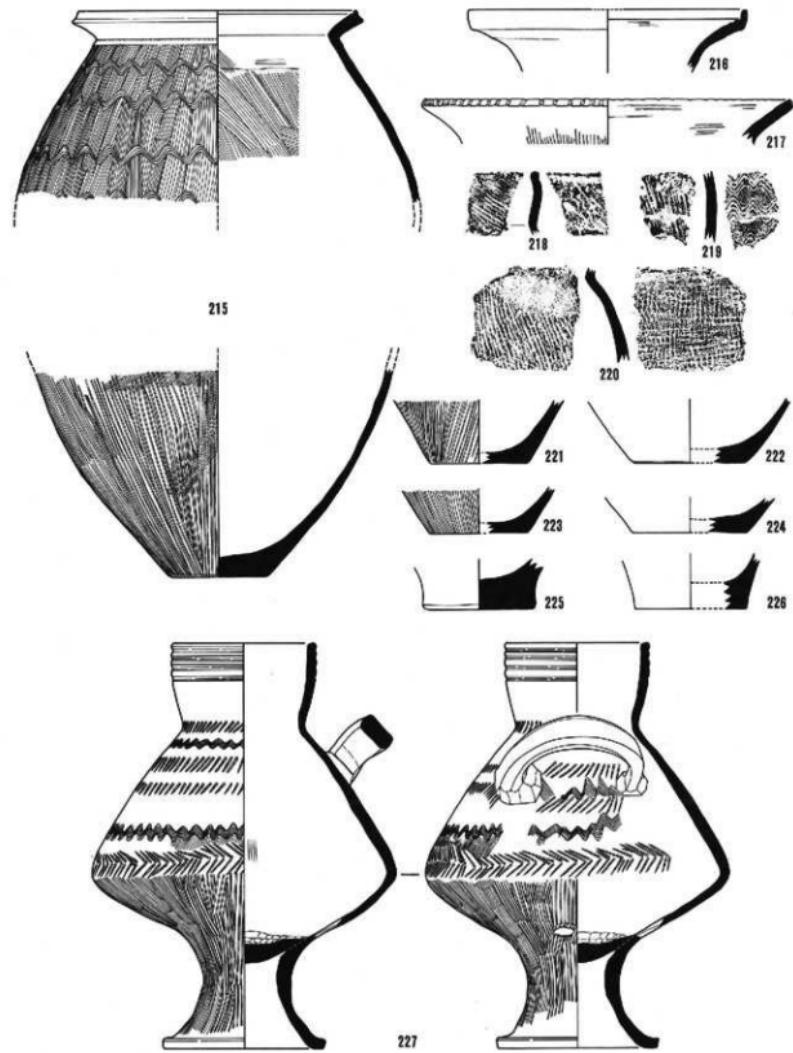


整穴住居11 (155~169), 整穴住居12 (170~181)



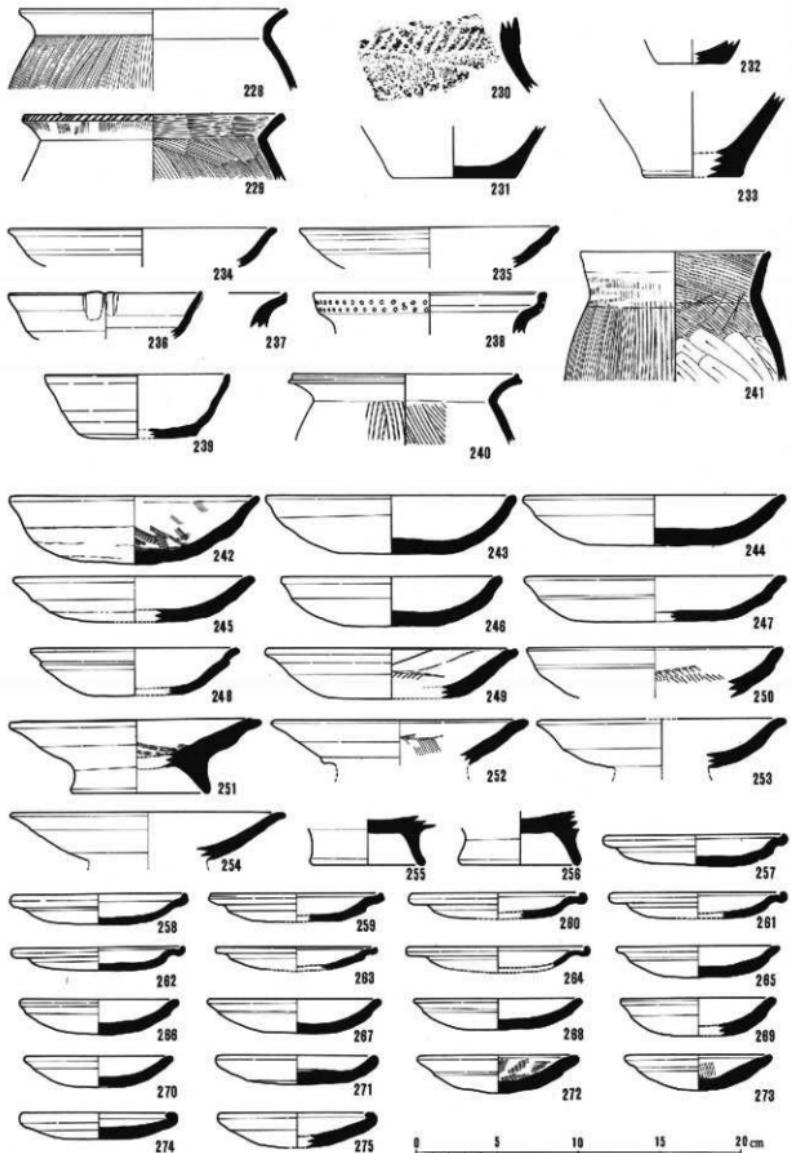
竪穴住居13（182～187）、竪穴住居14（188～192）  
土坑4（193）、土坑5（194）、ピット1（195）、  
土坑6（196～202）、土坑7（203～214）

圖版八六  
今津町弘川遺跡（第Ⅱ次調査・遺物実測図）

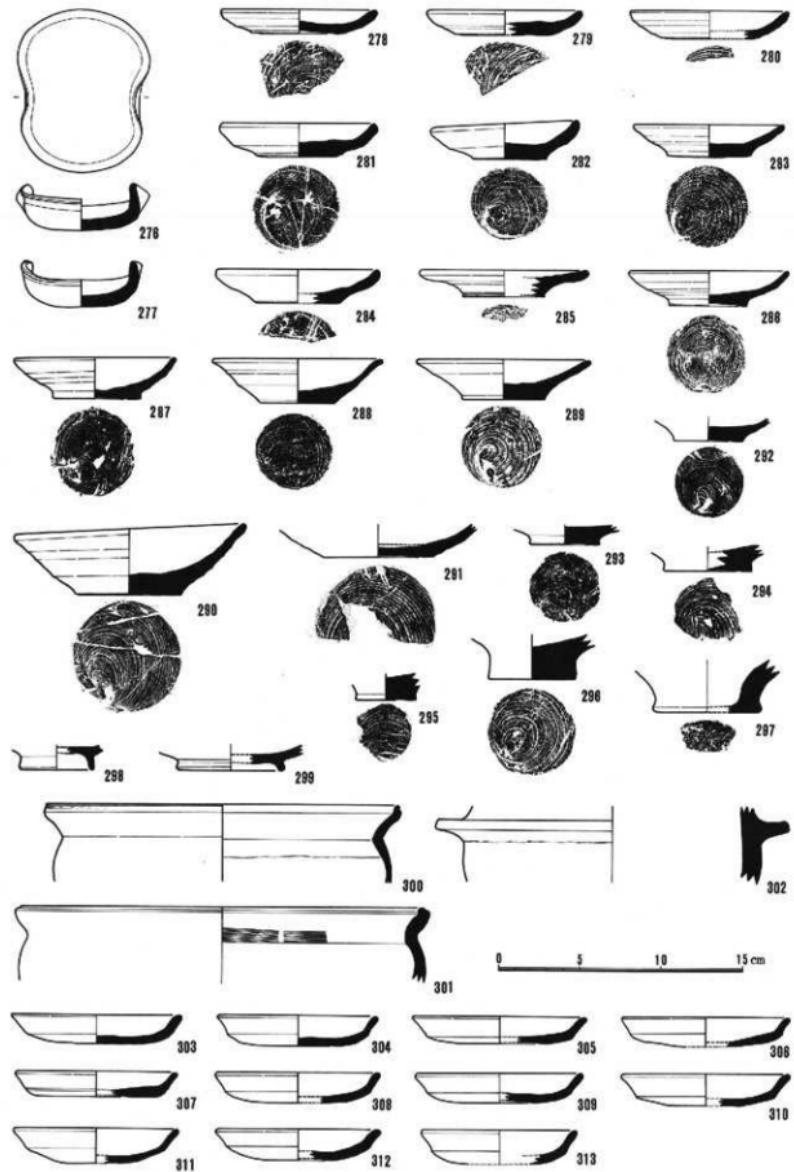


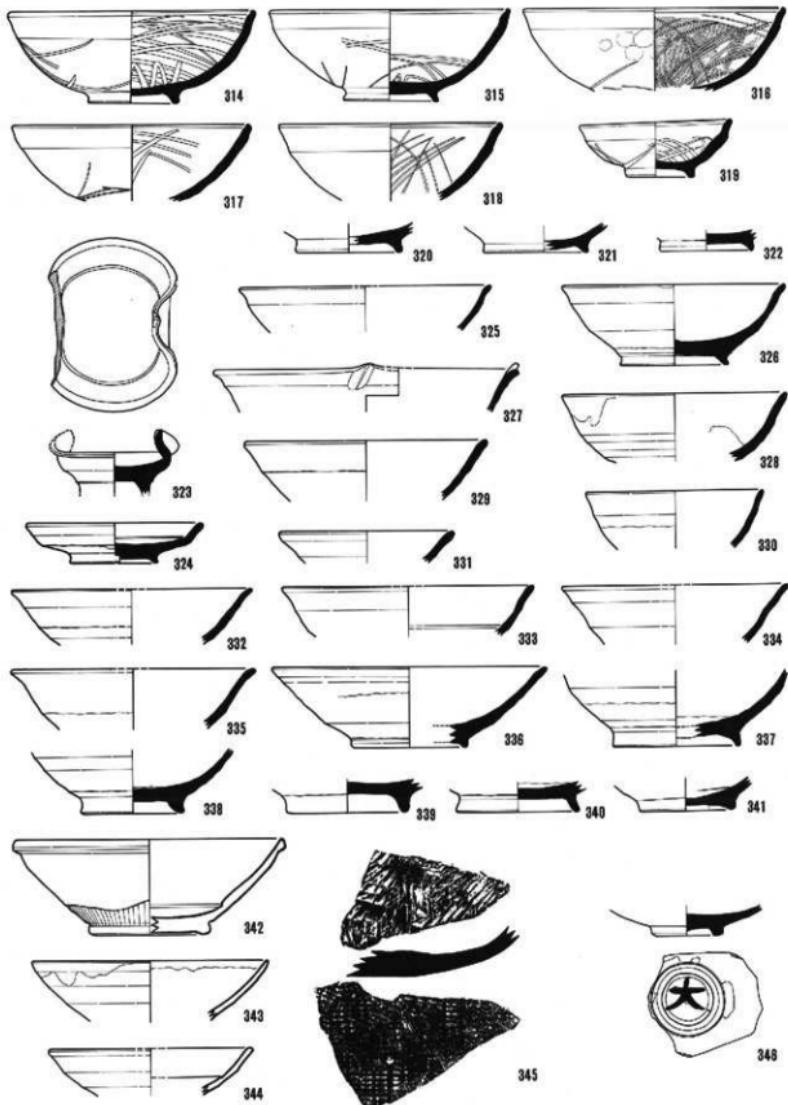
0 5 10 15 20 cm

方形圓溝墓

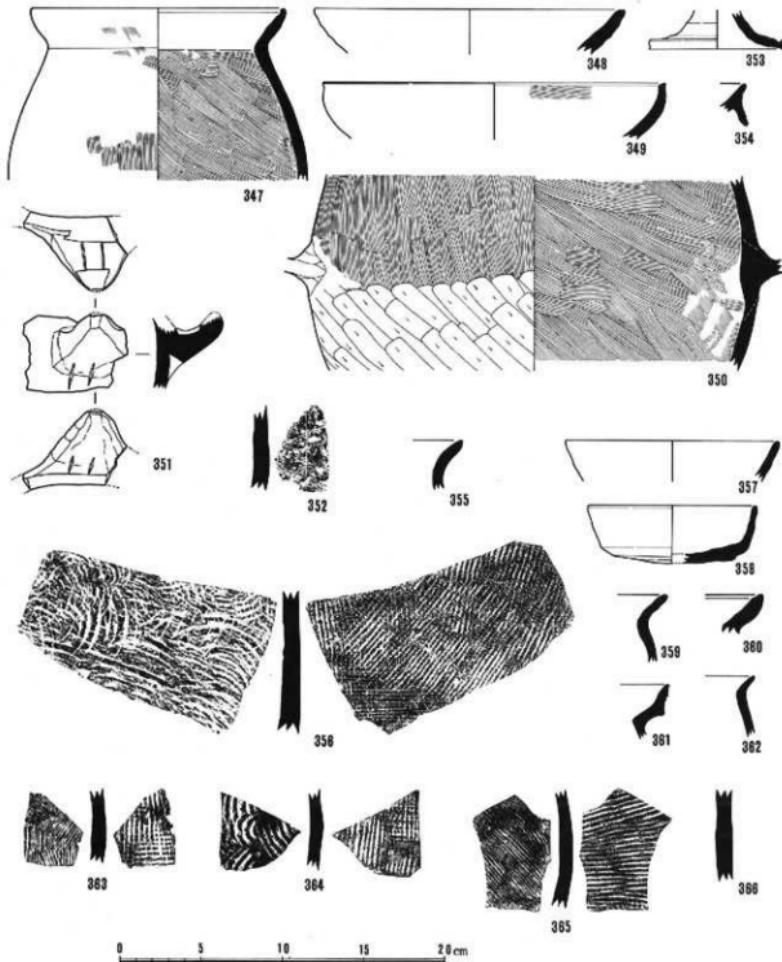


第10トレンチ落ち込み (228~233), 土坑9 (234~238),  
土坑10 (239), 土坑11 (240), 溝1 (241), 土坑12 (242~275)

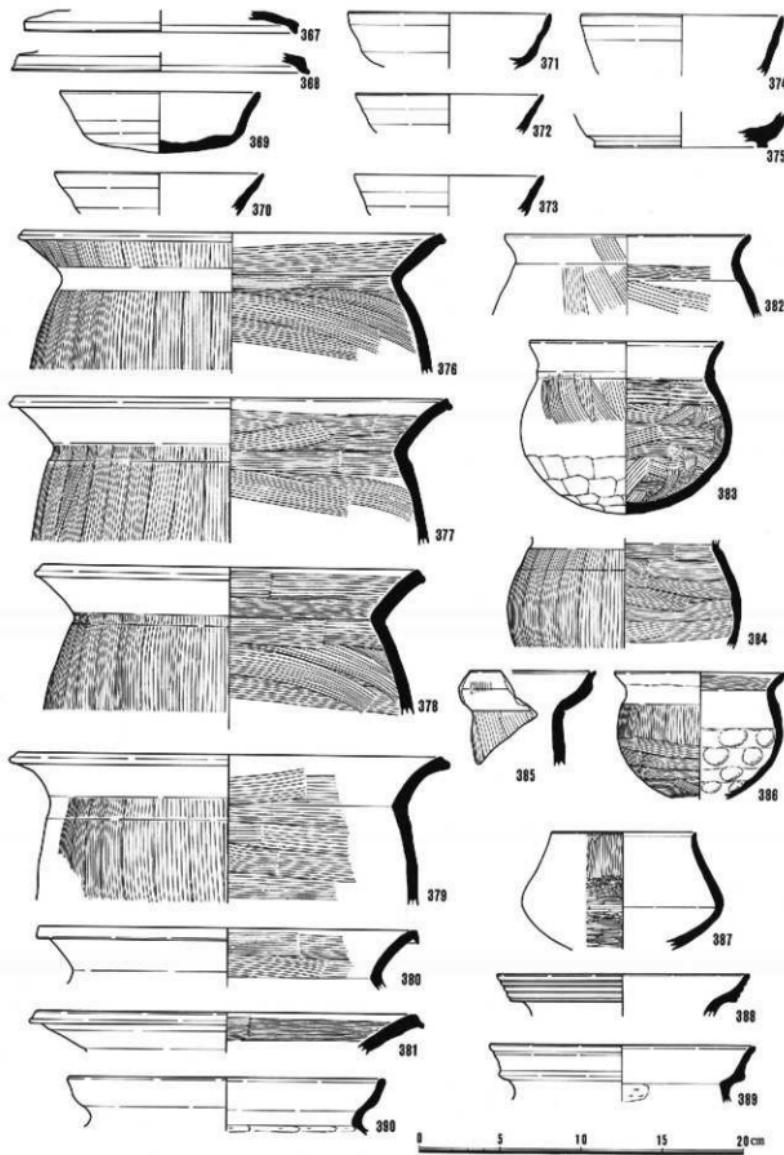




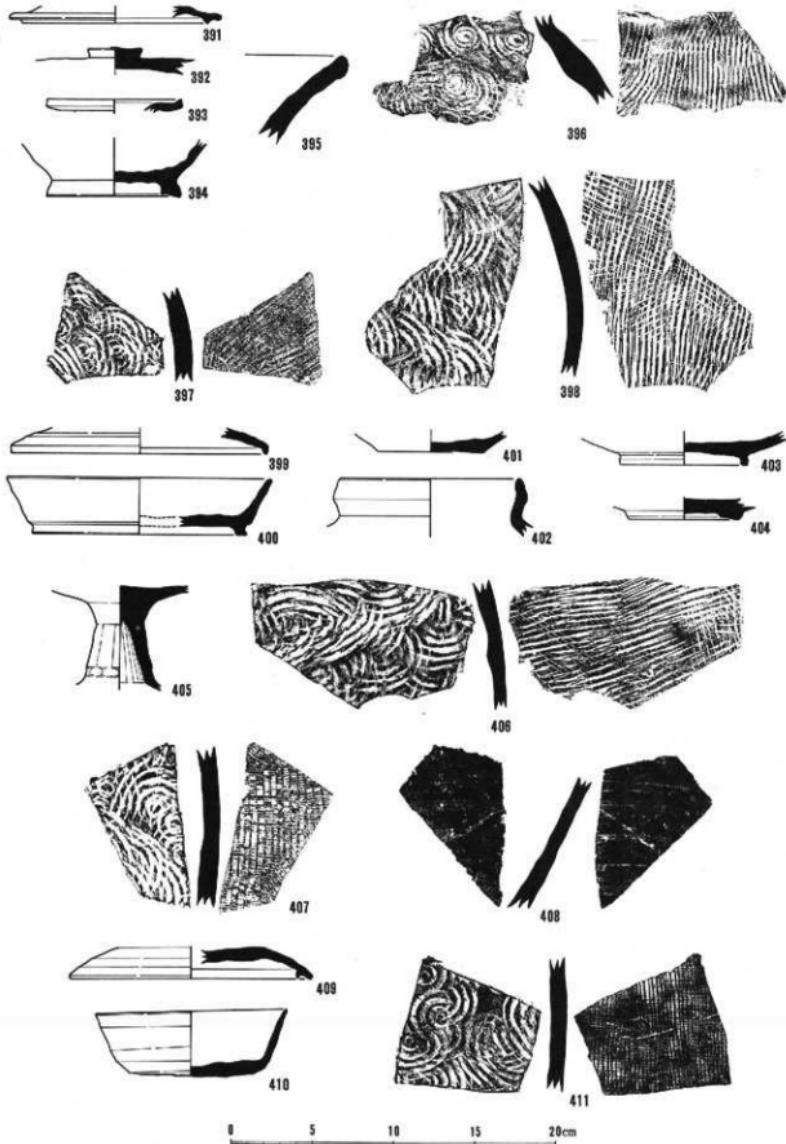
0 5 10 15 20 cm



竪穴住居16(347)、土坑13(354)、竪穴住居17(355・356)、土坑14(361・363)、  
土坑15(362)、竪穴住居18(357～360・364～366)

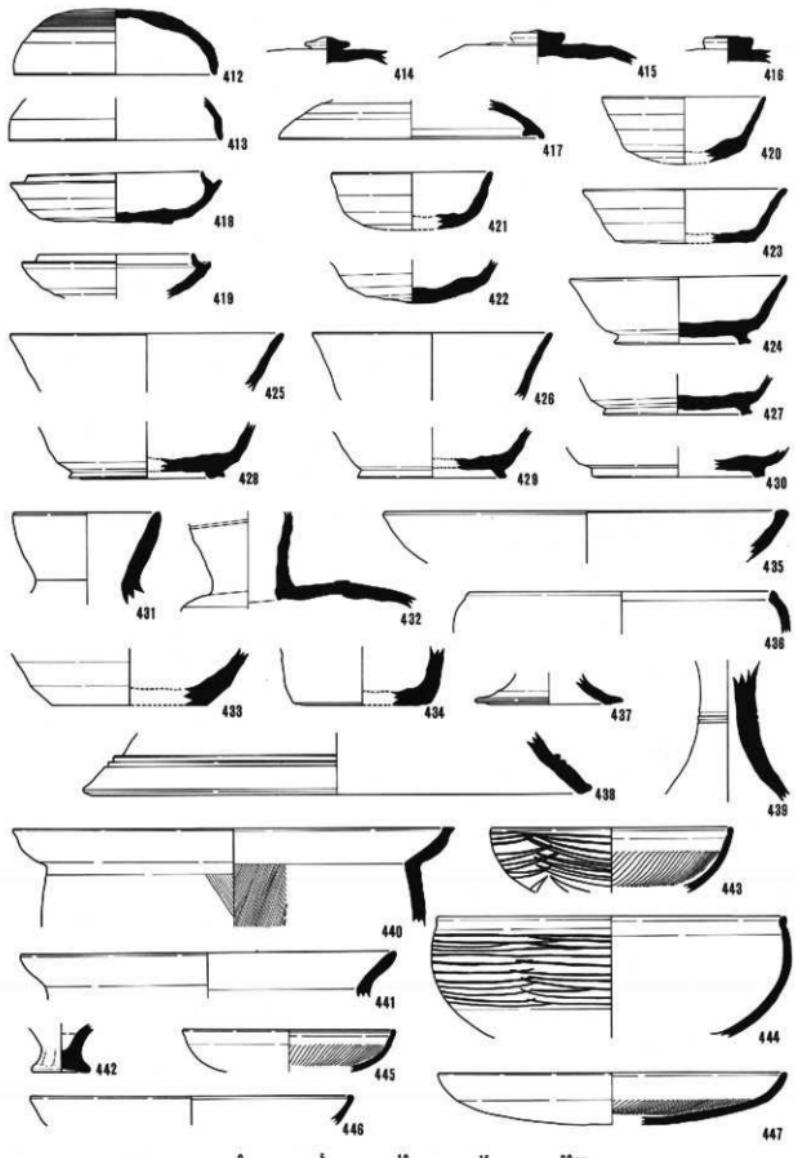


図版九二 今津町弘川遺跡（第Ⅲ次調査・遺物実測図）

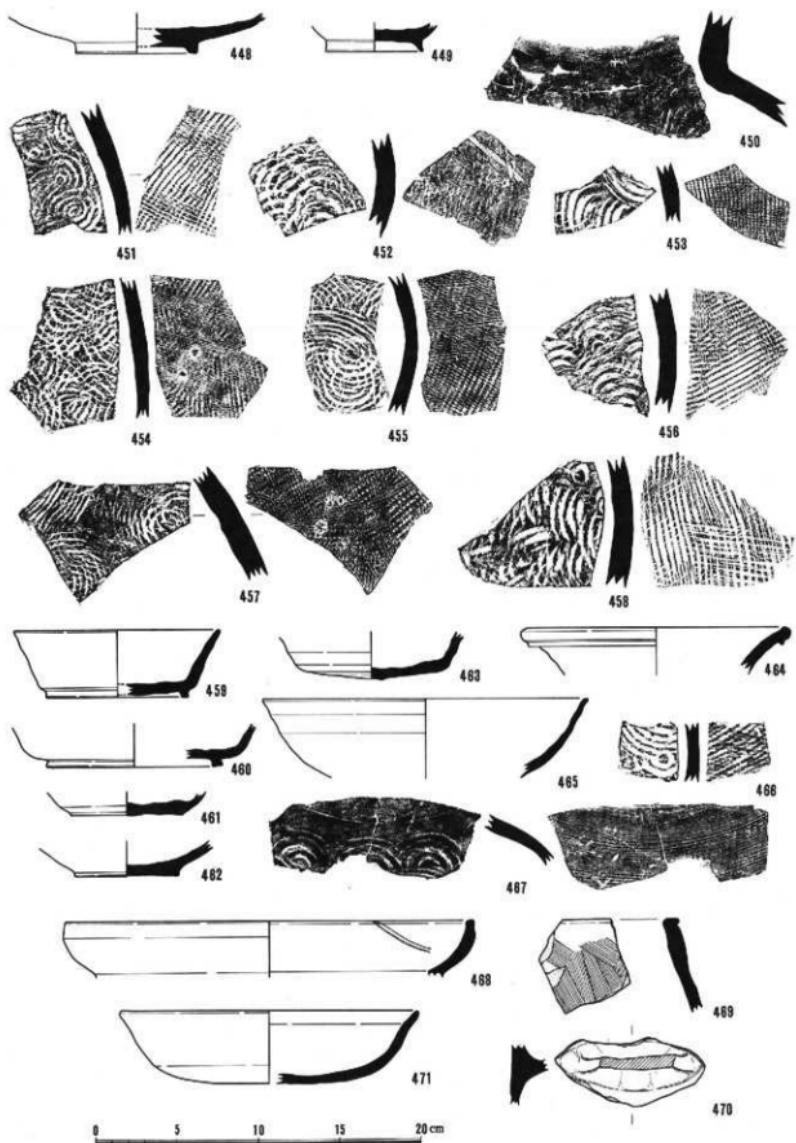


第Gトレンチ溝4 (391~398)、第Aトレンチ溝4 (399~408)、  
第Bトレンチ溝4-A (409~411)

図版九三 今津町弘川遺跡（第三回調査・遺物実測図）

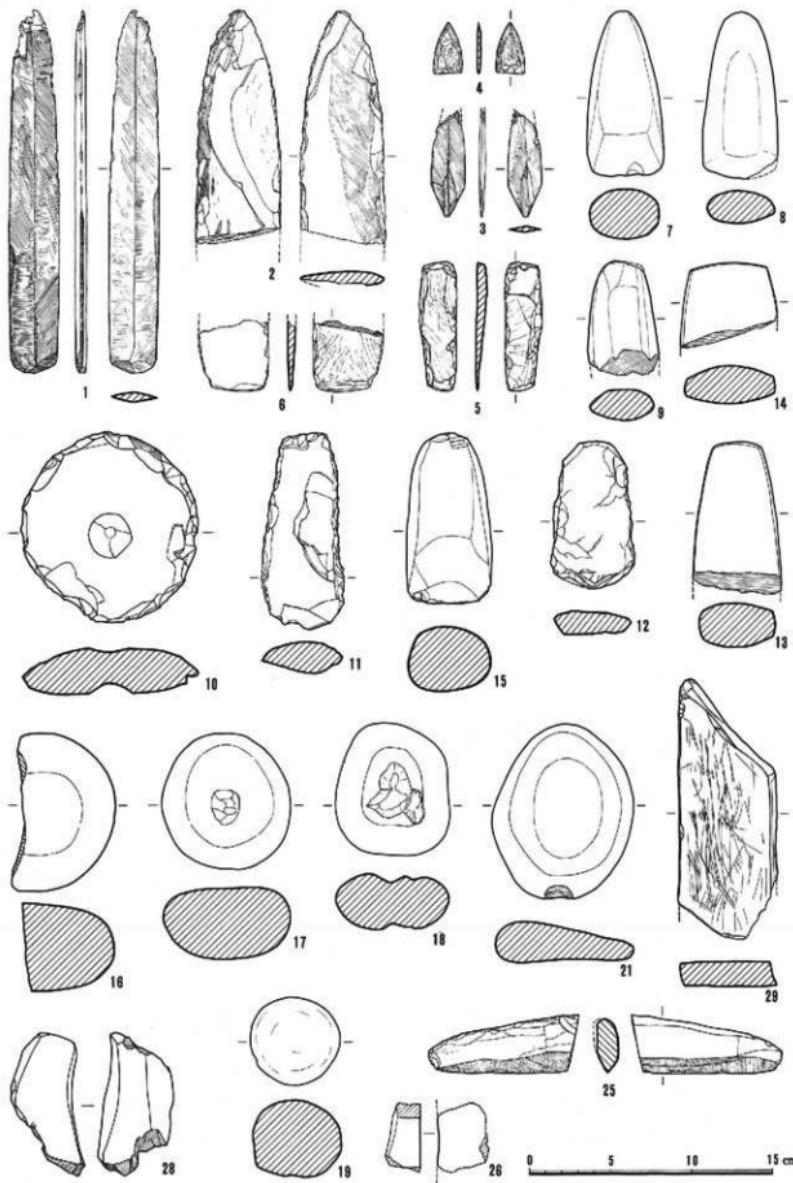


第B トレンチ溝4-B

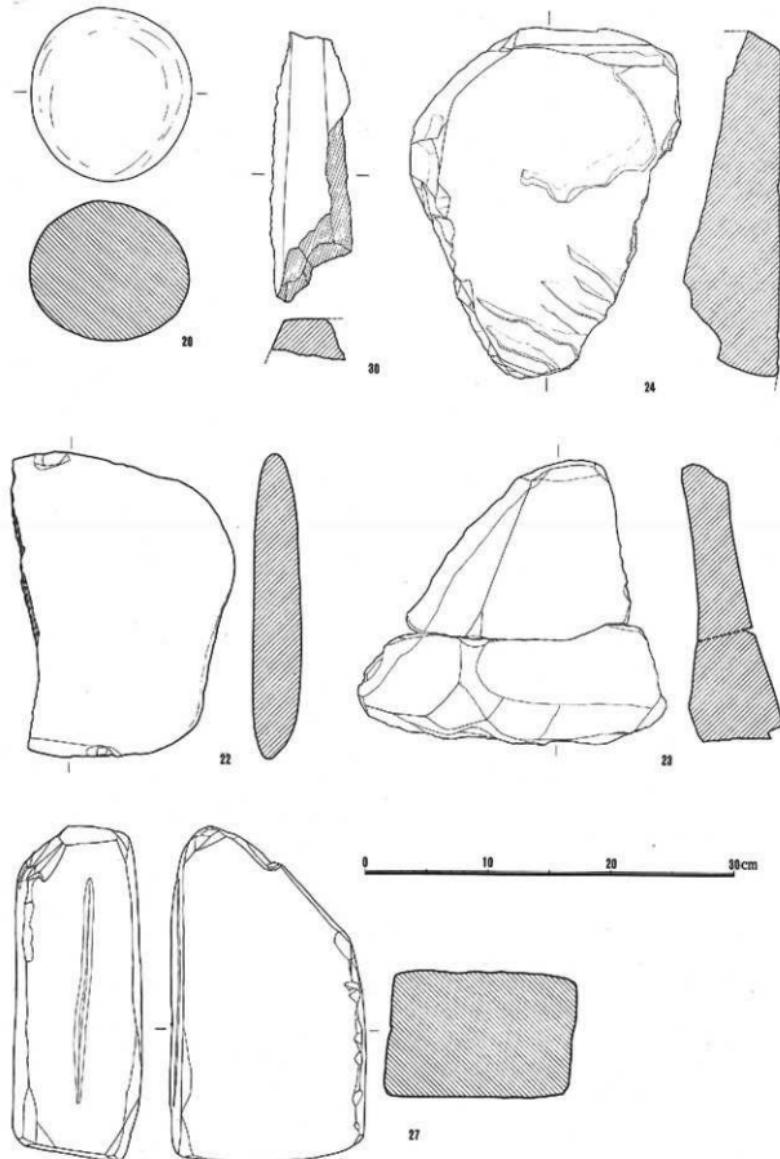


第Bトレンチ溝4-B (448~458), 第Cトレンチ溝4-B (459~467)  
第Aトレンチ溝5 (468~470), 第Fトレンチ溝6 (471)

図版九五  
今津町弘川遺跡（第1・II次調査・石製品実測図）



豊穴性居9(1・29), 土坑8(2), 溝1(3・10・13・16~18), 表採(11), 土坑12(5・15・28),  
第10トレンチ落ち込み(4), 豊穴住居4(8・9), 豊穴住居12(6・7・19・25), ピット2(12),  
方形周溝墓(14・21), 豊穴性居1(26)



竪穴住居9 (20・22~24), 竪穴住居12 (27), 溝4 (30)

1981  
昭和56年3月

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅳ-3

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

印刷 富士出版印刷株式会社

大津市札の辻4番20号

TEL(0775)23-2580

ふとじ